

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第663集

ち びい
千鶏Ⅳ遺跡発掘調査報告書

地域連携道路整備事業主要地方道重茂半島線関連遺跡発掘調査

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第663集

千鶏Ⅳ遺跡発掘調査報告書

2017

岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター
(公財)岩手県文化振興事業団

2017

岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター
(公財) 岩手県文化振興事業団

千鷲Ⅳ遺跡発掘調査報告書

地域連携道路整備事業主要地方道重茂半島線関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、この地に住み生きてきた人々の痕跡であり、県民のみならず、国民的な遺産であることから、将来にわたって保存され、広く理解と活用がなされることが望まれます。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団は、埋蔵文化財センター設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その記録を残し保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、地域連携道路整備事業主要地方道重茂半島線に関連して平成26年度及び平成27年度に発掘調査が行われた宮古市千鶴Ⅳ遺跡の調査成果をまとめたものです。千鶴Ⅳ遺跡では、縄文時代前期から晩期の遺物が集中して見つかるとともに、確認された竪穴住居跡などから当時の集落の一端が判明いたしました。調査によって見つかった地域の宝は、東日本大震災で被災された宮古市の皆さんによって発掘されたものです。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究など未来に希望を感じる拠り所として役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、調査を委託された岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター、ご助言を賜りました宮古市教育委員会、ならびに調査にご協力いただいた重茂、千鶴地区の方々をはじめとする関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成29年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 菅野 洋樹

例 言

- 1 本書は岩手県宮古市重茂13地割55-1他に所在する千鷲IV遺跡の発掘調査を記録した報告書である。
- 2 本遺跡の発掘調査は、地域連携道路整備事業主要地方道重茂半島線建設に伴い、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。本調査は、岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センターと岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の協議を経て、岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センターの委託を受けた公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが行った。
- 3 岩手県遺跡台帳における各遺跡の遺跡コード・調査略号は以下のとおりである。
【千鷲IV遺跡】LG75-0248 TKIV-14・15
- 4 各遺跡の野外調査実施期間・調査面積・室内整理期間、各担当者は以下のとおりである。
〔野外調査〕平成26年9月16日～同11月7日/2,000㎡/佐藤淳一・佐藤あゆみ
平成27年4月9日～7月30日/8,400㎡/杉沢昭太郎・藤原雅仁・澤美咲・白戸このみ
〔室内整理〕平成26年12月1日～平成27年3月31日/佐藤淳一
平成27年11月1日～平成28年3月31日/杉沢昭太郎・澤美咲
- 5 本文の執筆は、岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター…Ⅰ「調査に至る経過」、佐藤…Ⅱ・Ⅳ、杉沢…Ⅲ、Ⅴ、Ⅶと分担した。
- 6 本書中の平面座標値には、平面直角座標第X系（世界測地系）を用いた。
- 7 基準点測量は平成26年9月、平成27年5月に実施し、これを元に設定した区画杭を調査時に使用した。
- 8 基準点測量業務は釜石測量設計株式会社、（有）スカイ測量設計に委託した。
- 9 空中写真撮影は、東邦航空株式会社に委託した。
- 10 各種試料の分析・鑑定等は下記の機関に委託した。
花崗岩研究会（石質鑑定）、株式会社加速器分析研究所（放射性炭素年代測定）
- 11 野外調査では下記の機関の協力を得た。（敬称略）
岩手県教育委員会生涯学習文化課、宮古市教育委員会
- 12 これまでに、調査成果の一部を現地説明会資料、発掘調査概報などで公表しているが、本書と記載事項が異なる場合はすべて本書が優先する。
- 13 本遺跡の調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の立地と環境	
1	遺跡の位置	2
2	地理的・歴史的環境	3
3	地質的・地形的環境	3
4	周辺の遺跡	6
III	調査・整理の方法	
1	野外調査	8
2	室内整理	9
IV	平成26年度調査	
1	検出遺構	16
(1)	竪穴住居跡	16
(2)	土坑	18
(3)	焼土	21
(4)	その他の遺構	21
2	出土遺物	22
V	平成27年度調査	
1	概要	47
2	基本土層	47
3	検出遺構	47
(1)	竪穴住居跡	47
(2)	土坑	53
(3)	溝跡	53
(4)	その他の遺構	53
4	出土遺物	54

VI 自然科学分析	87
-----------	----

VII 総括	91
--------	----

報告書抄録	139
-------	-----

目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	6
第2表 縄文土器観察表 (H26)	41
第3表 石器類観察表 (H26)	44
第4表 土坑類観察表 (H27)	69
第5表 柱穴一覧表 (H27)	84
第6表 縄文・弥生土器観察表 (H27)	84
第7表 土師器観察表 (H27)	85
第8表 石器類観察表 (H27)	85
第9表 銭貨観察表 (H27)	86

図 版 目 次

第1図 岩手県図と遺跡位置	1	第15図 土坑3、焼土	26
第2図 遺跡の位置	2	第16図 SX01~03①	27
第3図 北上山地の地質略図	4	第17図 SX01~03②	28
第4図 周辺の遺跡	7	第18図 出土遺物1	29
第5図 遺跡範囲と調査区	10	第19図 出土遺物2	30
<平成26年度調査>		第20図 出土遺物3	31
第6図 遺構配置図1	11	第21図 出土遺物4	32
第7図 遺構配置図2、基本層序1	12	第22図 出土遺物5	33
第8図 遺構配置図3、基本層序2	13	第23図 出土遺物6	34
第9図 遺構配置図4、基本層序3	14	第24図 出土遺物7	35
第10図 遺構配置図5、基本層序4	15	第25図 出土遺物8	36
第11図 S101 竪穴住居跡1	16	第26図 出土遺物9	37
第12図 S101 竪穴住居跡2	17	第27図 出土遺物10	38
第13図 土坑1	24	第28図 出土遺物11	39
第14図 土坑2	25	第29図 出土遺物12	40

<平成27年度調査>

第30図	遺構配置図6	45
第31図	遺構配置図7	46
第32図	S I O 2 堅穴住居跡	56
第33図	S I O 3・05・09 堅穴住居跡1	57
第34図	S I O 3・05・09 堅穴住居跡2	58
第35図	S I O 3・06・09 堅穴住居跡	59
第36図	S I O 4・10 堅穴住居跡1	60
第37図	S I O 4・10 堅穴住居跡2	61
第38図	S I O 7・08 堅穴住居跡	62
第39図	溝跡、土坑4	63
第40図	土坑5、屋外炉跡、捨て場1	64
第41図	土坑6	65
第42図	土坑7	66

第43図	捨て場2、沢跡・レンチ1	70
第44図	沢跡・トレンチ2	71
第45図	出土遺物13	72
第46図	出土遺物14	73
第47図	出土遺物15	74
第48図	出土遺物16	75
第49図	出土遺物17	76
第50図	出土遺物18	77
第51図	出土遺物19	78
第52図	出土遺物20	79
第53図	出土遺物21	80
第54図	出土遺物22	81
第55図	出土遺物23	82
第56図	出土遺物24	83
第57図	出土遺物25	84

写真図版目次

<平成26年度調査>

写真図版1	千鳥IV遺跡遠景(東から)	94
写真図版2	遺跡近景	95
写真図版3	調査区近景ほか	96
写真図版4	調査区近景、基本土層、 S I O 1 堅穴住居跡	97
写真図版5	S I O 1 炉跡、土坑1	98
写真図版6	土坑2	99
写真図版7	土坑3	100
写真図版8	土坑4、焼土、その他の遺構1	101
写真図版9	その他の遺構2	102
写真図版10	出土遺物1	103
写真図版11	出土遺物2	104
写真図版12	出土遺物3	105
写真図版13	出土遺物4	106
写真図版14	出土遺物5	107
写真図版15	出土遺物6	108
写真図版16	出土遺物7	109
写真図版17	出土遺物8	110

<平成27年度調査>

写真図版18	遺跡遠景(平成27年度調査区)	111
写真図版19	調査区近景	112
写真図版20	遺跡近景ほか	113
写真図版21	S I O 2 堅穴住居跡	114
写真図版22	S I O 2・03 堅穴住居跡	115
写真図版23	S I O 3・04・10 堅穴住居跡	116
写真図版24	S I O 4・10 堅穴住居跡	117
写真図版25	S I O 4・05 堅穴住居跡	118
写真図版26	S I O 5・06 堅穴住居跡	119
写真図版27	S I O 6・07・08 堅穴住居跡	120
写真図版28	S I O 7・08 堅穴住居跡	121
写真図版29	S I O 9 堅穴住居跡	122
写真図版30	S I O 4・09・10 堅穴住居跡	123
写真図版31	S I O 4・10 堅穴住居跡、土坑5	124
写真図版32	土坑6	125
写真図版33	土坑7	126
写真図版34	土坑8	127
写真図版35	屋外炉跡、溝跡、捨て場、沢跡	128

写真図版36	沢跡、確認トレンチ	129	写真図版41	出土遺物13	134
写真図版37	出土遺物9	130	写真図版42	出土遺物14	135
写真図版38	出土遺物10	131	写真図版43	出土遺物15	136
写真図版39	出土遺物11	132	写真図版44	出土遺物16	137
写真図版40	出土遺物12	133	写真図版45	出土遺物17	138

I 調査に至る経過

千鶴IV遺跡は、東日本大震災津波復興に伴う「地域連携道路整備事業主要地方道重茂半島線千鶴工区」の道路改良工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

主要地方道重茂半島線は宮古市東部に位置し、国道45号と重茂半島の各集落を結ぶ道路である。代替となる迂回路はなく、漁港関係の物流、地域住民の生活交通および緊急時の搬送など重要な役割を担っている。事業対象地域である「千鶴工区」においては、東日本大震災津波により浸水し、がれきや道路崩落により道路が寸断され、住民が孤立するなど甚大な被害が生じた事から、同規模の津波が発生しても浸水しない道路を整備し、災害時等における確実な緊急輸送や代替機能を確保するために事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、沿岸広域振興局土木部宮古土木センターから平成25年10月4日付け宮土セ第564号「主要地方道重茂半島線地域連携道路整備事業における埋蔵文化財の試掘調査について(依頼)」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成25年11月25日に試掘調査を実施し、工事に着手するには千鶴IV遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成25年11月28日付教生第1232号「埋蔵文化財の試掘調査について(回答)」により当土木センターへ回答してきた。

その結果を踏まえて当土木センターは岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成26年4月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(沿岸広域振興局土木部)



第1図 岩手県図と遺跡位置

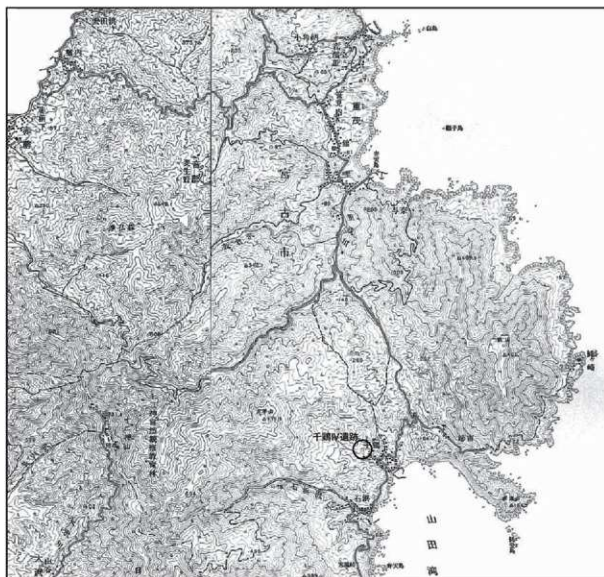
II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置

千鷲IV遺跡は、岩手県宮古市重茂第12地割ほかに所在し、JR山田線豊間根駅の東約9km、千鷲小学校跡から約300m北西に位置している。国土地理院発行の2万5千分の1地形図「鮎ヶ崎」に含まれ、遺跡の中心付近は北緯39° 31′ 59″、東経142° 01′ 44″となる。

遺跡は標高40m～50m付近に広がっており、周囲の尾根部に発達した小谷から供給された土砂の堆積によって形成された比較的平坦な部分に存在している。

本遺跡の所在する宮古市は、岩手県太平洋岸のほぼ南北中央部付近に位置しており、重茂半島には本州最東端の岬である鮎ヶ崎がある。



1:5,000重茂

第2図 遺跡の位置

2 地理的・歴史的環境

宮古市は三陸海岸のほぼ中央に位置し、北部を岩泉町、西部を盛岡市、南部を山田町、東部を太平洋に面している。面積の大半は山林原野に占められており、平野部は少ない。面積は1259.89 km²に及ぶ。

市内に存在する様々な遺跡からは、住居跡や貝塚、土器や石器などが多量に出土しており、縄文時代早期からの人々の生活の痕跡を見ることができる。中世の鎌倉時代には、源氏ゆかりの閉伊頼基が閉伊郡を拝領したと言われ、戦国時代まで山や川など自然の地形を利用した要害である城館跡が50余り存在している。近世、江戸時代には南部家盛岡藩領となって代官所が置かれ、宮古湾の豊富な海産物を宮古港（鉾ヶ崎）から江戸へと送る交易で、領内屈指の繁華地に発展した。明治維新後は、明治22年の「明治の大合併」、昭和16年の市制施行（旧宮古市）、昭和30年の「昭和の大合併」を経て、岩手県沿岸の中核都市へと発展し、平成17年6月6日の旧宮古市・旧田老町・旧新里村の合併、平成22年1月1日には旧川井村との合併という「平成の大合併」を行い現在に至っている。

当該地域の気候は、他の三陸沿岸地域同様、一般的に冬の降雪量は少なく、気温も内陸地域に比べ温暖である。夏はいわゆる「やませ」の影響を受け比較的涼涼で、年間を通じて寒暖の差が少ない気候である。

三陸海岸は記録上、869（貞観11）年以降現在に至るまで幾度となく津波に襲われた地域である。宮古市もその例外ではなく、1896（明治29）年の大津波、1933（昭和8）年の三陸大津波、1960（昭和35）年のチリ地震津波、1968（昭和43）年の十勝沖地震津波、そして2011（平成23）年の東日本大震災津波において、その都度大きな被害を受け、多くの尊い人命財産を失ってきた。現在はその復興に向け、社会資本の整備をはじめとするまちづくりが進められている。

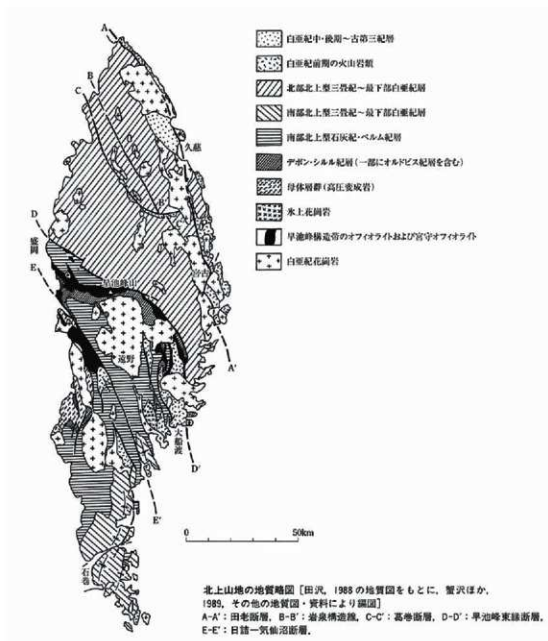
3 地質的・地形的環境

三陸海岸を含む北上山地一帯は、主として複雑に変形した古生代・中生代の堆積岩と、それを貫く白亜紀の花崗岩体からなっており、地形的には一体の山地であるが、地質構造上はいわゆる早池峰構造帯を境に、南部北上山地と北部北上山地とに区別される。千鶴IV遺跡の位置する重茂半島は白亜紀の火山岩類及び花崗岩を主体とする地質で形成されている。

三陸海岸は北の青森県八戸付近から南の宮城県牡鹿半島まで、南北の直線距離で約200kmの太平洋岸の呼称である。地形的外観上、海岸線全体の北半部は切り立った海食崖が続くのに対し、宮古より南では海岸線は屈曲に富み、数多くの湾入と岬が連なり対照的な風景を成している。

三陸海岸北部では、海食崖の発達する直線的な海岸線と、その背後に更新世中・後期の海成段丘群が発達している。この段丘の最高位面の標高は久慈西方で280mに達し、南下するにつれて高度を低下させ、その分布も海岸よりに移動し、田老西方で200mまで低下し、宮古南方で140mになる。

一方、三陸海岸南部には古い海成段丘はほとんど分布しておらず、やや平坦な地形が小さな半島の尾根部を削るようにして、現在の汀線と並行して断片的に発達している。このような地形面は更新世に形成された海成段丘と考えられており、標高は十数m～70mとなっている。この地域で海成段丘の分布が確認できるのは山田湾以南で、複数段の段丘が発達するのは越喜来湾、大船渡湾、広田湾、気仙沼湾、志津川湾などの瀬れ谷の谷壁である。



第3図 北上山地の地質略図

三陸海岸に発達する海成段丘群の対比試案
 [米倉, 1966; 宮内, 1985; 三浦, 1966, 1968; 八木, 2001をもとに作成]

地域 ステージ	気仙沼周辺 三浦 (1966)	大船渡周辺 三浦 (1968)	陸中海岸南部 三浦 (1966)	陸中海岸北部 米倉 (1966)	上北平野 宮内 (1985)
5a					聖山 面
5c	片浜段丘	門ノ浜段丘			根城 面
5e	若月段丘	大船渡段丘		種市 面	高館 面
7	松岩段丘	盛段丘		有家 面	天狗 面
9	新城段丘	丸森段丘		(七 面	七百 面
11	三峯段丘	高田段丘		麦生 面	高位 面
13			吉里段丘	俣 面	
15				三崎 面	
17			田老段丘	広野 面	
19			楳段丘	水無 面	



陸中海岸南部に分布する高位段丘群とそれらの高度変化 [三浦, 1968]

三陸沿岸に見られる沖積平野は、北上山地東斜面を流れ太平洋に注ぐ諸河川の流路長が短く、しかも中・古生代の硬岩からなる斜面を侵食している。このため、排出土砂量が少なく、河口部の溺れ谷があまり埋もれておらず、比較的流域面積の広い河川の流入する湾奥部に、小規模な沖積平野が見られる程度である。

重茂半島は全般として、海岸沿いの一部にごく小規模な沖積平野が点在し、そこに集落が形成されていることを確認することができるが、その他のほとんどの地域は丘陵及び山地である。半島は山田町との境界にある十二神山(海拔731m)を最高点にして、脊梁部を標高200m以上の十二神山山地帯が北部まで伸びて半島を東西に二分している。遺跡はこの東西に二分された東側では、北の閉伊崎から南の重茂川河口付近に至るまで、海沿いの断崖の上に形成されたやや平坦な丘陵地に分布している。一方、西側では宮古湾に面する海岸沿いの緩斜面に多く立地している。

今回調査を行った千鶴IV遺跡は、重茂半島の南東側に位置し、山田湾へ流れ込む小規模な河川の河口付近に形成された極小規模な沖積平野の最奥部から背後の丘陵地帯の尾根へと続く傾斜変換点に広がっている。遺跡付近の標高は30~40m程度であり、外見上は小規模河川に流れ込む土砂によって若干傾斜が緩くなった緩傾斜地に立地している。この地域における他遺跡の分布状況を見ると、おおむねこの傾斜変換点に沿って立地しており、当該遺跡もまたこの原則に当てはまっている。

4 周辺の遺跡

千鶴Ⅳ遺跡の周辺には、千鶴遺跡(4)、千鶴Ⅱ遺跡(3)、千鶴Ⅲ遺跡(2)、千鶴Ⅴ殿畑遺跡(1)が存在する。千鶴遺跡は昭和62年に宮古市教育委員会によって発掘調査が行われ、縄文時代前期初頭に相当する竪穴住居跡が30棟以上確認された。千鶴Ⅱ、千鶴Ⅲ、千鶴Ⅴ殿畑遺跡は昭和57年度に宮古市教育委員会によって遺跡の分布調査が行われており、いずれの遺跡からも縄文時代の土器片が出土している。

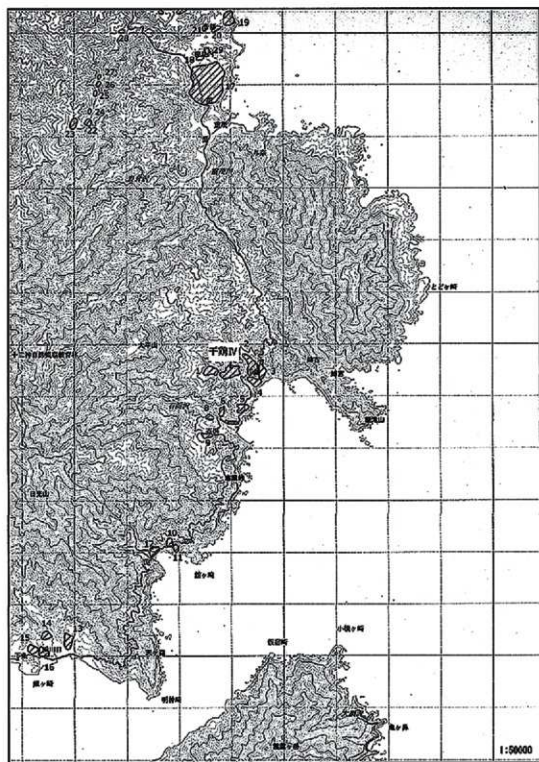
重茂川の北側にある丘陵地帯にある重茂館遺跡群(17)では、中世城館が確認されており、丘陵頂部を空堀で分断した2つの郭を帯郭がとり囲み、立陵の先端部に砦が伴うという構造の山城である。領主は重茂氏とされるが、重茂氏の出自については不明な点が多い。当該遺跡は平成2年度に発掘調査が行われており、縄文時代の遺物包含層から、中期後半を主体とする土器が比較的多く出土した。

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	よみがな	種別	時代	遺構遺物	所在地
1	千鶴Ⅴ殿畑	ちけいⅤとのはた	集落跡	縄文	縄文土器(中～後期)	宮古市重茂第13地割殿畑
2	千鶴Ⅲ	ちけいⅢ	集落跡	縄文	縄文土器(中～後期)	宮古市重茂第11地割千鶴上野
3	千鶴Ⅱ	ちけいⅡ	集落跡	縄文	縄文土器(前期)	宮古市重茂第11地割千鶴上野
4	千鶴	ちけい	集落跡	縄文	縄文土器(前・中・後期)	宮古市重茂第11地割千鶴上野
5	千鶴Ⅳ川向	ちけいⅣかわむかい	集落跡	縄文	縄文土器(前～後期)	宮古市重茂第14地割川向ほか
6	石浜Ⅱ	いしはまⅡ	散布地	縄文	縄文土器	宮古市重茂第16地割石浜
7	石浜Ⅰ	いしはまⅠ	集落跡	縄文	縄文土器(中～後期)	宮古市重茂第16地割石浜
8	石浜Ⅳ	いしはまⅣ	散布地	古代	土師器	宮古市重茂第16地割石浜
9	石浜Ⅲ	いしはまⅢ	散布地	縄文	縄文土器	宮古市重茂第19地割南大野
10	川代Ⅱ	かわしろⅡ	集落跡	縄文	縄文土器	宮古市重茂第22地割川代赤坂ほか
11	川代Ⅰ	かわしろⅠ	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)	宮古市重茂第21地割川代
12	川代Ⅲ	かわしろⅢ	散布地	縄文	縄文土器(中～後期)	宮古市重茂第22地割川代赤坂
13	多門	たもん	騎跡	縄文	スラッグ	山田町大沢浜川目
14	浜川目沢田Ⅱ	はまかわめさわだⅡ	集落跡	縄文	縄文土器	山田町大沢浜川目
15	浜川目沢田Ⅰ	はまかわめさわだⅠ	集落跡	縄文	縄文土器	山田町大沢浜川目
16	浜川目沢田Ⅲ	はまかわめさわだⅢ	散布地	縄文	縄文土器(前・中・後・晩期)	山田町大沢浜川目
17	重茂館遺跡群	おもえたいせきぐん	集落跡・城館跡	縄文・中世	縄文土器(前～晩期)、土師、空堀	宮古市重茂第1地割西大野、第2地割、第3地割石浜
18	笹見内Ⅰ	ささみないⅠ	散布地	縄文	縄文土器	宮古市重茂第2地割
19	宮部谷地頭Ⅱ	おとべやちがしらⅡ	散布地	縄文	縄文土器(中～後期)	宮古市宮部第1地割谷地頭
20	宮部谷地頭Ⅰ	おとべやちがしらⅠ	散布地	縄文	縄文土器(中～後期)	宮古市宮部第1地割谷地頭
21	宮部道磯	おとべおいそ	散布地	縄文	縄文土器	宮古市宮部第3地割道磯
22	栗生野Ⅴ	むぎおいのⅤ	散布地	縄文	縄文土器	宮古市宮部第7地割坂ノ上ほか
23	栗生野Ⅳ	むぎおいのⅣ	散布地	縄文・古代	縄文土器(後期)、土師器	宮古市宮部第7地割坂ノ上
24	栗生野Ⅲ	むぎおいのⅢ	散布地	縄文	縄文土器	宮古市宮部第7地割坂ノ上
25	栗生野Ⅱ	むぎおいのⅡ	散布地	縄文	縄文土器	宮古市宮部第7地割坂ノ上
26	栗生野Ⅰ	むぎおいのⅠ	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)	宮古市宮部第4地割須賀長根
27	栗生野Ⅰ	むぎおいのⅠ	散布地	縄文	縄文土器	宮古市宮部第7地割坂ノ上
28	類の平	くまのひら	散布地	縄文	縄文土器(前期)	宮古市宮部第4地割須賀長根

参考文献

- 小池一之・田村俊和・鎮西清高・宮城豊彦(2005)『日本の地形3 東北』
 宮古市教育委員会(1999)「千鶴Ⅳ遺跡－宮古市水産課千鶴地区漁港村総合整備事業関係－」
 宮古市埋蔵文化財調査報告書54
 宮古市教育委員会(1989)「千鶴遺跡－昭和62年度発掘調査報告書－」宮古市埋蔵文化財調査報告書16
 宮古市教育委員会(1992)「重茂館遺跡群－第1次発掘調査報告書－」宮古市埋蔵文化財調査報告書31
 宮古市教育委員会(1983)「宮古市遺跡分布調査報告書1」宮古市埋蔵文化財調査報告書3



第4図 周辺の遺跡

Ⅲ 調査・整理の方法

1 野外調査

調査区の設定と遺構の命名

千鶴IV遺跡は平成26年度に2,000㎡、平成27年度には8,400㎡を対象に調査されている。前者は主に山裾の緩斜面部、後者は主に山の中腹部と小規模な丘陵地形部分を対象としている。そのため本報告書では「平成26年度調査区」「平成27年度調査区」に分けて掲載することとした。平面直角座標（第X系：世界測地系）に合わせた基準点・補点をもとにして、遺構や地形測量を行った。

平成26年度 基準点1 X = -51190.600 Y = 102693.218 H = 50.968m

基準点2 X = -51273.139 Y = 102601.594 H = 46.724m

平成27年度 基準点1 X = -51160.239 Y = 102769.705 H = 62.114m

基準点2 X = -51120.035 Y = 102789.814 H = 74.777m

この基準点と区割付杭を基準として調査区および検出遺構や出土遺物の記録をとった。遺構外出土遺物に関しては第6図の調査区ごとに取り上げた。

遺構の名称

遺構名は遺構の種類に応じて略号を用いた。検出順にそれぞれ番号を付けて、SI01・SI02、SK01・SK02…のように命名した。精査の過程や終了後に検討した結果、遺構ではないと判断したものや、遺構の種類を変更した番号については、混乱を防止するために欠番とした。住居跡(SI) 土坑類(SK) その他(SX)。

試掘・粗掘（雑物除去）と遺構検出

平成27年度調査区では杉・松を主体とした山林であったため調査中に樹木伐採し、多量に出た樹木（丸太材）及び雑物（枝類）を調査区外へ運び出す作業も行った。それに引き続き調査区の各所にて試掘を行ない重機による表土掘削深度の参考にした。重機で遺構検出面のやや上層まで掘り下げ、続いて人力で掘り下げて遺構検出をした。場所によっては重機を使わず人力で表土除去を行っている。

精査・実測

検出遺構は、可能な限り基本通りに4分法、2分法で調査したが、複雑に重複する遺構では出来なかったものもある。そして精査の各段階において必要な図面の作成や写真撮影を適宜行った。遺構内出土の遺物は、埋土で可能な限り分層して取り上げ、底面出土や残存状態の良い遺物は写真撮影・図面作成後に取り上げた。遺構外出土の遺物については、原則として調査区ごとに出土した層位を記して取り上げ、状態の良いものは写真撮影・図面作成を行った。場合によりFieldCardにも遺構の調査状況を記録している。

実測・写真撮影

電子平板を使用して平面実測を行った。レベルは、基準高をもとに絶対高で記録される。断面実測については、任意の高さを基に設定した水系を基準として計測を行い、縮尺1/20の手書き実測図とした。

写真撮影は、中判1台（モノクローム）、1000万画素以上の一眼レフデジタルカメラ1台を使用し、調査員が行った。撮影に際しては、整理時の混乱を避けるために撮影カードを使用した。実際の撮影は各種遺構の覆土堆積状況、掘り上げ状況、遺物の出土状況などについて行っている。調査終了段階で小型飛行機による航空写真撮影を行っている。

土層注記

断面図作成後に土層注記を行った。観察項目は、色調・土の種類・締まり・混入物などである。基本的には『新版標準土色帳』（1990年版、小山正忠・竹原秀雄編・著）をもとに行っているが、締まりは、調査員の主観で判断した。個々の遺構の覆土堆積状況は、自然堆積か人為堆積かの判断と、埋没している土の起源を把握することを課題とした。層名は調査区内に見られる基本的な土層をローマ数字（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）、遺構内埋土をアラビア数字（1・2・3）で表した。層位の細分の必要が生じた場合は、小文字のアルファベットを付し、I a・I b・I c・・・などと表わした。

普及啓発

一般の方々を対象とした現地公開を平成27年7月23日に実施している。

2 室内整理

室内整理の期間は平成26年12月1日～平成27年3月31日、平成27年11月1日～平成28年3月31日である。

期間内で、出土遺物・実測図・写真などの整理を行った。野外調査で得られた遺物、実測図、写真などの各種資料は室内整理の段階で次のように処理し、整理を行い、報告書作成とともに資料化を行った。

遺構に関わる記録

実測図は遺構ごとに分類し、図面は点検のうえ、デジタルトレースを行った。電子平板で測量したデータについては、現場で計測した情報をそのまま保存することとし、編集用データは、手実測で記録したその他の実測図と合成し、遺構図版を作成している。

野外調査で撮影した写真については調査区ごとに分類し整理した。その中から代表的な写真を選び遺構写真図版を作成し報告書に掲載している。

撮影されたフィルムはネガアルバムに密着写真と一組にして収納した。

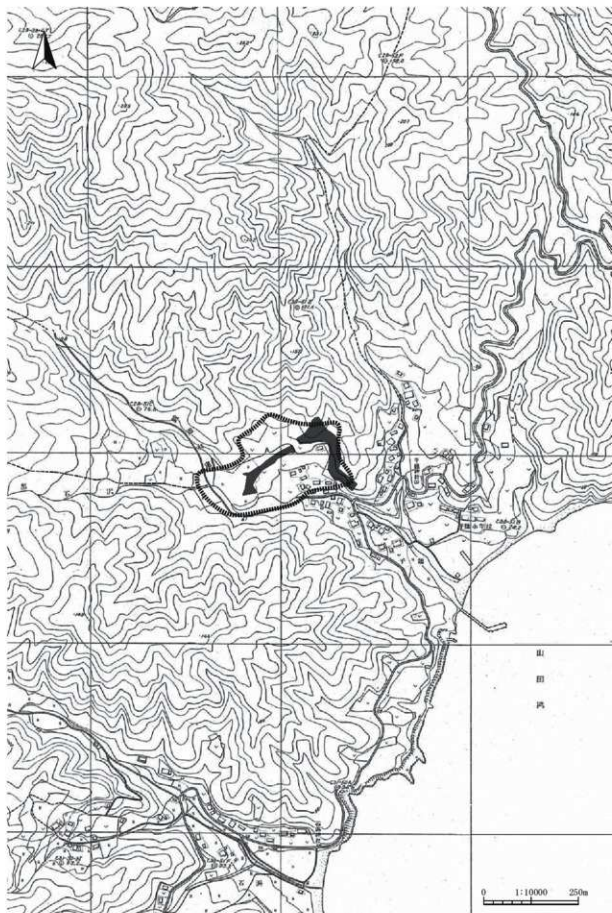
遺物の整理

遺物は現地及び当センター整理室で水洗した後、細片は別として、出土地点・層位等を登録した遺物№を各破片に注記した。その後、出土地点・層位ごとに仕分けを行い、遺構ごと、遺構外出土の遺物は調査区ごとに接合・復元作業を行った。遺物の実測図は実大とし、トレースは遺物の状況に応じて実大あるいは縮小して図化した。放射性炭素年代測定の実測は外部の専門機関に委託した。

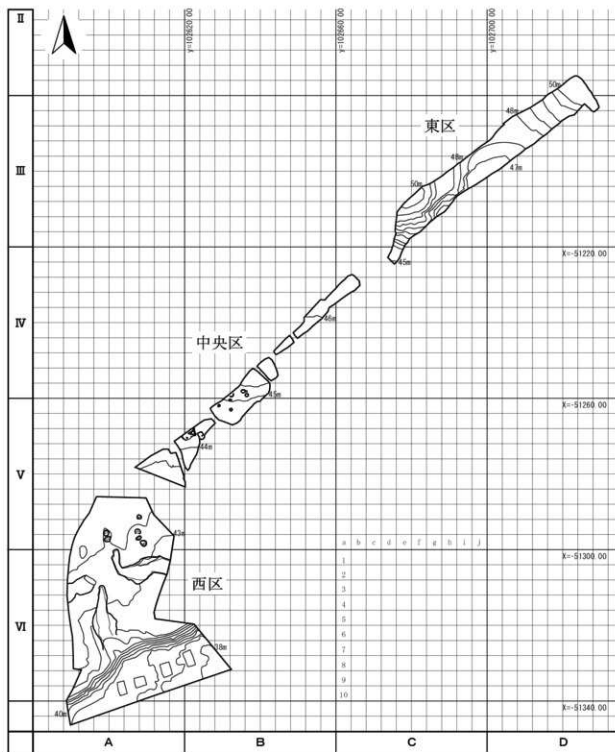
遺物の選別・図化の基準

遺物の整理・報告にあたっての作業・記録作成は以下の方針で進めた。報告書に掲載された遺物は出土した遺物のすべてではなく、整理のなかで設定した基準を基に選別した一部の資料である。各遺構に伴う遺物を最優先し、遺構外出土であっても本遺跡を代表するものについては掲載した。また、

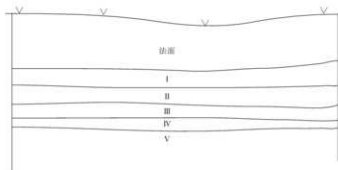
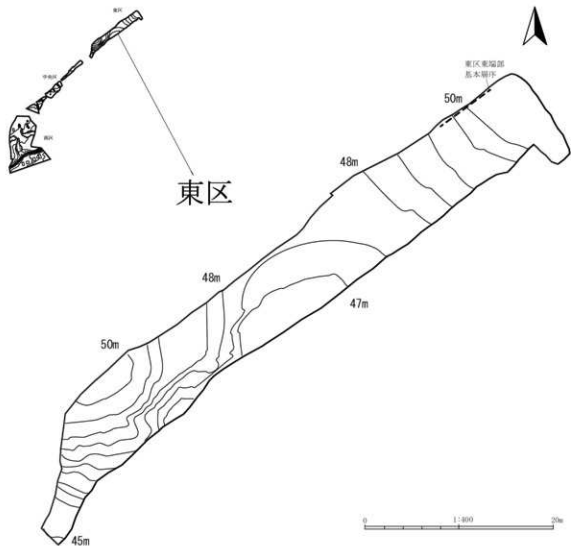
各種の遺物については破片数、重量の計測を行い台帳作成している。残りの良い遺物は図や拓本を取り、写真撮影した。そうでないものは写真だけ撮っている。



第5図 濃跡範囲と調査区



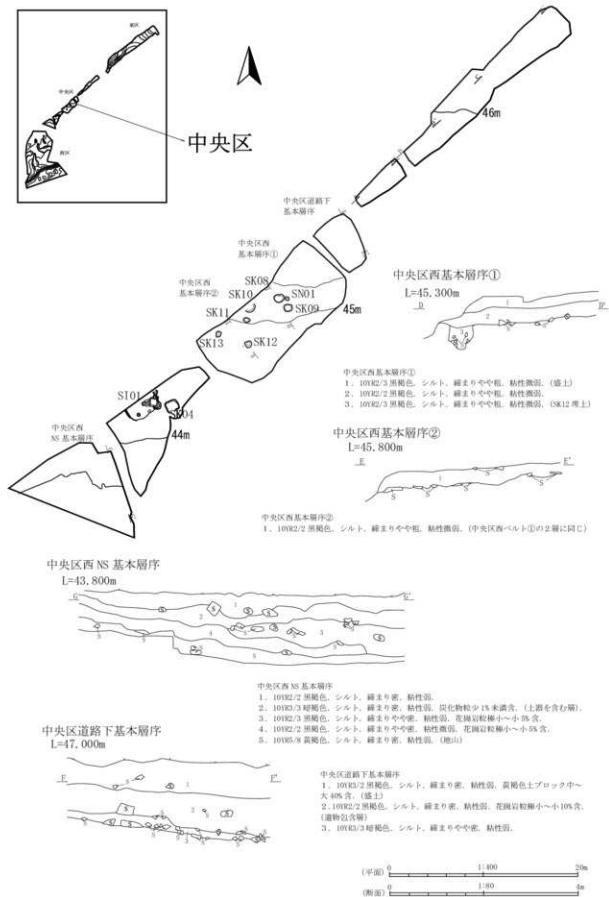
第6図 遺構配置図1



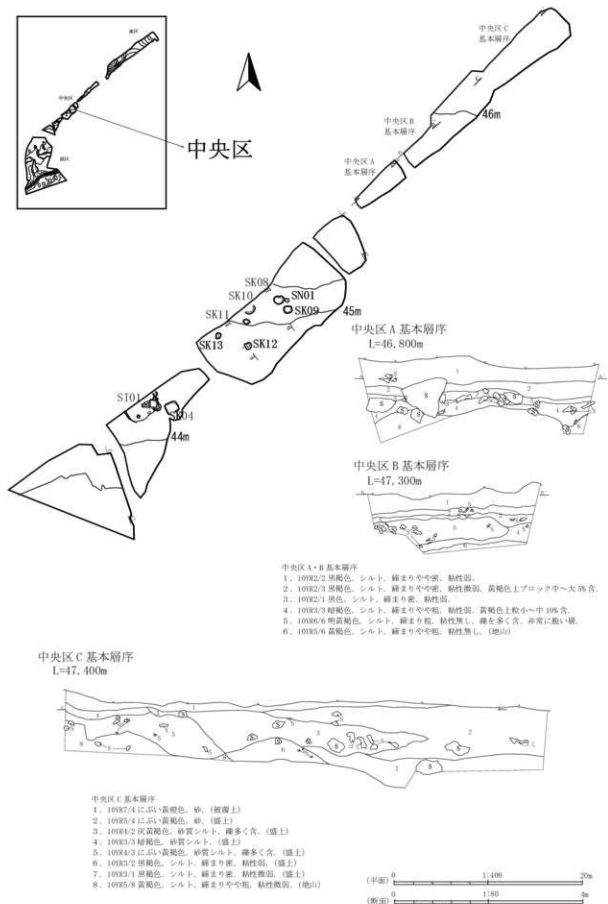
東区東端部基本層序模式図

- I. 10YR2.2 黄褐色、シルト、細まり密、粘性部、黄褐色土粒極小～小 1～3% 含。
- II. 10YR2.2 黄褐色、シルト、細まり密、粘性部、黄褐色土粒極小～小 5% 含。
- III. 10YR4.4 褐色、シルト、細まり密、粘性中、黄褐色土粒極小～小 10% 含。
- IV. 10YR2.1 黒色、シルト、細まり密、粘性中、(潜水・潜水層)
- V. 10YR5.8 黄褐色、シルト、細まり密、粘性中、(地山)

第7図 遺構配置図2、基本層序 1



第8図 遺構配置図3、基本層序2



第9図 遺構配置図4、基本層序3



第10図 遺構配置図5、基本層序4

IV 平成26年度調査

平成26年度調査区は山裾の緩斜面部にあたり千鶴集落とも隣接する。本遺跡の中でも西側になる。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡1棟、土坑8基、焼土1基、その他の遺構3基他が検出され、縄文土器、石器などが10箱出土した。

1 検出遺構

(1) 竪穴住居跡

S101 (第11・12図、写真図版4・5)

〔位置・検出状況〕西区、VBa3付近に位置する。IV層下のV層を掘り下げたところ、平坦で硬く締まっている範囲を検出。

〔規模・形状〕径約4mの円形と推定される。北側は県道法面により調査不可能、南側は水田耕作により掘削され残存しておらず、床面全体の3分の1程度を確認した。

〔埋土・堆積状況〕底面直上には、縄文土器を比較的多く含む暗褐色土が堆積する。

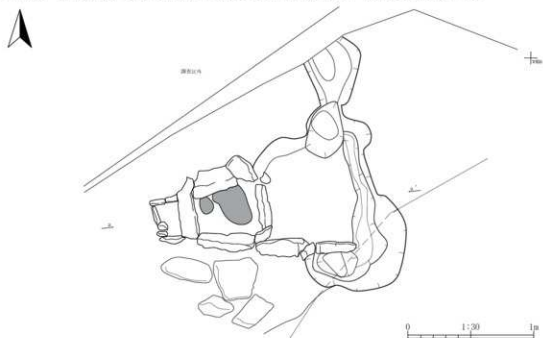
〔壁・底面〕壁の立ち上がりを立体的に確認することは出来なかったが、北側断面を確認することによって床面の立ち上がりを確認した。床面は黄褐色土ブロックと黒褐色土及び暗褐色土が混じって硬く締まっており、この範囲を床面範囲の手がかりとした。

〔重複遺構〕なし。

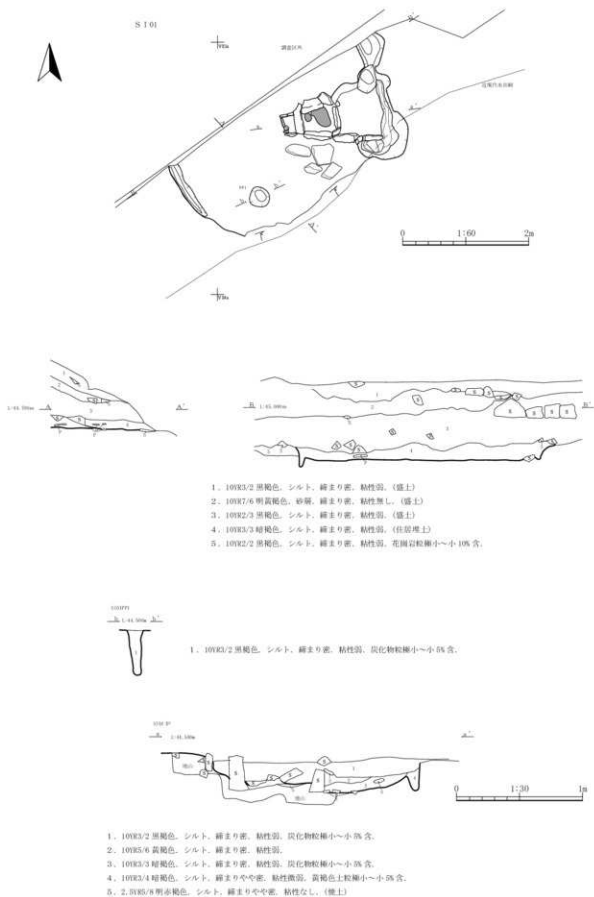
〔出土遺物〕縄文土器は中期の土器を中心に前期や弥生時代、時期のよく分からないものなどが出土している。7は炉跡の埋土からの出土で本遺構の時期を示すものと考えている。

石器は石斧、磨石、台石などが出土している。

〔帰属時期〕出土遺物から縄文時代の中期末葉の可能性がある。(詳細な時期は不明。)



第11図 S101竪穴住居跡1



第12図 S101 竪穴住居跡2

(2) 土坑 (第13~15図、写真図版5~8)

SK01

- 〔位置・検出状況〕西区、VA9e付近に位置する。IV層礫層で黒褐色土(Ⅲ層)が混じる範囲を検出。
〔規模・形状〕160×154cmの円形を呈する。残存深度は42cm。
〔埋土・堆積状況〕底面直上には、風化花崗岩が混じるモソモソとした褐色土が堆積する。主体となるのは、遺物を多く含むⅢ層土である。
〔壁・底面〕壁は、北側が直立気味であるが、南側は緩やかに立ち上がる。底面も南側が高い。
〔重複遺構〕なし。
〔出土遺物〕縄文土器、石器。
〔帰属時期〕出土遺物から縄文時代であるが詳細な時期は不明。

SK02

- 〔位置・検出状況〕西区、VA8g付近に位置する。IV層礫層で黒褐色土(Ⅲ層)が混じる範囲を検出。
〔規模・形状〕145×135cmの円形を呈する。残存深度は64cm。
〔埋土・堆積状況〕壁際には、崩落土と考えられる黄褐色土が確認できる。主体となるのは、遺物を多く含むⅢ層土である。
〔壁・底面〕壁が外傾し立ち上がり掘り鉢状を呈する。
〔重複遺構〕なし。南側が攪乱と接する。
〔出土遺物〕縄文土器、剥片石器。
〔帰属時期〕縄文時代(詳細な時期は不明であるが土器のなかには前期のものもあった)。

SK03

- 〔位置・検出状況〕西区、VA9h付近に位置する。IV層礫層で黒褐色土(Ⅲ層)が混じる範囲を検出。
〔規模・形状〕160×142cmの楕円形を呈する。残存深度は46cm。
〔埋土・堆積状況〕主体となるのは、遺物を多く含むⅢ層土である。
〔壁・底面〕壁が外傾し立ち上がり掘り鉢状を呈する。底面は、南側を掘り過ぎているが概ね平坦で約40cmの巨礫を検出した。
〔重複遺構〕なし。
〔出土遺物〕縄文土器、剥片石器。
〔帰属時期〕出土遺物から縄文時代(詳細な時期は不明であるが前期の土器もあった)。

SK04

- 〔位置・検出状況〕中央区、VB3b付近に位置する。V層上面で黒色土の円形気味プランを検出。
〔規模・形状〕152×124cmの方形を呈する。残存深度は21cm。
〔埋土・堆積状況〕主体となるのは、黒褐色土である。
〔壁・底面〕壁は、緩やかに外傾する。南側の地山は、底面に見える黄褐色土ではなく、黄褐色土と黒褐色土がブロック状に含まれる暗褐色土であるため一部掘り過ぎている。底面は、平坦である。
〔重複遺構〕なし。
〔出土遺物〕縄文土器。

〔帰属時期〕 出土遺物から縄文時代（詳細な時期は不明）。

S K05

〔位置・検出状況〕 西区、VA9f付近に位置する。IV層礫層で黒褐色土（Ⅲ層）が混じる範囲を検出。

〔規模・形状〕 172×128cmの楕円形を呈する。残存深度は39cm。

〔埋土・堆積状況〕 底面直上には、崩落土と考えられる褐色土が堆積する。主体となるのは、遺物を多く含むⅢ層土である。全体に径10～40cm程の礫が混入する。

〔壁・底面〕 壁が外傾し立ち上がり擋り鉢状を呈する。

〔重複遺構〕 なし。

〔出土遺物〕 縄文土器、礫石器。

〔帰属時期〕 出土遺物から縄文時代であるが詳細な時期は不明である。

S K06

〔位置・検出状況〕 西区、VA7g付近に位置する。IV層礫層で暗褐色砂礫土が混じる範囲を検出。

〔規模・形状〕 116×100cmの円形を呈する。残存深度は75cm。

〔埋土・堆積状況〕 径5～20cm程の礫を含む暗褐色砂礫土を主体とする。埋土の様相が、西区で検出した他の土坑とは異なる。

〔壁・底面〕 壁は外傾気味に立ち上がる。底面は北側が若干高くなる。

〔重複遺構〕 なし。

〔出土遺物〕 なし。

〔帰属時期〕 検出面から詳細な時期は不明であるが縄文時代と考えられる。

S K07

〔位置・検出状況〕 西区、VA9h付近に位置する。IV層礫層で黒褐色土（Ⅲ層）が混じる範囲を検出。

〔規模・形状〕 150×88cmの楕円形を呈する。残存深度は38cm。

〔埋土・堆積状況〕 主体となるのは、遺物を多く含むⅢ層土であるが径10～40cm程の礫を多量に含む。

〔壁・底面〕 壁は、緩やかに外傾する。底面は、若干凹凸がある。

〔重複遺構〕 なし。

〔出土遺物〕 縄文土器。

〔帰属時期〕 出土遺物から縄文時代。（詳細な時期は不明）。

S K08

〔位置・検出状況〕 西区、IVB10f付近に位置する。V層下で黒褐色土が混じる範囲を検出。

〔規模・形状〕 120×85cmの楕円形を呈する。残存深度は10cm。

〔埋土・堆積状況〕 黄褐色土の底面上に黒褐色土が堆積する。締まり、粘性ともにほとんど無い。

〔壁・底面〕 緩やかな壁を成している。

〔重複遺構〕 なし。

〔出土遺物〕 なし。

〔帰属時期〕 不明。

SK09

- 〔位置・検出状況〕 西区、IVB10e付近に位置する。V層下で黒褐色土が混じる範囲を検出。
- 〔規模・形状〕 90×80cmのほぼ円形を呈する。残存深度は15cm。
- 〔埋土・堆積状況〕 黄褐色土の底面上に黒褐色土が堆積する。締まり、粘性ともにほとんど無い。
- 〔壁・底面〕 壁は、どの面も基本的に直立に近い立ち上がりとなる。
- 〔重複遺構〕 なし。
- 〔出土遺物〕 縄文時代前期の土器片が1片出土している。
- 〔帰属時期〕 縄文時代の可能性あり。

SK10

- 〔位置・検出状況〕 西区、IVB10d付近に位置する。V層下で黒褐色土が混じる範囲を検出。遺構の半分程度が北側の県道法面にかかっている。
- 〔規模・形状〕 110×100（推定）cmのほぼ円形を呈する。残存深度は18cm。
- 〔埋土・堆積状況〕 黄褐色土の底面上に黒褐色土が堆積する。締まり、粘性ともにほとんど無い。
- 〔壁・底面〕 壁は、東側が直立気味であるが、西側は緩やかに立ち上がる。
- 〔重複遺構〕 なし。
- 〔出土遺物〕 なし。
- 〔帰属時期〕 不明。

SK11

- 〔位置・検出状況〕 西区、VB1d付近に位置する。V層下で黒褐色土が混じる範囲を検出。
- 〔規模・形状〕 70×55cmの円形を呈する。残存深度は28cm。
- 〔埋土・堆積状況〕 黄褐色土の底面上に黒褐色土が堆積する。締まり、粘性ともにほとんど無い。
- 〔壁・底面〕 壁は、ほぼ直立気味である。
- 〔重複遺構〕 なし。
- 〔出土遺物〕 なし。
- 〔帰属時期〕 不明。

SK12

- 〔位置・検出状況〕 西区、VB1d付近に位置する。V層下で黒褐色土が混じる範囲を検出。
- 〔規模・形状〕 80×80cmのほぼ円形を呈する。残存深度は45cm。
- 〔埋土・堆積状況〕 黄褐色土の底面上に黒褐色土が堆積する。締まり、粘性ともにほとんど無い。
- 〔壁・底面〕 壁は、北側が直立気味であるが、南側は緩やかに立ち上がる。底面も南側が高い。
- 〔重複遺構〕 なし。
- 〔出土遺物〕 なし。
- 〔帰属時期〕 詳細な時期は不明。

SK13

- 〔位置・検出状況〕 西区、VB1c付近に位置する。V層下で黒褐色土が混じる範囲を検出。
- 〔規模・形状〕 70×60cmのほぼ円形を呈する。残存深度は46cm。柱穴状の土坑である。

〔埋土・堆積状況〕暗褐色土の単層が堆積する。締まりは密である。

〔壁・底面〕壁はほぼ直立気味である。

〔重複遺構〕なし。

〔出土遺物〕なし。

〔帰属時期〕詳細な時期は不明。

(3) 焼 土

SN01 (第15図、写真図版8)

〔位置・検出状況〕西区、IVB10e付近に位置する。V層下で焼土範囲を検出。

〔規模・形状〕50×45cmのほぼ円形を呈する。焼土の厚さは最大5cm。

〔埋土・堆積状況〕いわゆる黄褐色土の地山層の上に黒褐色土が堆積し、その直上で確認した。

〔重複遺構〕なし。

〔出土遺物〕なし。

〔帰属時期〕詳細な時期は不明。

(4) その他の遺構

SX01 (第16図、写真図版8)

〔位置・検出状況〕西区、VIA1g付近に位置する。IV層砂礫層で遺物を多量に含む黒褐色土(Ⅲ層)の範囲を確認し、拡がりを検出すると、西区東側調査区際よりV A10付近まで溝状に蛇行するプランを確認した。

〔規模・形状〕調査区内での検出した範囲14.3×6.7m。残存深度は147cm。

〔埋土・堆積状況〕3層に分けられる。1層は、径5~30cm程の礫を含むⅢ層土の黒褐色土である。主体となる2層は、暗褐色土で1層より礫の大きさが際立つ。壁際には黄褐色砂質土が堆積し崩落土の様相を呈する。

〔重複遺構〕なし。

〔出土遺物〕縄文土器、磨石、石匙等。

〔帰属時期〕出土遺物から縄文時代。(詳細な時期は不明。前期か)

SX02 (第17図、写真図版9)

〔位置・検出状況〕西区、VIA2d付近に位置する。IV層砂礫層で遺物を多量に含む黒褐色土(Ⅲ層)の不整形プランを検出した。

〔規模・形状〕調査区内での検出した範囲7.6×4.6m。残存深度は、上部を削平されているため全体の残存率は少ないが、調査区際の断面観察では約20cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕主体となるのは、縄文土器の小片を多量に含むⅢ層土の黒褐色土である。上面が硬いのは上部を削平された為であると調査区際の断面観察で判断した。

〔重複遺構〕なし。

〔出土遺物〕縄文土器、尖頭器等。縄文時代前期の土器が多く出土した。中期の土器も少量含まれていた。

〔帰属時期〕縄文時代(前期)に位置付けられる。

SX03 (第17図、写真図版9)

〔位置・検出状況〕西区、VIA4e付近に位置する。IV層砂礫層で黒褐色土(Ⅲ層)の拡がりを検出した。

〔規模・形状〕調査区内での検出した範囲15.9×6.4m。残存深度は80cm。

〔埋土・堆積状況〕2層に分けられる。1層は、径5~30cm程の礫を含むⅢ層土の黒褐色土である。SX01や02より、粘性が強い。2層は、暗褐色土で1層より礫の大きさが際立ち底に径1m程の礫を確認した。

〔重複遺構〕なし。

〔出土遺物〕縄文時代前期と中期の土器が多く、他時期の土器も若干量出土している。磨石等。

〔帰属時期〕出土遺物から縄文時代(前・中期)となる。

2 出土遺物

土器(第18~26図、写真図版10~15)

遺構内外を含めて5箱出土した。縄文時代・弥生時代の土器があるが、ここでは一括して記述していく。

今回の調査で出土した土器の中で最も古いのは縄文時代前期のもので出土量も多かった。多少の差こそあれ調査区のはほぼ全域から出土しているが、前期の遺構は土坑が1基確認されただけで、堅穴住居跡は検出されなかった。多くがSX02、SX03、遺物集中区1B、中央区東トレンチから出土している。前期の中でも最も多いのは大木2b式及びそれ以前とみられる段階の土器群である。53・54のように平縁の口縁部に不整然糸文を施し、胎土には繊維を含んでいるものが中心であるが、中には52・76のように口縁部が山形になる個体も見られる。次に前期末葉の大木6式段階の土器が多く見られた。58・59・39などがあり、山形となるの口縁部下に描かれに円・渦状の沈線または隆線を中心に複数の沈線とその沈線間に刻み目を連続して入れるもの、さらに刺突列等を施しているものなどがある。60等大木6式から大木7a式への移行期のものであろうか。

中期の土器も一定量出土した。SIO1も中期の住居跡と考えている。大木7a・7b式段階の土器は少ない。沈線による渦巻文を中心として連続して円弧文や「く」字文が展開するもの、沈線ではなく、原体圧痕で施文するものなどがある。46・28・136等がこの段階に位置づけられよう。

大木8a~9式期の土器は殆ど出土していないようで、大木10式の段階になって出土量が多くなっている。口縁部は平縁から波状となるものまであり、主に沈線によって地文の部分と無文となる部分を区画している。その模様は長円形、波状などを基調とし、これに刺突文が加わるものもある。

後期・晩期も殆ど出土しておらず、晩期末葉若しくは弥生時代初頭から弥生時代前期末頃までの個体が比較的多く出土している。堯は文様を持たない簡素なものとなる(98・104・105・145・152等)。数は少ないが口縁部に突起をつけるものもある(162)。破片資料が多く器形を細分出来ないものが多いが壺類はあまり出土していないようである(63)。102も小形の壺になるのだろうか。鉢或いは浅鉢になるものとしては65・127・128・137・159・161・163・167等があり、口縁部が内湾するものとするならないものがある。沈線による変形工字文或いはそれから派生したような文様を施すものが多い。台付鉢の台部の破片としては97・106・138・149・150・151・169・170等があった。古墳時代以降の土器は出土しなかった。

石器類 (第26～29図、写真図版16・17)

石器類については疎密があるにせよ調査区のほぼ全域から190点が出土している。この中から構内出土のものを優先しつつ代表的なものを選別して33点掲載した。

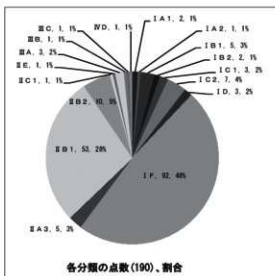
石器類の主たる時期は縄文時代前期・中期と縄文時代晩期末葉～弥生時代前期に位置づけられると考えているが、時期ごとに分けることは出来なかった。今回は一括して右下のように簡易的に分類して数量的な傾向を示した。

その中で最も多く出土したのが剥片類(48%)で、次いで磨石類であった。集落遺跡としては一般的な傾向と捉えている。因みに平成27年度調査区にも中期末葉の集落跡が展開しているが、そちらの石器類が本調査区へと流れ込んで出土するといった可能性は殆どない。

扁平に近い円礫の広い面を使用しているもの(ⅡB1)少し角がある長円形礫の縁辺部を使用しているもの(ⅡB2)で全点数の28%に達する。

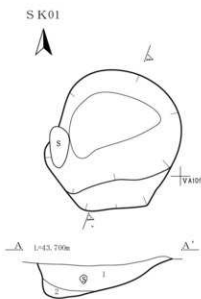
その一方、石鏃や石匙、搔削器といった剥片石器、磨裂石斧等はあまり出土しなかった。とはいっても剥片石器製作に伴って出る剥片は数多く出土していることから、この地で石器製作を行っていたことは疑いない。石質を見ると比較的近くで得られる石材が殆どを占め、奥羽山系起源の石材はあまり出土しなかった。

礫石器の中で敲石についても殆ど出土していない。堅果類の利用には必要な石器と思われるが石皿もそれほど多くは出土しなかった。



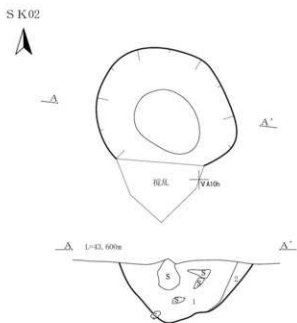
石器分類基準

I	剥片石器	A	石鏃	1	有茎
				2	無茎
				3	その他
		B	石匙	1	縦長
				2	横長
				3	その他
C	搔削器	1	搔器		
		2	削器(不定形なもの含む)		
D	尖頭器				
E	打製石器	1	刃部を両面		
		2	刃部を片面		
F	剥片				
II	礫石器	A	石皿	1	脚・縁有
				2	脚・縁無し
		B	磨石	1	広い面を使用
				2	縁辺部を使用
		C	敲石	1	広い面を使用
				2	端部を使用
				3	広い面と端部の両方
		D	磨石・敲石複合	1	広い面を磨・敲
				2	広い面を磨、端部を敲
				3	縁辺部を磨、広い面を敲
				4	縁辺部を磨、端部を敲
		III	磨裂石器	A	石斧
B	石斧(小形)				
C	楔				
IV	その他	A	石棒		
		B	石剣		
		C	台石		
		D	その他		



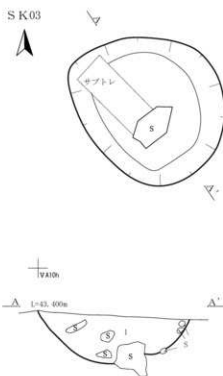
SK01

1. 10YR2/2 紫褐色。シルト。締まりやや密。粘性やや強。φ3～20cm 礫中量。遺物多量含。
2. 10YR1/4 褐色。シルト。締まりやや粗。粘性やや弱。マサ土上体。モソモソ感。



SK02

1. 10YR2/2 紫褐色。砂質シルト。締まりやや粗。粘性やや弱。φ2～20cm 礫多量。縄文土層含。
2. 注記なし。



SK03

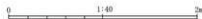
1. SK02 の 1 層と同じ。

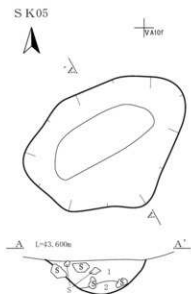


SK04

1. 10YR3/1 黄褐色。シルト。締まりやや密。粘性やや強。φ10～30cm 礫少量含。
2. 10YR3/4 暗褐色。シルト。締まりやや密。粘性やや弱。黄褐色土ブロック状に含。(遺構明土ではない)

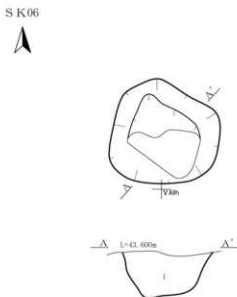
第13図 土坑1





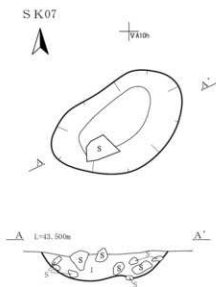
SK05

1. SK02の1層と同じ。
2. 10YR4/1 褐色。シルト、締まりやや粗、粘性やや弱。
φ2～10cm 礫少量、黄褐色砂質土多量含。



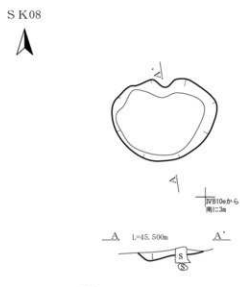
SK06

1. 10YR3/4 暗褐色。砂質シルト、締まりやや粗、粘性弱。
礫が主体、φ5～20cm 礫少量含。



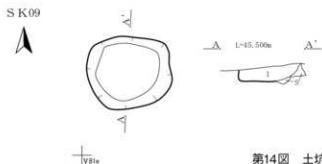
SK07

1. SK02の1層と同じ。



SK08

1. 10YR2/2 黒褐色。シルト、締まり粗、粘性ほとんど無し。

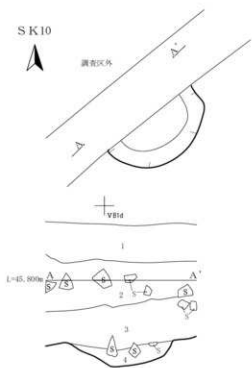


SK09

1. 10YR2/2 黒褐色。シルト、締まり粗、粘性無し。

第14図 土坑2

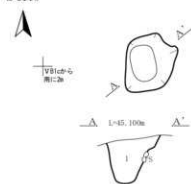




SK10

1. 10YR7/6 明黄褐色、砂質シルト、締まりやや硬、粘性無し。(盛土砂層)
2. 10YR3/3 暗褐色、シルト、締まりやや硬、粘性弱、黄褐色土粒及びフロックルへ中20%含、角礫大混入。(盛土層)
3. 10YR2/2 黒褐色、シルト、締まりやや硬、粘性弱。
4. 10YR2/3 黒褐色、シルト、締まりやや硬、粘性微弱、小礫混入。

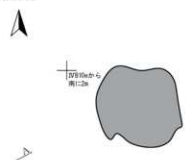
SK13



SK13

1. 10YR3/3 暗褐色、シルト、締まり硬、粘性強、黄褐色土粒極小～小混入。

SN01



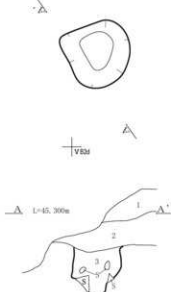
SK11



SK11

1. 10YR2/1 黒色、シルト、締まりやや硬、粘性微弱、礫混入。

SK12



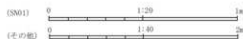
SK12

1. 10YR2/3 黒褐色、シルト、締まりやや硬、粘性微弱。(盛土)
2. 10YR2/2 黒褐色、シルト、締まりやや硬、粘性微弱。
3. 10YR2/3 黒褐色、シルト、締まりやや硬、粘性微弱。(SK12埋土)

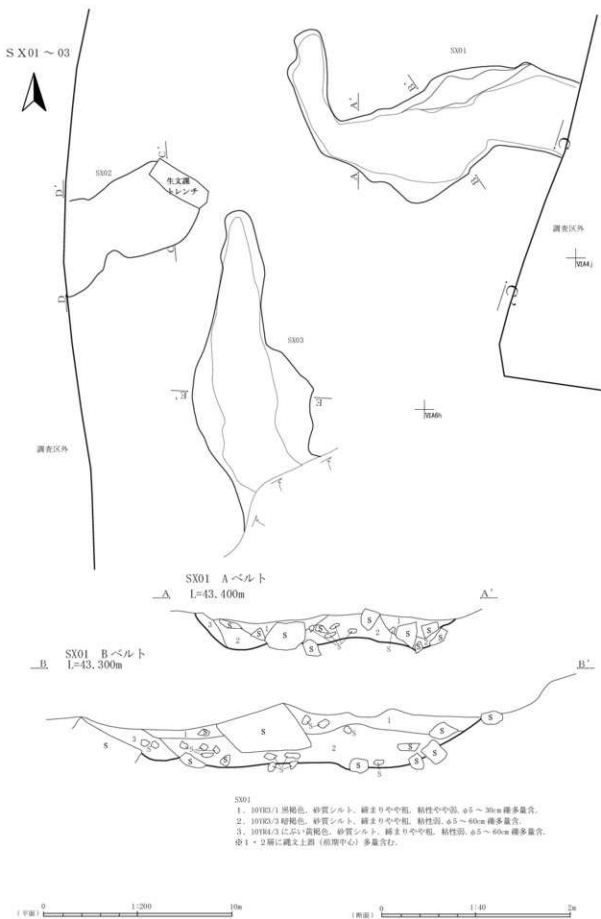


SN01

1. 5YR5/8 明赤褐色、シルト、締まりやや硬、粘性無し。(盛土)
2. 7.5YR2/2 黒褐色、シルト、締まりやや硬、粘性微弱。
3. 10YR7/6 明黄褐色、シルト、締まりやや硬、粘性微弱。



第15図 土坑3、焼土

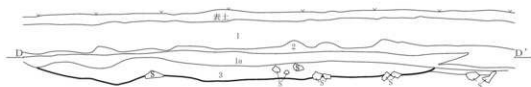


第16図 SX01~03①

SX02 A ベルト
L=43,500m



SX02 B ベルト
L=43,500m



SX02

1, 101R7/6 明黄褐色。砂。(盛土)

1a. 1層より続く締まる。

2, 101R2/3 黄褐色。シルト。締まり密。粘性弱。硬底入。(盛土)

3, 101R3/1 黄褐色。シルト。締まりやや密。粘性やや強。φ5~20cm 礫多量含。縄文上部多量含。表面が硬いのは、上部を削平されているためと考えられる。

SX03

L=42,600m



SX03

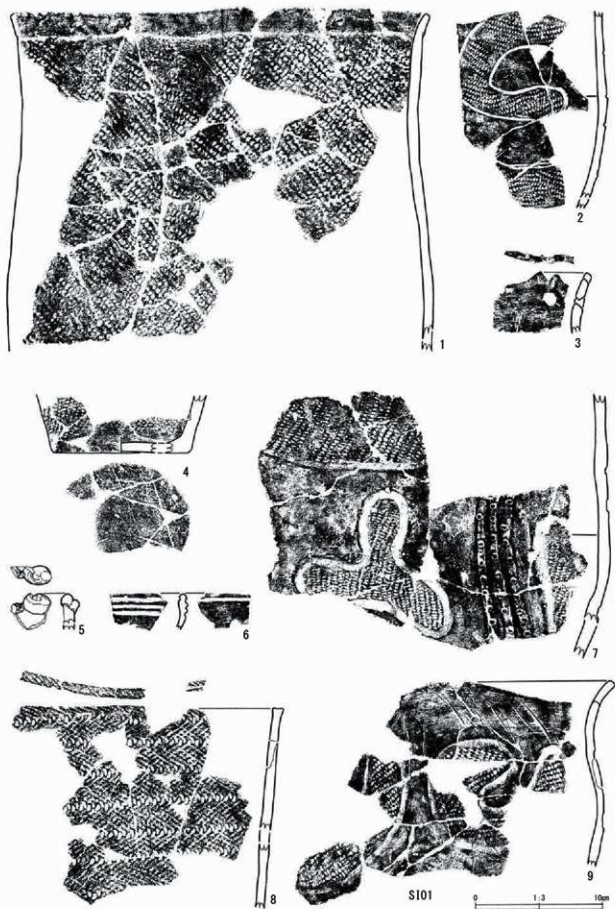
1, 101R2/2 黄褐色。シルト。締まりやや密。粘性やや強。φ0.5~20cm 砕けた風化花崗岩少量。φ5~30cm 礫中量含。

2, 101R3/3 黄褐色。シルト。締まりやや密。粘性やや強。φ5cm~1m 礫多量含。褐色土混じり。

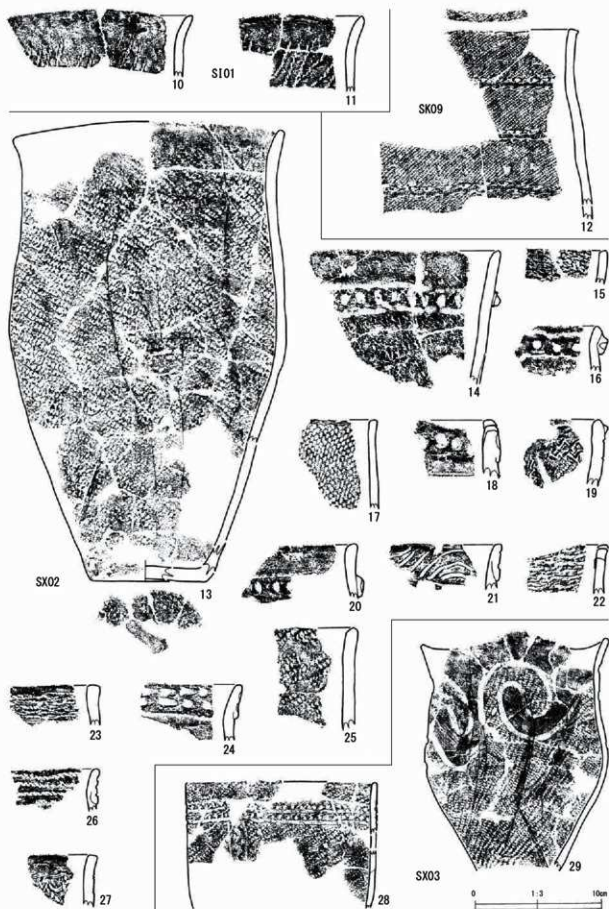
※1・2に縄文上部多量含む。



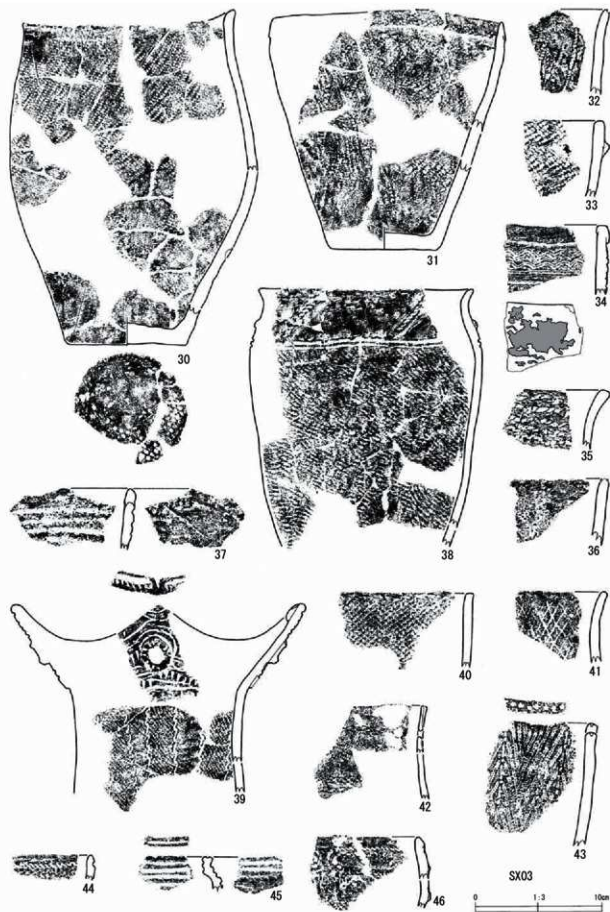
第17図 SX01~03②



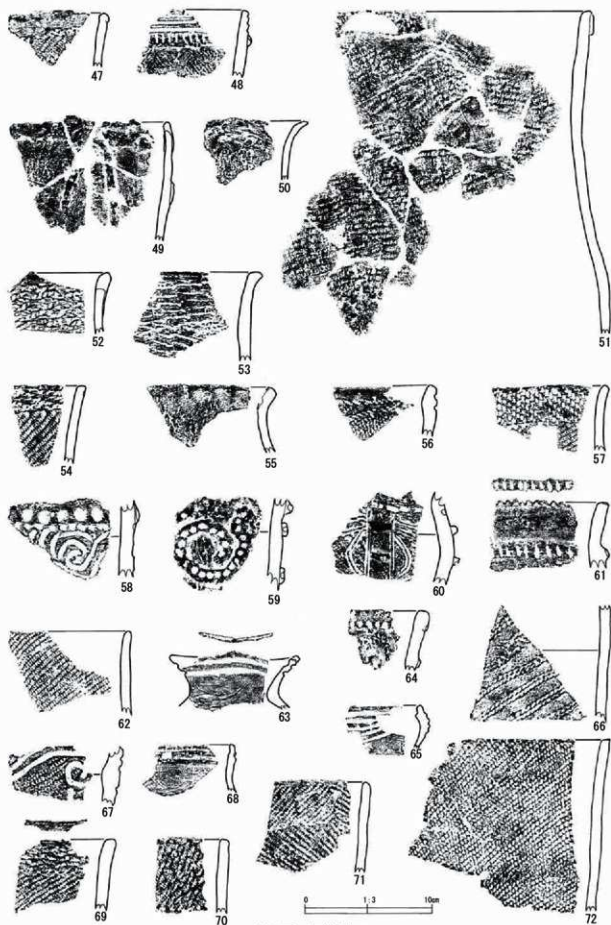
第18回 出土遺物 1



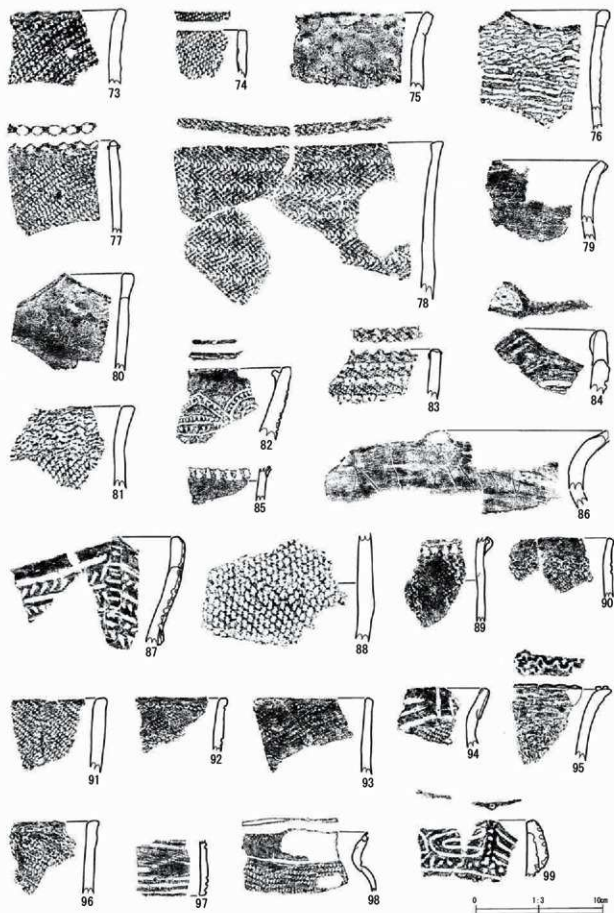
第19図 出土遺物2



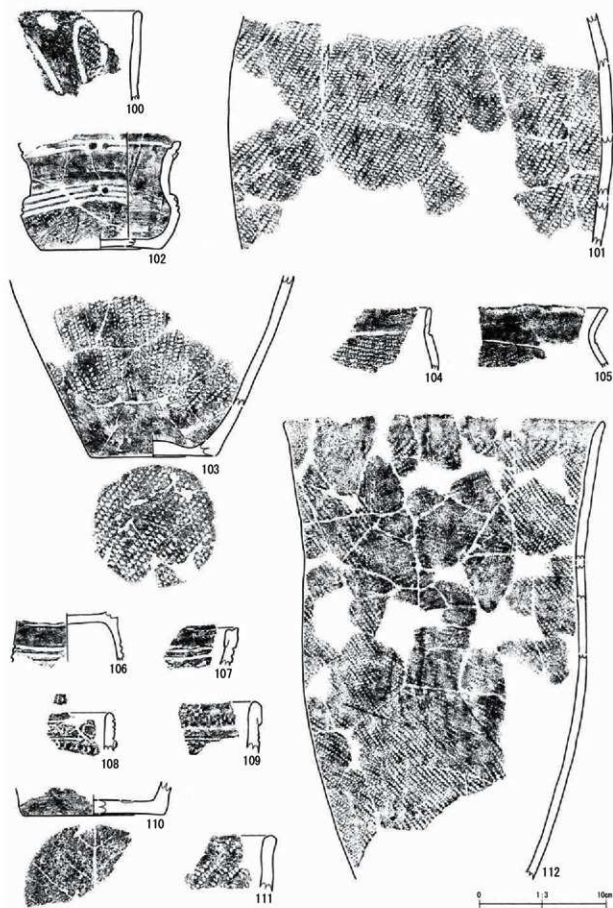
第20図 出土遺物3



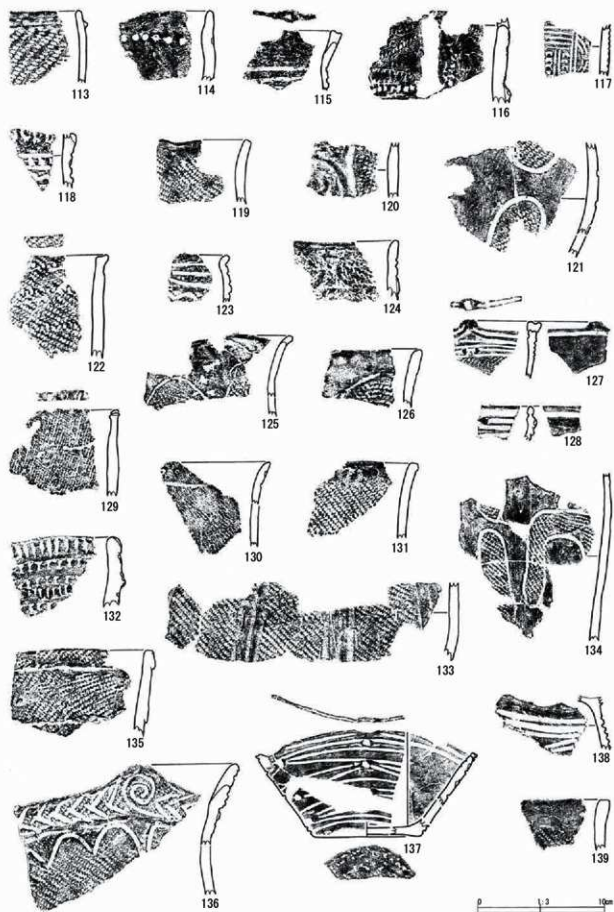
第21圖 出土遺物 4



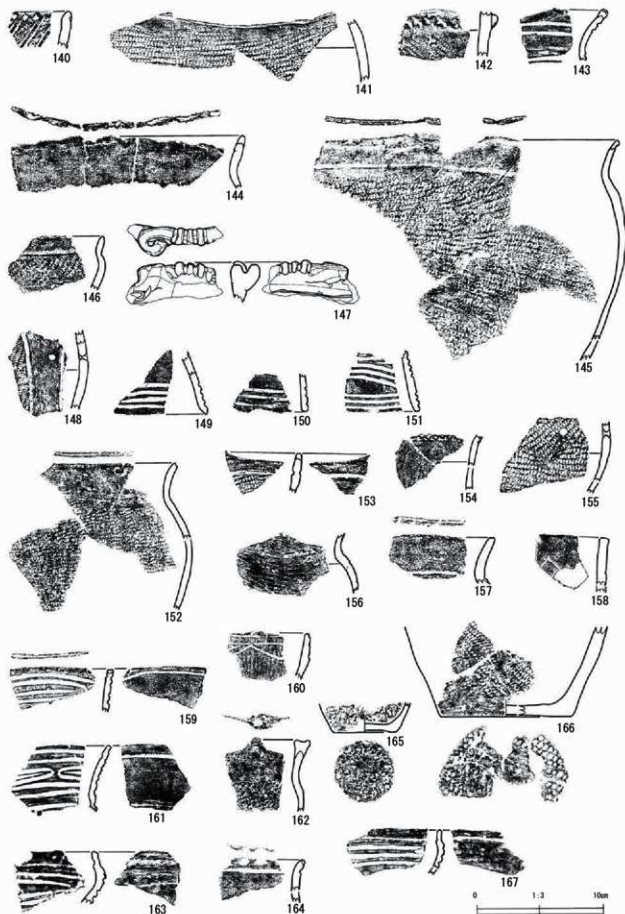
第22図 出土遺物 5



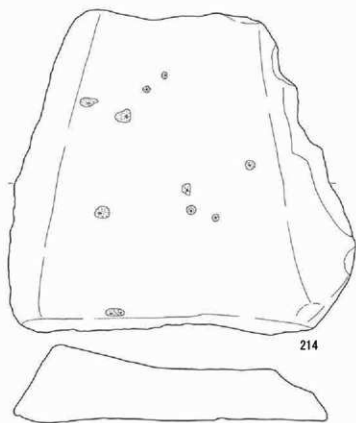
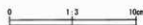
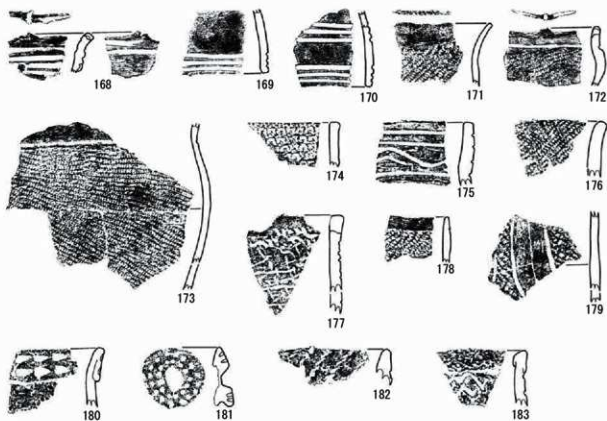
第23図 出土遺物6



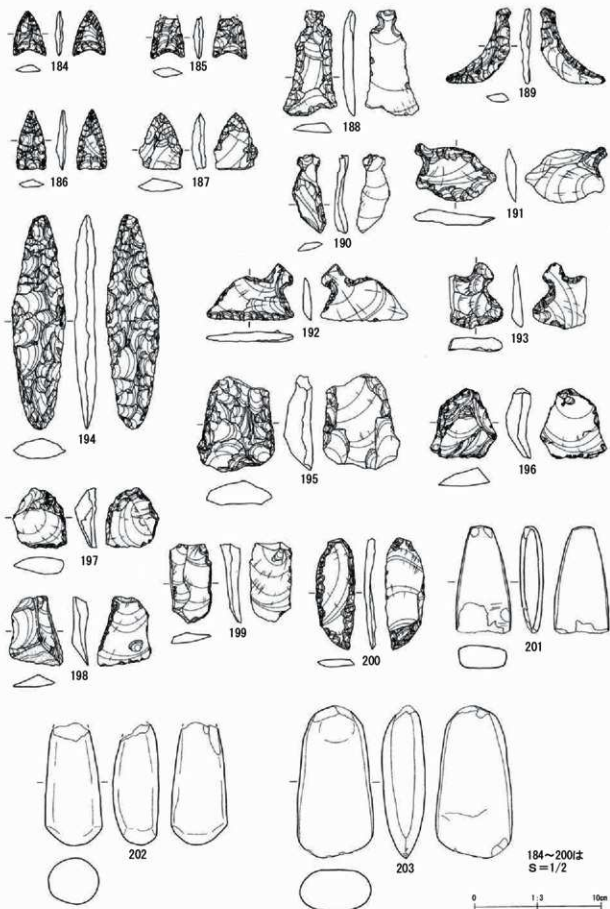
第24図 出土遺物7



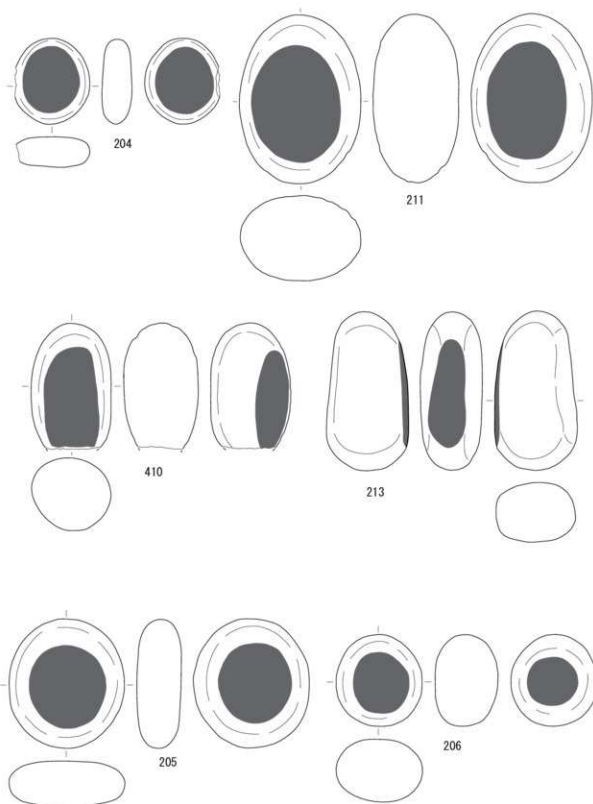
第25図 出土遺物 8



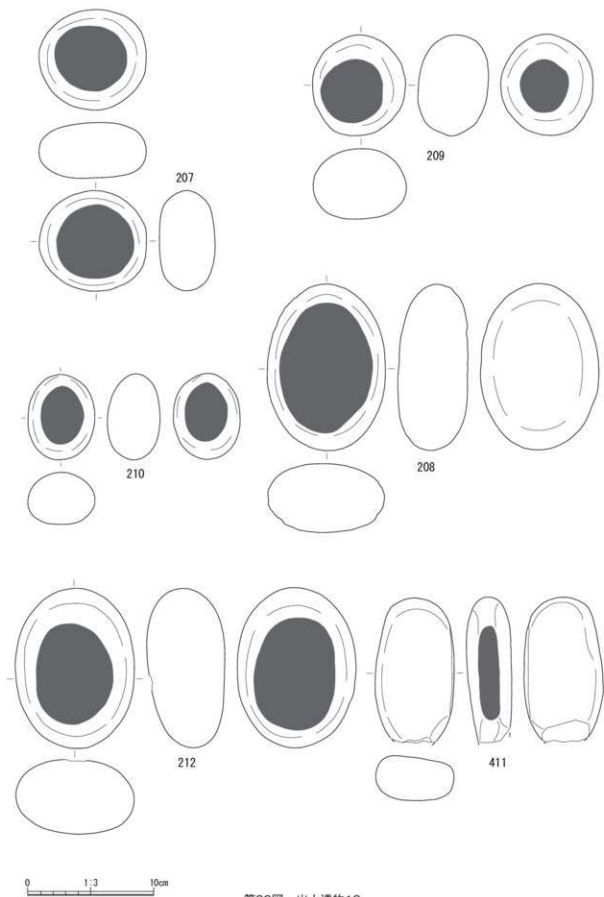
第26図 出土遺物9



第27図 出土遺物10



第28図 出土遺物11



第29図 出土遺物12

第2表 縄文土器観察表 (H26)

品号	出土地点・層位	器種	残存部位	文様・裝飾・原形・付着物など	胎土	その他
1	S801 (東側) 埋土中～下, NSベルト4層	深鉢	口-体	外面上部に灰化物付着, L R		中期
2	S801 埋土下部	深鉢	体部	L R小, 大木10		中期
3	S801 埋土下部	深鉢	口縁	縦溝状裝飾, 穿孔, 内外面灰化物付着		不明
4	S801 埋土下部	深鉢	底部			縄文
5	S801 埋土上部1～3層	不明	口縁部	口唇部うず巻状裝飾		不明
6	S801 埋土上部1～3層	不明	口縁部	大割A新-強生		強生
7	S801 石圍が 埋土	深鉢	体部	R L, 沈線上に竹管状の工具で刺突, 大木10	小石少	中期
8	S801 埋土下部	深鉢	口-体	結束, 胎土に織造	織造多	前期
9	S801 埋土中～下	深鉢	口-体	口縁部成状, L R, 大木10		中期
10	S801 埋土下部	深鉢	口-体	熱赤文		不明
11	S801 埋土下部	深鉢	口-体	熱赤文		不明
12	SK09 埋土	深鉢	口-体	口唇部上面にも地文, 結束 (同例り)	織造	前期
13	SN02 黒黒色土層 (礫層)	深鉢	全	口縁部無文, L R		中期
14	SN02 黒黒色土層 (礫含)	深鉢	口-体	隆帯上に刺突, 朝日状熱赤文	小石多	
15	SN02 1層	深鉢	口縁部	熱赤文	織造	前期
16	SN02 1層	深鉢	口縁部	口唇部外面隆帯上に竹管状工具による刺突		前期か
17	SN02 (遺物集中区2) 黒色土 (砂礫混) 層	深鉢	口-体	L R小	織造	前期
18	SN02 (遺物集中区2) 黒色土 (砂礫混) 層	深鉢	口縁部	口唇部に細直煎状の裝飾		前期か
19	SN02 (遺物集中区2) 黒色土 (砂礫混) 層	深鉢	口縁部	縦溝に縦溝状の沈線文		前期か
20	SN02 (遺物集中区2) 黒色土 (砂礫混) 層	深鉢	口縁部	口縁部隆帯上に刺突	砂多	前期か
21	SN02 (遺物集中区2) 黒色土 (砂礫混) 層	深鉢	口縁部	口唇部外面に沈線文		不明
22	SN02 (遺物集中区2) 黒色土 (砂礫混) 層	深鉢	口縁部	不整熱赤文		前期
23	SN02 (遺物集中区2) 黒色土 (砂礫混) 層	深鉢	口縁部	熱赤文	織造	前期
24	SN02 1層	深鉢	口縁部	口唇部外面に竹管状工具による刺突	砂多	前期か
25	SN02 (遺物集中区2) 黒色土 (砂礫混) 層	深鉢	口縁部	風化著しい	砂多	前期か
26	SN02 (遺物集中区2) 黒色土 (礫含)	深鉢	口縁部	車輪跡条体 (第1層)		
27	SN02 1層	深鉢	口縁部	竹管状工具による沈線状の地文		前期か
28	SN03(遺物集中区3) 黒色土 (礫含) 層, 黒色土	深鉢	口-体	口縁部に沈線3本と2列の刺突文, 2本の沈線が縦に体部へ向かう, 大木7か		中期か
29	SN03 1層～2層	鉢	全	口縁部成状, 大木10		中期
30	SN03 (遺物集中区4) 黒色土 (礫含) 層	深鉢	全	R L		中期
31	SN03 (遺物集中区4) 黒色土 (礫含) 層, 1層	深鉢	全	口唇部くびれ, 内外面灰化物付着, R L等		中期か
32	SN03 (遺物集中区3) 黒色土 (礫混) 層	深鉢	口-体	突起状裝飾, 熱赤文		前期か
33	SN03 (遺物集中区3) 黒色土 (礫混) 層	深鉢	口縁部	コブ状の突起あり, R L		前期か
34	SN03 (遺物集中区3) 黒色土 (礫含) 層	深鉢	口縁部	外面に灰化物激しく付着, 沈線による縦溝文		前期
35	SN03 (遺物集中区3) 黒色土 (礫含) 層	深鉢	口縁部	口唇部に不整熱赤文		前期
36	SN03 (遺物集中区3) 黒色土 (礫含) 層	深鉢	口縁部	風化著しい。	小石多	不明
37	SN03 (遺物集中区3) 黒色土 (礫混) 層	深鉢	口縁部	風化著しい。		不明
38	SN03 南1～2層	深鉢	口-体	口縁部に文様帯, 地文はL, 後期初頭	砂多	後期
39	SN03 (遺物集中区3) 黒色土 (礫含) 層	深鉢	口-体	口縁部成状, R L結頭, 大木7a	小石含	中期
40	SN03 (遺物集中区3) 黒色土 (礫含) 層	深鉢	口縁部	羽状縄文R L	織造多	前期
41	SN03 (遺物集中区3) 黒色土 (礫含) 層	深鉢	口縁部	朝日状熱赤文	砂多	中期か
42	SN03 (遺物集中区3) 黒色土 (礫含) 層	深鉢	口縁部	穿孔, 不明瞭な結縄縄文		不明
43	SN03 (遺物集中区3) 黒色土 (礫含) 層	深鉢	口縁部	口唇部に刺突列, 本目状熱赤文		前期
44	SN03 北黒色土層 (礫含)	鉢	口縁部	原形直底		中期か
45	SN03 北端1層	鉢	口縁部	青木燻 (強生前)		強生
46	SN03 2層	鉢	口縁部	細く粘土粒と原形直底の組み合わせで文様をつくる。大木7b		中期
47	SN03 南1・2層	深鉢	口縁部	結縄縄文R L		前期
48	SN03 南1～2層	深鉢	口縁部	口縁と体部の地に斜めに入った隆帯, 地文は良く読めない。		中期か
49	SN03 南1・2層	深鉢	口-体	粘土粒結付, 風化著しい	小石少	不明
50	SN03 (遺物集中区3) 黒色土 (礫含) 層	深鉢	口縁部	文様不明瞭	雲母少	不明
51	SN03 南2層	深鉢	口-体	口唇部少し厚くなる, L R小	織造?	前期か
52	遺物集中区1B東ベルト東 黒色砂礫層	深鉢	口縁部	口縁部成状, 不整熱赤文		前期
53	遺物集中区1B東ベルト東 黒色砂礫層	深鉢	口縁部	無施 (r)		前期
54	遺物集中区1B東ベルト東 黒色砂礫層	深鉢	口-体	不整熱赤文, L R	織造	前期

2 出土遺物

発掘層	出土地点・層位	器種	残存部位	文様・装飾・原形・付着物など	粘土	その他
55	遺物集中区1B東ベルト東 黒色砂礫層	深鉢	口縁部	風化著しい		不明
56	遺物集中区1B東ベルト東 黒色砂礫層	深鉢	口縁部	原形ほぼ全文		中期
57	遺物集中区1B東ベルト東 黒色砂礫層	深鉢	口縁部	羽状襷文R.L	織造	前期
58	遺物集中区1B東ベルト東 黒色砂礫層	深鉢	体部	うず巻状沈線装飾、刺突、大木6		前期
59	遺物集中区範囲Aベルト東 黒色砂礫層	深鉢	体部	粘土紐貼付+刺突列		前期
60	遺物集中区1B東ベルト東 黒色砂礫層	深鉢	口縁部	半環竹管による装飾(大木6or7)		前-中期
61	遺物集中区1B東ベルト東 黒色砂礫層	深鉢	口縁部	口唇と頸部に刷目文		中期
62	遺物集中区1B東ベルト東 黒色砂礫層	深鉢	口-体	L.R	織造	前期
63	中央区西ベルト① (IVB10c) 1-2層	壺	口縁部	弥生前期末		弥生
64	中央区道路下トレンチ 黒色土	深鉢	口縁	隆帯上に刺突		中期か
65	中央区道路下トレンチ 黒色土	鉢	口縁	大割A新-弥生		晩期-弥生
66	中央区道路下 黒色土	深鉢	体部	燃赤文か		不明
67	中央区道路下 黒色土	深鉢	体部	沈線による渦巻文、L.R		砂多 中期
68	中央区道路下トレンチ 黒色土	壺	口縁部	口縁部に沈線文		弥生
69	中央区道路下トレンチ 黒色土	深鉢	口縁部	口縁部に不整燃赤文		織造 前期
70	中央区東トレンチ① 1-2層	深鉢	口縁部	前+段多条R.R		前期
71	中央区東トレンチ① 1-2層	深鉢	口縁部	羽状襷文R.LとL.R		前期
72	中央区道路下トレンチ 黒色土	深鉢	口縁部	細粒小		織造 前期
73	中央区東トレンチ① 1-2層	深鉢	口縁部	L.R.L		前期
74	中央区東トレンチ① 1-2層	深鉢	口縁部	細粒		前期
75	中央区東トレンチ① 1-2層	深鉢	口縁部	内面ナデ		中期か
76	中央区東トレンチ① 1-2層	深鉢	口縁部	口縁部成状、不整燃赤文		織造 前期
77	中央区東トレンチ① 1-2層	深鉢	口縁部	口唇部上面に任意による装飾、L.R		中期か
78	中央区東トレンチ① 1-2層	深鉢	口-体	結束し、外面炭化物付着		織造 前期
79	中央区東トレンチ① 1-2層	深鉢	口縁部	無文		中期か
80	中央区東トレンチ① 1-2層	深鉢	口縁部	口縁部成状		織造 前期
81	中央区東トレンチ① 1-2層	深鉢	口縁部	不整燃赤文、体部はL.R		前期
82	中央区東トレンチ① 1-2層	深鉢	口縁部	口唇部内面に隆帯貼付、沈線、刺突(大木6?)		前期
83	中央区東トレンチ① 1-2層	深鉢	口縁部	口唇部上面に原形圧痕による羽状装飾、結節		前期
84	中央区東トレンチ① 1-2層	深鉢	口唇部	口縁部成状、沈線		中期
85	中央区東トレンチ① 1-2層	深鉢	口唇部	口唇部外面に刺突による装飾		不明
86	中央区東トレンチ② 1-2層	不明	口縁部	口唇部の一部に突起状装飾		不明
87	中央区東トレンチ① 1-2層	深鉢	口縁部	口縁部成状、沈線と刺突の組合せ、大木6?		前期
88	中央区東トレンチ② 1-2層	深鉢	体部	縦設の結束か、粘土に織造		前期
89	中央区東トレンチ① 1-2層	深鉢	頸部	隆帯裾に縦溝状に刺突		不明
90	中央区東トレンチ② 1-2層	深鉢	口縁部	織造文		前期
91	中央区東トレンチ② 1-2層	深鉢	口縁部	R.L	織造	前期
92	中央区東トレンチ② 1-2層	深鉢	口縁部	内面ナデ、織造文		前期か
93	中央区東トレンチ② 1-2層	深鉢	口縁部	織造文		前期か
94	中央区東トレンチ② 1-2層	深鉢	口縁部	口唇部外面に沈線装飾		中期
95	中央区東トレンチ② 1-2層	深鉢	口唇部	口唇部外面(上面)に波状の隆付装飾(大木5?)		中期
96	中央区東トレンチ② 1-2層	深鉢	口縁部	内面ナデ、燃赤文		前期
97	中央区西ベルト① (IVB10c) 1-2層	台付鉢小	脚部小	外面に炭化物付着、青木燻(弥生)、台		弥生
98	中央区西ベルト① (IVB10c) 1-2層	台付鉢	口-体	外面に炭化物付着		弥生
99	中央区西ベルト② (IVB9e) 1層	深鉢	口縁部	口縁部成状、使用後棄		良
100	東区東端部 1-1層	深鉢	口-体	内面一部炭化物付着(大木10?)		中期
101	IVB9e 黒色土-黒色土下部(中央区西)東端ベルト黒色土	深鉢	体部	R.L		小石少 中期
102	IVB9d・9e 黒色土	鉢	口-体	変形工字文、青木燻(弥生)		弥生
103	IVB9e 黒色土	深鉢	底部	燃赤文か		中期
104	IVB9d・9e(遺構?) 黒色土	壺	口-体	外面一部激しく炭化物付着		弥生
105	IVB9d・9e 黒色土	壺	口-体	口縁無文		弥生
106	IVB9d・9e 黒色土	台付鉢	脚部小	青木燻(弥生)、台、ミダギ		弥生
107	IVB9e 黒色土	深鉢	口縁部	大木6		前期
108	IVB9e 黒色土	深鉢	口縁部	大木6		前期
109	IVB9e 黒色土	深鉢	口縁部	口唇部折り曲げ、沈線		中期
110	IVB9e 黒色土	深鉢	底部	底部外面に木葉痕		不明
111	IVB9e 黒色土	深鉢	口縁部	L.R		不明
112	IVB9e 黒色土	深鉢	口-体	口縁部近くのみが羽状襷文L.R、大木10		中期
113	IVB9e 黒色土	深鉢	口-体	口唇部貼付、隆帯、R.L		中期

館番号	出土地点・層位	器種	残存部位	文様・装飾・原形・付着物など	粘土	その他
114	IVB9e 黒色土	深鉢	口縁部	口縁部流状、竹管状工具による刺突		中期
115	IVB9e 黒色土	鉢	口縁部	突起状の装飾、外面炭化物付着		弥生
116	IVB9e 黒色土	深鉢	体部	隆帯上に刺突(大木7b?)		中期
117	IVB9e 黒色土	深鉢	体部	半蔵竹管による刺突		不明
118	IVB9e 黒色土	深鉢	口縁部	瘤状装飾、刺突		前期
119	IVB9e 黒色土	深鉢	口縁部	L装		不明
120	IVB9e 黒色土	深鉢	体部	瘤飾(大木8b)、隆帯による渦巻文		中期
121	IVB9e 黒色土	深鉢	体部	すり消し(大木10)、RL		中期
122	IVB9e 黒色土	深鉢	口-体	口唇部上面に縄文、結束縄文	織造	前期
123	IVB9e 黒色土	深鉢	口縁部	瘤状流紋文ほか		前期
124	IVB9e 黒色土	深鉢	口縁部	単体圧痕文		中期
126	IVB9e 黒色土	深鉢	口-体	大木10		中期
127	IVB9e 黒色土	不明	口縁部	口唇部内面に沈線、大割A古(晩期末)		晩期
128	IVB9e 黒色土	鉢	口縁部	弥生前期末		弥生
129	IVB9e 黒色土・黒色土下部(中央区西)東端ベルト黒色土	深鉢	口-体	RL小	織造	前期
130	IVB9e 黒色土	深鉢	口-体	口唇部外面に刺突		中期
131	IVB9e 黒色土	深鉢	口-体	L装		中期
132	IVB9e 黒色土	深鉢	口縁部	口唇部熱赤圧痕、刺突4列に		前期
133	IVB9e 黒色土(中央区西)東端ベルト黒色土	深鉢	体部	大木7a?		中期
134	IVB9e 黒色土	深鉢	体部	沈線で区画、L装、大木10		中期
135	IVB9f 黒色土	深鉢	口縁部	内面ナデ、地文L装		不明
136	IVB9f 黒色土	深鉢	口縁部	突縁部外面にうず巻状流紋文		中期
137	IVB10c 黒色土	鉢	口-体	変形工字文、青木燻(弥生)		弥生
138	IVB10c 黒色土	台付鉢	底部	青木燻(弥生)、台	粗砂	弥生
139	IVB10c 黒色土	深鉢	口縁部	文様が薄い		不明
140	IVB10c 黒色土	鉢	口縁部	刺突と斜めに沈線文		不明
141	IVB10c 黒色土	甕	体部	内面ナデ、熱赤文小		弥生
142	IVB10c 黒色土	深鉢	体部	隆帯、地文良く見えず		不明
143	IVB10c 黒色土	鉢	口縁部	青木燻(弥生前期末)		弥生
144	IVB10c 黒色土	甕	口縁部	流状口縁、幾成悪い		弥生
145	IVB10c 黒色土	甕	口-体	口唇部上面、竹管状工具で流状に整形 (10~12単位分)、L装		弥生
146	IVB10c 黒色土	甕	口縁部	L装、口縁部は無文		晩期
147	IVB10c 黒色土	深鉢	口縁部	突縁に渦巻状流紋ほか		中期
148	IVB10c 黒色土	深鉢	体部	RL、穿孔(大木10)		中期
149	IVB10c 黒色土	不明	口縁部	沈線		弥生
150	IVB10c 黒色土	不明	口縁部	青木燻(弥生前期末)		弥生
151	IVB10c 黒色土	台付鉢小	脚部小	青木燻(弥生前期末)		弥生
152	IVB10c 黒色土	甕	口縁部	R.L、内外面ナデ		弥生
153	IVB10c 黒色土	深鉢	口縁部	L装、口縁部は無文、大木10		中期
154	IVB10c 黒色土	甕	口縁部	刺突による文様、熱赤文		中期
155	IVB10c 黒色土	甕	口縁部	L装、穿孔、内外面炭化物付着	焼	中期
156	IVB10c 黒色土	甕	口縁部	熱赤文小、外面磨き		弥生
157	IVB10c 黒色土	甕	口縁部	口縁部無文		弥生
158	IVB10c 黒色土	深鉢	口縁部	細く薄い沈線		不明
159	IVB10c 黒色土	甕	口縁部	内面に沈線、弥生前期末		弥生
160	IVB10c 黒色土	甕	口縁部	口縁部上方に沈線文、熱赤文		弥生
161	IVB10d 黒色土	甕類	口縁部	内面沈線、青木燻(弥生前期末)		弥生
162	IVB10d 黒色土	鉢	口縁部	外面炭化物付着、大割A古(晩期末)、 口縁部に突起、L装		晩期
163	IVB10d 黒色土	鉢	口縁部	口唇部内面に沈線、大割A新(弥生前)、 変形工字文		弥生
164	IVB10d 黒色土	深鉢	口縁部	口唇部に押圧による装飾		晩期
165	中央区通路下 黒色土	深鉢	底部	L装		前期
166	IVB10d 黒色土	深鉢	底部	L装		不明
167	IVB10d 黒色土	鉢	口縁部	青木燻(弥生前期末)		弥生
168	IVB10d 黒色土	鉢	口縁部	口唇部突起状装飾、内面沈線、変形工字文、 大割A新(弥生)		弥生
169	IVB10d 黒色土	台付鉢小	脚部小	外面炭化物付着、大割A新(弥生前)		弥生

2 出土遺物

器物番号	出土地点・層位	器種	残存部位	文様・装飾・原形・付着物など	粘土	その他
170	FB10d 黒色土	台付鉢か	脚部か	外面炭化物付着、台、青木燻(弥生前期末)	雲母	弥生
171	FB10d 黒色土	深鉢	口縁部	R.L、外面炭化物付着		晩期
172	FB10d 黒色土	浅鉢	口一休	口唇部突起状装飾、L.R		弥生
173	FB10d 黒色土	甕	体部	外面炭化物付着、L.R		小石少 弥生
174	VA3i-3、4・4 (中央区西ベルト付近) 黒色土-検出面	深鉢	口縁部	燻付き木燻4-7p	織織	前期か
175	VA9f 検出面	不明	口縁部	中期初葉		弥生
176	VA9f 検出面	深鉢	口縁部	L.R	織織	前期か
177	VA3j-2 B2a 黒色土 検出面	深鉢	口縁部	前期(大木2?)	織織	前期
178	VA1d・1e・1c・2d・2e・2c 検出面	鉢	口縁部	口縁部無文、L.R		晩期
179	VB2b 検出面	深鉢	体部	L.R、大木10		中期
180	VA4c・4d 検出面	深鉢	口縁部	口縁部に2列の刺突文、大木6		前期
181	VA6c・7c・6a・7d 検出面	深鉢	口縁部	口唇部装飾(大木5)		前期
182	VA4c・4d 検出面	深鉢	口縁部	無文か		前期か
183	調査区一括	深鉢	口縁部	口唇部少し厚くなる、縦溝状に沈溝、大木4		前期

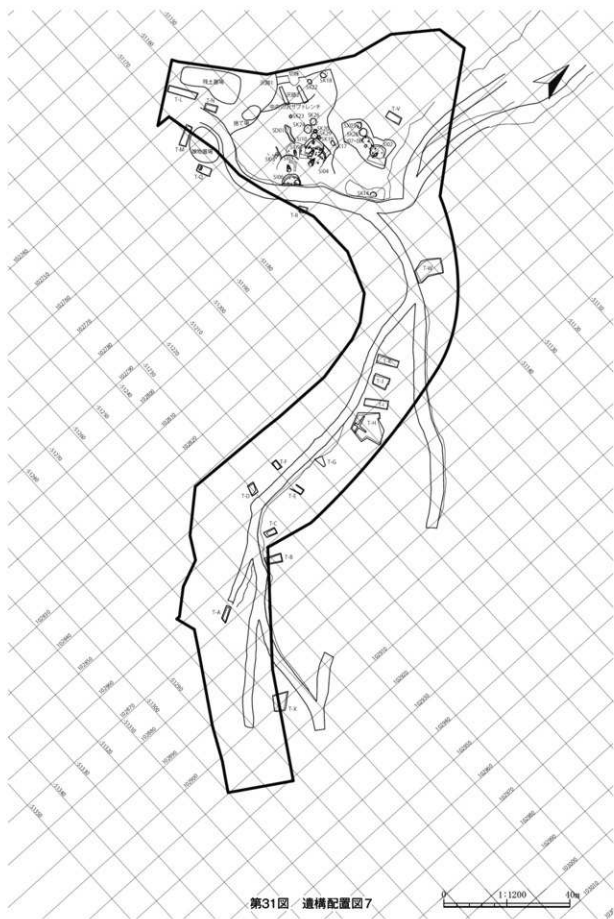
第3表 石器類観察表(H26)

掲載番号	出土地点・層位	器種	分類	計測値(cm, g)				石	材	その他
				長さ	幅	厚さ	重量			
184	SX02	石砥	IA1	2.35	1.70	0.40	1.4	輝岩	新石器第三紀	奥羽山脈
185	VA1cde・2cde 検出面	石砥	IA1	2.20	1.80	0.50	1.8	輝岩	新石器第三紀	奥羽山脈
186	SX03 埋土	石砥	IA2	3.15	1.60	0.55	1.8	輝岩	新石器第三紀	奥羽山脈
187	SX01 埋土	石砥	IA3	3.00	2.30	0.60	4.2	輝岩	新石器第三紀	奥羽山脈
188	SX01 黒色砂礫層	石砥	IB1	5.60	2.70	0.50	8.1	輝岩	新石器第三紀	奥羽山脈
189	SX01 黒色砂礫層	石砥	IB1	4.00	3.40	0.55	3.0	輝岩	新石器第三紀	奥羽山脈
190	VA1cde・2cde 検出面	石砥	IB1	4.30	1.65	0.40	3.0	輝岩	新石器第三紀	奥羽山脈
191	中央区東トレンテ① 1-2層	石砥	IB1	3.00	4.30	0.75	6.5	輝岩	新石器第三紀	奥羽山脈
192	SX01 黒色砂礫層	石砥	IB2	3.00	4.55	0.60	5.9	輝岩	新石器第三紀	奥羽山脈
193	SX01 黒色砂礫層	石砥	IB1	3.45	2.85	0.70	6.9	輝岩	新石器第三紀	奥羽山脈
194	SX02 1層	尖頭器	ID	11.30	2.80	1.15	34.4	輝岩	新石器第三紀	奥羽山脈
195	VA9f 表探	石砥	IC2	5.00	4.05	1.50	26.5	輝岩	新石器第三紀	奥羽山脈
196	VA1cde・2cde 検出面	楕圓器	IC1	3.35	3.65	1.30	11.1	輝岩	新石器第三紀	奥羽山脈
197	VA3cde 検出面	楕圓器	IC1	3.15	2.80	1.10	8.50	輝岩	新石器第三紀	奥羽山脈
198	中央区東トレンテ① 1-2層	楕圓器	IC2	3.65	2.80	0.85	7.1	輝岩	新石器第三紀	奥羽山脈
199	SX02 1層	楕圓器	IF	4.20	2.20	1.05	7.6	輝岩	新石器第三紀	奥羽山脈
200	SX01 黒色砂礫層	楕圓器	IC2	5.90	2.05	0.60	7.0	輝岩	新石器第三紀	奥羽山脈
201	SX03 1層	石斧	IIA	8.4	4.2	1.8	108.7	緑色頁岩	中生代	北上山地
202	S101 床面直上	石斧	IIA	9.6	4.5	3.6	252.6	はんらい頁	中生代白亜紀	北上山地
203	VB2b 黒色土	石斧	IIC	12.0	6.0	3.2	357.8	粗粒閃緑岩	中生代白亜紀	北上山地
204	S101砂 埋土	磨石	IIIB1	6.8	5.8	2.5	146.5	斑岩	新石器第三紀	奥羽山脈
205	SX01 埋土	磨石	IIIB1	10.2	9.0	3.5	583.3	ヒン岩	中生代白亜紀	北上山地
206	SX01 Bベルト1層	磨石	IIIB1	7.3	6.8	4.9	354.8	斑岩	新石器第三紀	奥羽山脈
207	SX02 1層	磨石	IIIB1	8.6	7.9	4.5	450.9	斑岩	新石器第三紀	奥羽山脈
208	SX03 南 黒色土層(レキ含)	磨石	IIIB1	13.1	9.3	5.5	1059.6	ヒン岩	中生代白亜紀	北上山地
209	SX03 1層	磨石	IIIB1	8.0	7.5	5.5	476.8	斑岩	新石器第三紀	奥羽山脈
210	SX03北 1-2層	磨石	IIIB1	6.7	5.3	4.1	230.2	ヒン岩	中生代白亜紀	北上山地
211	S101 NSベルト3層	磨石	IIIB1	11.5	6.2	3.4	1316.8	チャイタ	新石器第三紀	奥羽山脈
212	VB10c 黒色土	磨石	IIC1	12.7	9.1	6.1	1177.7	ヒン岩	中生代白亜紀	北上山地
213	S101砂 3層	磨石	IIIB2	12.5	6.5	4.7	687.7	ヒン岩	中生代白亜紀	北上山地
214	S101 床面	台石	IIIA3	33.7	36.2	8.2	15000.0	はんらい頁	中生代白亜紀	北上山地
410	S101 3層	磨石	IIIB1	10.0	6.3	5.8	577.1	斑岩	新石器第三紀	奥羽山脈
411	DⅡ9f東区東端トレンテ 3層	磨石	IIIB2	11.5	6.2	3.5	448.8	ヒン岩	中生代白亜紀	北上山地



第30図 遺構配置図6

0 1:1200 40m



第31図 遺構配置図7

V 平成27年度調査

1 概 要

平成27年度調査区は、平成26年度調査区の北隣に位置する。調査区の現況は杉・松による山林であった。山の斜面部及びその裾の一部に小さく舌状に張り出す部分があった他、沢部分も調査区に含まれていた。検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡が7棟、土坑が11基、溝跡が1条、古代の竪穴住居跡が1棟、古代末～中世の竪穴建物跡1棟、近世墓1基、時期不明の土坑4基などである。遺物は、縄文土器5箱、石器12箱、平安時代の土師器が0.1箱、近世の銭貨が6枚である。

2 基本層序（第44図、写真図版36）

広い調査区であったため各地点で様相は異なる。ここでは調査区西側を掲載した。

3 検 出 遺 構

（1）竪穴住居跡

平成27年度調査では9棟見つかっている。内訳は縄文時代の竪穴住居跡7棟、平安時代の竪穴住居跡1棟、中世の可能性のある竪穴建物跡1棟である。

S I O 2（第32図、写真図版20～22）

〔位置・検出状況〕千鶴の浜に面するように山の南側斜面中腹部に位置している。地山上面で暗褐色土をした埋土の広がりや大小の角礫（炉跡周辺）を確認した。平面図では省略しているが、松の切株が複数、遺構内にはあった。

〔規模・形状〕南側へ降る斜面地形であるため南側の壁が失われている。推定値になるが南北5m、東西5mの円形を基調とした平面形だったと推測される。床面中央南側に石で囲んだ炉跡を持つほかに、炉跡の少し北側には地床炉も1基確認された。壁際に周溝は無かった。

〔重複遺構〕S I O 7・0 8と重複するが、新旧関係は不明である。

〔埋土・堆積状況〕埋土上位は暗褐色土、埋土の中位から下位、及び壁際は地山起源の黄褐色土を主体とする自然堆積である。近年の攪乱は見られなかった。

〔壁・底面〕壁が残っているのは北東-北-西側のみであるが、斜面上方に当たる北側の壁などは残りが良かった。ここでは床面から1.2m程残っており、床面から途中で段がつくものほは垂直に立ち上がっている。床面は概ね平坦であり、張床となっている部分は無い。但し、南側の床面も斜面地形であったため残ってはいない。

〔炉跡〕床面中央南側から複数炉とみられる炉跡を検出した。平面規模は南北1.6m、東西0.7～0.9mで、南に行くほど幅広になっている。少なくとも2室以上は石によって囲まれていたようだが、元位置を留めているものは多くない。最も北側の石囲部分は東西40cm、南北53cmの範囲が、方形状に垂角礫で囲まれ、深さは床面から18cmある。これに南隣する部分も複数の空間に分かれていたかもしれないが、元位置を留めている炉石は南端部にしかない。ここでは前庭部として一つの空間で報告する。南

北100cm、東西90cmの隅丸長方形の平面形で深さは床面から22cm前後であった。焼土の広がりには確認されなかった。周囲に土器埋設の痕跡も見られなかった。

地床が複式炉の少し北西側で確認された。南北50cm、東西45cm、焼土の厚さは6cmを測る。

〔出土遺物〕 炉跡の北東側と北壁際を中心に土器・石器類が出土している。

〔帰属時期〕 炉跡の形態や出土遺物から縄文時代中期後葉段階に位置づけられる。

S I O 3 (第33～35図、写真図版22・23)

〔位置・検出状況〕 山裾から舌状に小さく張り出す丘陵部の上に位置している。浅い表土を除去した段階で複式炉を検出したため、周囲にベルトを設定して精査を始めたが残りは良くなかった。

〔規模・形状〕 南側へ緩やかに下る地形であることに加え、S I O 5との重複により北西部以外の壁は失われている。南東半部は床面も失われていた。推定値になるが南東-北西6.5m、東西7.0mの円形を基調とした平面プランであったと推測される。複式炉を床面中央南東側に設け、この炉跡からやや北西側にも火を焚いた痕跡が床面に1箇所確認された。柱穴も探したが見つからなかった。

〔重複遺構〕 S I O 5よりも古く、S I O 9よりも新しい。S I O 6との新旧関係は判然としませんが本遺構のほうが古いと推測される。

〔埋土・堆積状況〕 埋土の残りは良くない。加えて地山起源の黄褐色土を主体とするため壁と床面との違いが不明瞭であった。

〔壁・床面〕 壁が残っているのは北西側のみである。床面から30cm程残っており、底面より垂直気味に立ち上がっている。

底面は凹凸が無いものの、ここの現地形と同じく南東側へと緩やかな傾斜を持って下っている。そのため南東側は流失して残っていない。貼床となっている部分も無い。かなり注意して柱穴を探したが見つからなかった。

〔炉跡〕 床面中央南東側から複式炉を1基検出している。平面規模は長軸方向で約2.2m、東西0.5～1.2mで、南東側へ行くに従い幅が広がる石囲部が4基連なるような形状をしている。表土直下で確認されたこともあって、南東部程炉に使われていた石が取れて無くなっていった。この複式炉も水平ではなく、ここの地形と同様に南東側へと緩やかに下がっている。もっとも広い南東側の石囲部（前庭部）は北東部と北西部のみ石が残っており、南西部は石が抜けてしまったようである。南東部は初めから石が用いられていなかったのかもしれない。深さは14cm程である。

前庭部北に隣接する部分を石囲部1、その北側を順に石囲部2、北端を石囲部3とした。石囲部2と石囲部4からは火を焚いていた痕跡が認められた。石囲部2の平面規模は北西-南東0.5m、北東-南西0.7mの不整形台形で掘り込みの深さは18cmを測る、石囲部3は0.2×0.5mの掘り込みの深さが32cm、石囲部4は0.3×0.4mで掘り込みの深さが28cmある。何れも大小の花崗岩の角礫を並べて造られている。

複式炉の北西部にも小規模な火を焚いた痕跡が1箇所見つけた。焼土の厚さは2cmである。

〔出土遺物〕 少量の土器と礫石器類が出土しているが、土器は破片によるものが多く、床面に置かれた状態のものなどは無かった。

〔帰属時期〕 炉跡の形態や出土遺物から縄文時代中期後葉段階と考えられる。

S I O 4 (第36・37図、写真図版23～25)

〔位置・検出状況〕 山裾にある小さく舌状に張り出す丘陵部に位置している。浅い表土を除去したII

層面で暗褐色土をした埋土の広がりを確認したが、初めは遺構になるのか分からなかった。ベルトを設定し、暗褐色土下にある地山のように見える黄褐色土を掘り下げたところ炉跡や床面が検出された。

〔規模・形状〕南側へ緩やかに下る地形であるため南側が、S I 1 0との重複により北西側の壁が失われている。推定値になるが南北7.5m、東西7.3mの円形を基調とした平面形と考えられる。床面中央南側に複式炉を有し壁際には周溝が2列、柱穴が11基確認された。

〔重複遺構〕S I 1 0と重複し、本遺構のほうが古い。

〔埋土・堆積状況〕埋土上位は暗褐色土、埋土下位は地山起源の黄褐色土を主体とする自然堆積である。炉の東側からは比較的多くの土器片が出土した。

〔壁・底面〕壁が残っているのは北東部のみであるが表土直下から検出されていた部分なので残りは良い。底面から1.5m程残っており、底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

底面は概ね平坦である。貼床となっている部分は無い。北側は残りが良いが南側は良くない。

周溝は北側の壁際に2列見つかっているが、本来は全周していたと推測される。外側の周溝幅は10～8cmが多く底面は少し凹凸がある。残存する長さは約6mである。

内側の周溝は小柱穴が連なるような形態をしており、残存する長さは約5mである。

〔炉跡〕床面中央南側から複式炉を1基検出した。平面規模は南北2.8m、東西0.6～1.7mで、南に行くほど大きくなる石囲部が4基連なるような形状をしている。松の根により壊されている部分も多い。炉跡は水平ではなく、ここの地形と同様に南側へと緩やかに下がっている。最も大きい南側の石囲部は南側からは仕切り石が検出されず開いた状態であった。この部分を前庭部とする。前庭部は長さ50cm、幅20cm前後の直角礫を東西に配し、北側は10～15cmある複数の礫で石囲部と間仕切りしている。検出面からは26cm程の掘り込みを持つ。前庭部北に隣接する部分を石囲部1、その北側を順に石囲部2、北端を石囲部3とする。石囲部2と石囲部3からは火を焚いていた痕跡が観察された。焼土層の厚さは3～4cmである。北端の石囲部3が最も小さく石で囲まれる内部は40×15cm程しかない。内部に火を焚いた痕跡は残っていなかった。北端の石囲部外側に小ピットがあったが、土器は埋設されていなかった。

〔出土遺物〕炉跡の東側を中心に土器・石器類が出土しているが、破片によるものが多く、床面に残された状態のものなどは無かった。

〔帰属時期〕炉跡の形態や出土遺物から縄文時代中期後葉段階と考えられる。

S I 0 5 (第33～35図、写真版25・26)

〔位置・検出状況〕山裾から南側へ小さく舌状に張り出す丘陵部に位置している。浅い表土を除去した段階で暗褐色土及び褐色土の広がりを確認したものの、初め遺構になるとは思っていなかった。念のためベルトを設定し、その下層にある地山迄掘り下げたところカマドや焼土が見つかり竈穴住居跡であることが判明した。

〔規模・形状〕南側へ緩やかに下る地形であること、表土が薄い場所であることなどから北東壁が僅かにその痕跡を留めている程度で他の壁は失われている。推定値になるが、およそ5m四方の隅丸方形をしていたと推測され、北側壁の一部にカマドの残りがみられた。他に床面で火を焚いた痕跡が4箇所確認された。柱穴は見つけられなかった。

〔重複遺構〕S I 0 3との重複関係では本遺構のほうが新しい。

〔埋土・堆積状況〕埋土は殆ど残っていないが、褐色土・暗褐色土からなる自然堆積である。

〔壁・床面〕壁は北側の一部が僅かに残るのみである。壁周溝は無かった。

床面は貼床ではなく、地山面をそのまま床面とし硬く締まっていた。しかし北側以外は床面の範囲が不明瞭であった。

〔カマドほか〕北側の壁付近に20～30cmの川原石が3個まとまって見つかっている場所がカマドのあったところのようである。殆ど壊れていて川原石も元位置から動いてしまっていた。そのため断面図は作成していない。煙道部も見つからなかった。川原石と共に土師器壺片が出土している。

この他に床面からは火を焚いた痕跡が4箇所見つかっている。焼土の厚さは2～4cmであった。

〔出土遺物〕カマド部分から土師器壺の破片が少量出土した。他の場所からは出土していない。

〔帰属時期〕平安時代。

S I O 6 (第35図、写真図版26・27)

〔位置・検出状況〕山裾から小さく舌状に張り出す丘陵部上に位置し、今回見つかっている竈穴住居跡の中では最も張出の南先端（海側）にある。山林伐採の作業道がこの舌状の張出部を削っており、その断面に炉跡の石囲部が露出していたため本遺構が見つかった。

〔規模・形状〕南側へ緩やかに下る地形であること、山林伐採の作業道により、南側から南東側の壁及び床面が削平されて失われている。残存値になるが北西-南東3.0m、北東-南西5.8mの円形を基調とした平面形をしていたと推測される。炉跡は床面中央南側にあるが南東側は削平され失われている。壁際に周溝は無かった。柱穴は4基確認されている。

〔重複遺構〕SK16との重複関係では本遺構のほうが古い。

〔埋土・堆積状況〕埋土は地山起源の黄褐色土を主体とする自然堆積である。炭粒を不規則に少量含む以外に地山と見分けが殆どつかない。そのため壁がしっかり出ているか自信が無い。とくに北西側の壁面は不確実である。

〔壁・床面〕山林伐採用の作業道で削平された南東半以外は壁が残っている。とくに北西部は残りが良い。床面から1.4m程残っており、底面から垂直気味に立ち上がり、中ほどからはやや外に開くように立ち上がっている。

底面は凹凸が無く平坦であったが、極端に硬く締まるものではない。貼床となっている部分も無かった。

〔炉跡〕床面中央南側で炉跡1基が検出されている。炉跡は更に南東側へと続いていたと推測されるが山林伐採用道路により削平され残っていない。残存する石囲部の平面規模は北西-南東0.6m、北東-南西0.6mで、亜角礫と円礫を組み合わせる南東に行くにしたがって少し大きくなる台形状に囲んでいる。深さは47cmを測る。火を焚いた痕跡として焼土粒が石囲部の中に少量見られた。

〔出土遺物〕床面・炉内出土の遺物はない。主に炉跡北側の埋土中位からの土器及び礫石器の出土が多かった。

〔帰属時期〕炉跡の形態や出土遺物から縄文時代中期後葉段階と考えられる。

S I O 7 (第35図、写真図版27・28)

〔位置・検出状況〕山の中腹部に位置している。浅い表土を除去すると地山面となる。その段階で床面の一部と炉跡を確認した。

〔規模・形状〕南側へ下る地形であること、S I O 8との重複、S I O 2を先に精査してしまっただけ本遺構の壁が全て失われている。推定値になるが直径約4mの円形を基調とする平面形であったと推測される。炉跡が床面中央に配置されていたと考えられる。壁溝は無かった。柱穴は1基見つかった。

ている。

〔重複遺構〕S I O 2・0 8の重複関係は土層断面としては観察されていないが、炉跡の形態からS I O 2よりは新しく、遺構の平面形態からS I O 8よりも古いと考えている。

〔埋土・堆積状況〕遺構埋土は残っていない。

〔壁・底面〕壁は残っていない。床面は炉跡より北側のみが残っている。地山面を床としていた。平坦であるが硬く締まるわけではない。重複するS I O 8とは同じ標高の床面であった。

〔炉跡〕床面のほぼ中央と想定される位置から石囲炉を1基検出している。平面規模は南北1.2m、東西0.8mで、円礫や亜角礫を用いて円形に石を配置している。その内部には火を焚いた際に出来た焼土が30×25cmの範囲で残っていた。石を据えるために掘られた炉跡の深さは13～27cmを測る。

〔出土遺物〕炉・床面に置かれた状態のものなどは無かった。

〔帰属時期〕炉跡の形態から縄文時代晩期と考えられる。

S I O 8（第38図、写真図版27・28）

〔位置・検出状況〕山の中段部に位置し、Ⅲ層上面で検出している。斜面地形であるため、南側の斜面下方部は流失して残っていない。

〔規模・形状〕斜面上方にあたる北半部のみが残っていた。また東側もS I O 2を先に精査したため失われている。残存する規模は南北2.7m、東西3.9mで平面プランは隅丸方形若しくは隅丸長方形と想定される。壁に沿って柱穴が4基、床面からは火を焚いた跡が1箇所見つかった。

〔重複遺構〕S I O 2・0 7と重複しているが、土層断面による新旧関係は確認していない。

それでも本遺構が最も新しいと考えている。

〔埋土・堆積状況〕埋土上位は褐色土、埋土下位は地山起源の黄褐色土を主体とする自然堆積である。

〔壁・床面〕壁が残っているのは北側と西側の一部のみであるが現表土直下から検出されていた部分なので残りは悪くない。床面から10m程残っており、床面より階段状に外傾しながら立ち上がっている。

床面は凹凸が無いものの周りの地形と同じで南側へと僅かな傾斜を持って下っている。貼床となっている部分は見られない。遺構南半部は流失して残っていない。重複するS I O 7とは同じ標高の床面であった。

北側の壁際に沿って柱穴が4基確認された。その内の3基はほぼ直線の且つ等間隔に配される。柱穴が西側には延びていないことを確認できたが、東側はS I O 2を先に精査していたため、本遺構に伴う柱穴は失われた可能性がある。

〔炉跡〕床面中央西側から地床炉を1基検出している。平面規模は南北0.4m、東西0.5mで、焼土の厚さは5cmに満たない。

〔出土遺物〕遺構に伴う出土遺物無し。

〔帰属時期〕遺構の平面形態から古代末～中世の可能性はある。

S I O 9（第33・34図、写真図版29・30）

〔位置・検出状況〕山裾から南側へ舌状に小さく張り出す丘陵部上に位置している。浅い表土を除去した炉跡及び床面が現れたため壁は残っていない。

〔規模・形状〕現地表面から地山面まで30cmに満たないこと、S I O 3・0 4との重複により壁が全て失われている。推定値になるが直径5m程の円形を基調とした平面形であったと考えている。炉跡

を床面中央南東側に設けている。柱穴は3基しか見つけれなかった。

〔重複遺構〕S I O 3・0 4と重複関係にあるものの本遺構の埋土が殆ど残っていないため土層観察による新旧関係は判然としなない。しかし仮に本遺構が新しいのであれば、S I O 3・0 4と重なる部分を貼床のようにしなければならなかったと推測されるが、そういった痕跡は見られなかったため、本遺構が新しいとは考えにくく、S I O 3・0 4よりは古い遺構とみている。

〔埋土・堆積状況〕殆ど残っていないかった。

〔壁・底面〕もともと現表土から地山面まで30cmに満たないこと、他遺構と重複もしていることなどから壁は残っていない。地山面を床面としており硬かったが、平坦ではなく南側へ向けて緩やかに下がっていた。柱穴は床面をかなりの時間をかけて精査したが3基しか見つからなかった。

〔炉跡〕床面中央南東側から複式炉を1基検出している。平面規模は北西-南東1.5m、東西0.5-0.6mで、南東に行くにしたがって若干幅が広がる石囲部が3室連なるような形状をしている。この炉跡も水平ではなく、ここの地形と同様に南側へと緩やかに下がっている。もっとも大きい南東側の石囲部は南東側には仕切り石が検出されず開いた状態であった。石が抜けて失われた可能性が高い。この部分が前庭部にあたり、長さ60cm、幅60cmの方形に近い空間を大小の亜角礫で囲み、北側は径20-10cmある複数の円礫・角礫で石囲部と間仕切りをしている。

前庭部北に隣接する部分を石囲部1、その北西先端を石囲部2とする。石囲部1と石囲部2からは火を焚いていた痕跡が認められた。焼土層の厚さは10-13cmである。北側の石囲部2が最も小さく、石で囲まれる内部は50×25cm程しかない。周囲に土器は埋設されていないか探したが見つからなかった。

〔出土遺物〕土器・石器類が少量出土しているが、破片によるものが多く、床面に置かれた状態のものなどは無かった。

〔帰属時期〕炉跡の形態や出土遺物から縄文時代中期後葉段階と考えられる。

S I I O (第36・37図、写真図版23・24・30・31)

〔位置・検出状況〕山裾から小さく舌状に張り出す丘陵部上に位置している。浅い表土を除去した段階で暗褐色土の広がりを確認したものの、初めは遺構とは認識していなかった。念のためベルトを設定し、暗褐色土下にある地山のように見えていた黄褐色土を掘り下げたところ炉跡や床面を検出され堅穴住居跡であることが判明した。

〔規模・形状〕南側へ緩やかに下る地形であること、S I O 4との重複により南側から南東側の壁が失われている。推定値になるが南北6.5m、東西6.3mの円形を基調とした平面形をしていたと推測される。炉跡を床面中央南側に配置し、壁際には周溝が1列巡る。柱穴は11基、床面で火を焚いた痕跡が2箇所確認された。

〔重複遺構〕S I O 4との重複関係では本遺構のほうが新しい。またSK 29のほうが新しい。

〔埋土・堆積状況〕埋土上位は暗褐色土や黒褐色土、埋土下位は地山起源の黄褐色土を主体とする自然堆積である。

〔壁・底面〕壁が残っているのは北側から西側にかけてのみであるが現表土直下から検出されていた部分なので残りは良い。底面から1.1m程残っており、底面から垂直気味に立ち上がり、中ほどからはやや外に開くように立ち上がっている。

底面は凹凸が無いものの周りの地形と同じく南側へと緩やかな傾斜を持って下っている。貼床となっている部分は無い。北側は残りが良いが南側は良くない。重複するS I O 4とは同じ標高の床面であった。

周溝は西側の壁際と東側でそれぞれ1列見つかっている。北側壁際を注意して探したが周溝は無かった。よって周溝は壁際を全周するものではないと言える。周溝上幅は30～15cmが多く底面は少し凹凸がある。残存する長さは西側約3.5m、東側が約2.5mである。

〔炉跡〕床面中央南側から複式炉を1基検出している。平面規模は南北2.3m、東西0.5～1.2mで、南に行くにしたがって大きくなる石囲部が4基連なるような形状をしている。松の根により壊されている部分も多い。この炉跡も水平ではなく、ここの地形と同様に南側へと緩やかに下がっている。もっとも大きい南側の石囲部は南側には仕切り石が検出されず開いた状態であった。この部分が前庭部にあたる。前庭部は長さ40cm、幅15cm前後の亜角礫を東西に配し、北側は20～10cmある複数の礫で石囲部と間仕切りをしている。検出面からは35cm程の掘り込みを持つ。前庭部北に隣接する部分を石囲部1、その北側を順に石囲部2、北端を石囲部3とする。

石囲部2と石囲部3からは火を焚いていた痕跡が認められた。焼土層の厚さは3～4cmである。北端の石囲部3が最も小さく石で囲まれる内部は40×20cm程しかない。内部に火を焚いた痕跡は無かった。周囲に土器が埋設されていないか探したが見つからなかった。

〔出土遺物〕炉跡を中心に土器・石器類が出土しているが、破片によるものが多く、床面に残された状態のものなどは無かった。

〔帰属時期〕炉跡の形態や出土遺物から縄文時代中期後葉段階と考えられる。

(2) 土 坑

主に山の中腹部から検出された。各土坑の形態的特徴、埋土、時期については観察表に整理している。

(3) 溝 跡

S D 0 1 (第39図、写真図版35)

〔位置・検出状況〕竅穴住居跡がまとまって見つかった山裾の舌状に張り出す丘陵部に位置し、地山面で検出している。

〔規模・形状〕長さ6.0m、幅1.2～2.0m、深さは0.3mを測る。東側は残りが良く、西側が斜面下方向になるため徐々に遺構も浅くなって途切れてしまう。東半部は比較的直線的であるのに対して、西半部は少し曲がっている。底面には水が流れたような筋状の痕跡が少し見られた。

〔埋土・堆積状況〕褐色土を主体とする自然堆積と判断した。

〔遺構の性格〕本遺構は竅穴住居跡が多く分布する舌状に張り出す丘陵部上面から下方の裾部にある捨て場のほうへと延びている。自然に出来る溝であれば他の場所からも検出されておかしくはないが、本遺構の1条しか見つからない。こうしたことから本来は居住域と捨て場とを往来する通路であったと推察される。通路として他の場所より掘り窪められていたために雨水も流れやすかったと考えられている。

〔出土遺物〕遺構に伴うかたちでの出土はない。

〔帰属時期〕詳細は不明であるが、縄文時代の可能性がある。

(4) その他の遺構

S X 0 5 (第40図、写真図版35)

〔位置・検出状況〕山の中腹に位置し、S I 0 7・0 8やS K 2 8の西側で見つかっている。地山上

面で石で組んだ炉跡を検出し、その周囲を精査して床面と壁を探した。

〔規模・形状〕斜面下にあたる南側は流出して残っていない。残存部分での規模は南北1.7m、東西2.1m、底面から検出面まで0.7～0mを測る。平面形は不整な円形と推測される。底面はあまり平坦な面は広がらず、炉跡部分だけが平坦でそれ以外は北側から南側へと下る緩やかな斜面となっている。壁は外側へ開くように立ち上がっている。柱穴は無かった。

〔埋土・堆積状況〕褐色土及び暗褐色土からなる自然堆積である。

〔炉跡〕薄く割れた角礫を多用して方形に巡らせて炉跡にしていたようである。南側だけ石が無いが本来は全周していたと考えている。石で囲まれる範囲は南北約30cm、東西約34cmである。焼土は8cmの厚さがあった。

〔重複遺構〕なし。

〔遺構の性格〕平面規模が小さいこと柱穴が無いこと遺物が出土していないことなどから住居跡とはならず、斜面を削って屋外に炉跡を設けていたと考えている。

〔出土遺物〕遺構に伴っての出土はなかった。

〔帰属時期〕詳細は不明であるが、縄文時代の可能性がある。

捨て場（第40図・写真図版35）

〔位置・検出状況〕堅穴住居跡がまとまって見つかった山裾の舌状に張り出す小規模な丘陵部を西側に下りた部分にある。この場所は沢跡1・2として調査した二つの沢跡が合流する部分にあたる。現表土を除去した直下のⅡ層で検出している。

〔規模〕遺物の広がりには北側の上流部及び東西方向へは広がらないことが調査で確認できたが、下流部にあたる南側だけは山林伐採時の作業道路によって削られているため詳細は不明である。

〔埋土と遺物の状況〕土器については細かく割れた破片が多く、原形を留めているもの、その場で潰れたような状態で出土した個体は無かった。それでも他の場所よりも出土量は明らかに多い。石器は礫石器が殆どで剥片石器は少ない。剥片石器を製作した際に出る剥片類も見られなかった。その他の遺物は出土していない。

4 出土遺物

土 器

縄文土器（第45～47図、写真図版37・38）

多くが中期後半に位置づけられると考えている。地紋を施している部分と無文となっている部分との区画に沈線を用いるもの（301・302・304・307・316・317・319・320・324・328・330・331・335）、更に沈線で区画する他に刺突を持つもの（300・305・318・329）、区画を沈線ではなく細い隆線でおこなっているもの（332～334）などがある。区画を持たず地紋のみのものも多い。深鉢としては303・308・307等がある。小振りな鉢では309・317・322・338が見られる。更に小型のものでは314・315がある。

325は晩期末から弥生時代初頭のものと考えられる。

土師器（第47図、写真図版38）

何れも非ロクロの甕で口縁部が短く、胴部は不明瞭なナデやケズリで器形を整えている。345は底径

が胴部とはほぼ同じくらいに大きく、底面には木葉痕がある。

石器類（第48～56図、写真図版39～45）

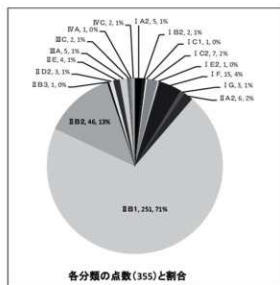
石器類については殆どが縄文時代中期後葉段階に位置づけられると考えている。右下のように簡易的に分類して数量的な傾向を示した。遺構内外を合わせて今回の調査では355点の石器類が出土している。その中で最も多く出土したのが磨石である。扁平に近い円礫の広い面を使用しているもの（ⅡB1）、少し角がある長円形礫の縁辺部を使用しているもの（ⅡB2）で全点数の84%に達する。

その一方、石鏃や石匙、搔削器といった剥片石器、磨製石斧等はあまり出土しなかった。特に剥片石器製作に伴って出る剥片は殆ど出土しなかった。捨て場からはある程度剥片が出土すると予想していたが、まとめて廃棄されるといった行為はなかったようである。礫石器の中で敲石についても殆ど出土していない。堅果類の利用には必要な石器と思われるが石皿もそれほど多くは出土しなかった。

削平によって失われている石器も多いと思うが、条件は同じであるから偏った数量はやはり本遺跡の生業の在り方を反映していると思われる。魚骨・貝類などは出土していないものの海産物利用の際に礫石器を使用するのかもしれない。

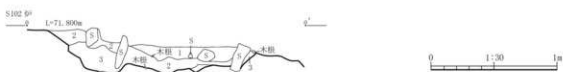
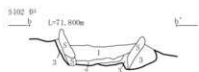
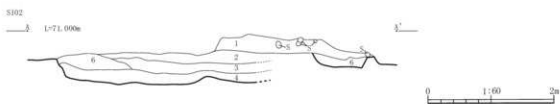
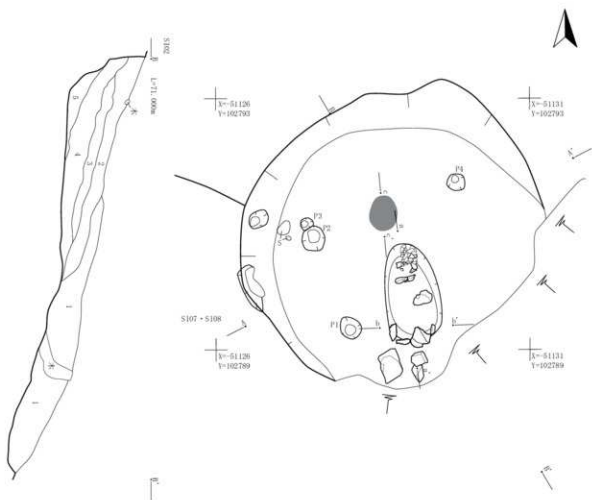
石器分類基準

I	剥片石器	A	石鏃	1	有茎
				2	無茎
				3	その他
		B	石匙	1	縦長
				2	横長
				3	その他
C	搔削器	1	搔器		
		2	削器（不定形なもの含む）		
D	尖頭器				
E	打製石器	1	刃部を両面		
		2	刃部を片面		
F	剥片				
II	礫石器	A	石皿	1	脚・縁有
				2	脚・縁無し
		B	磨石	1	広い面を使用
				2	縁辺部を使用
		C	敲石	1	広い面を使用
				2	端部を使用
				3	広い面と端部の両方
		D	磨石・敲石複合	1	広い面を磨・敲
				2	広い面を磨、端部を敲
				3	縁辺部を磨、広い面を敲
4	縁辺部を磨、端部を敲				
III	磨製石器	A	石斧		
		B	石斧（小形）		
		C	鏃		
IV	その他	A	石棒		
		B	石剣		
		C	台石		
		D	その他		

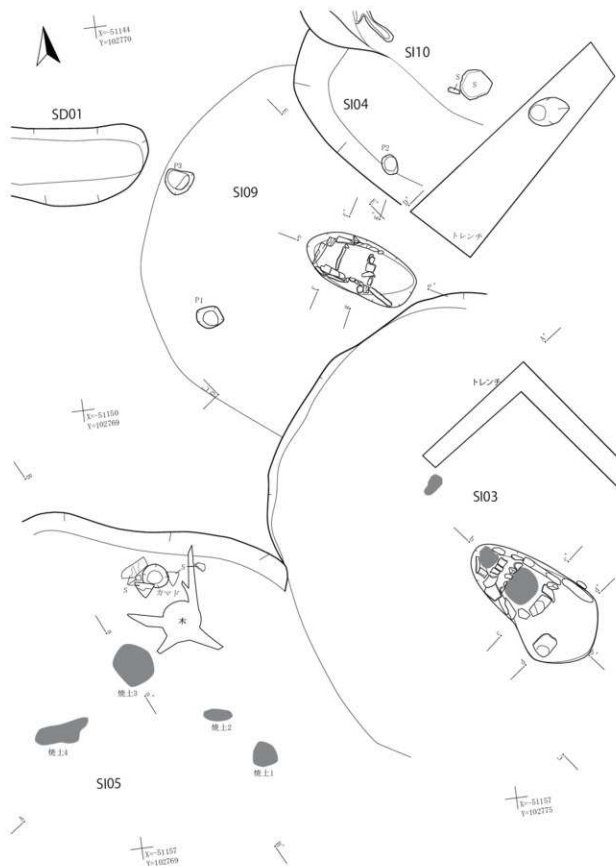


銭貨（第57図、写真図版45）

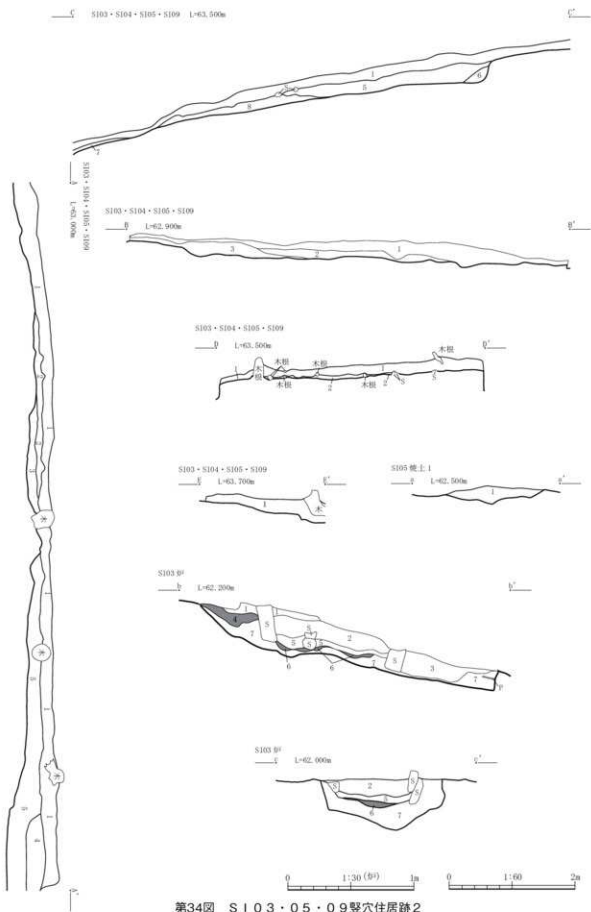
SK15から7枚の寛永通宝が出土している。墓に副葬されたもので詳しくは観察表に記載した。



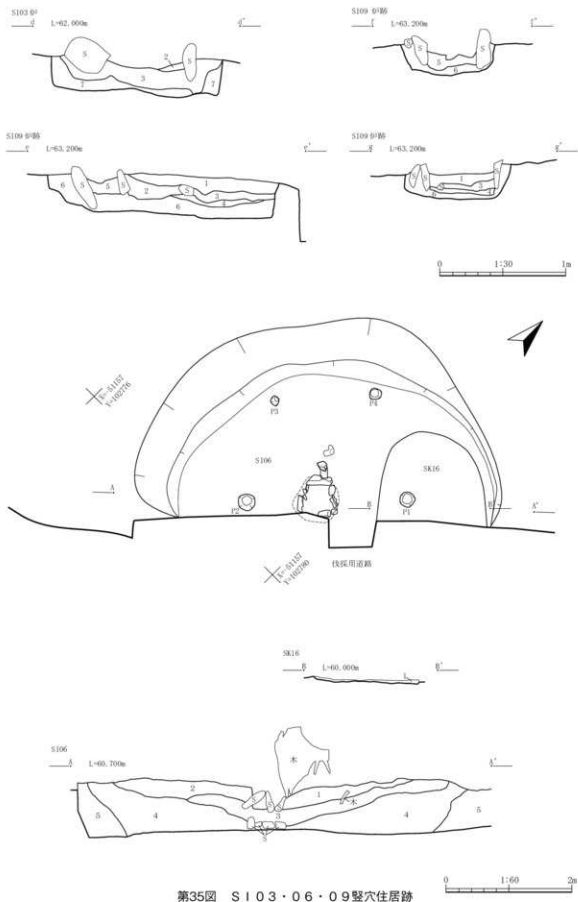
第32圖 S102 竪穴住居跡



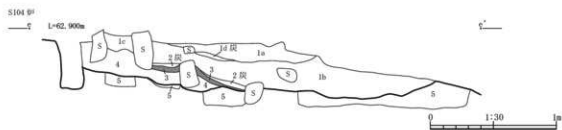
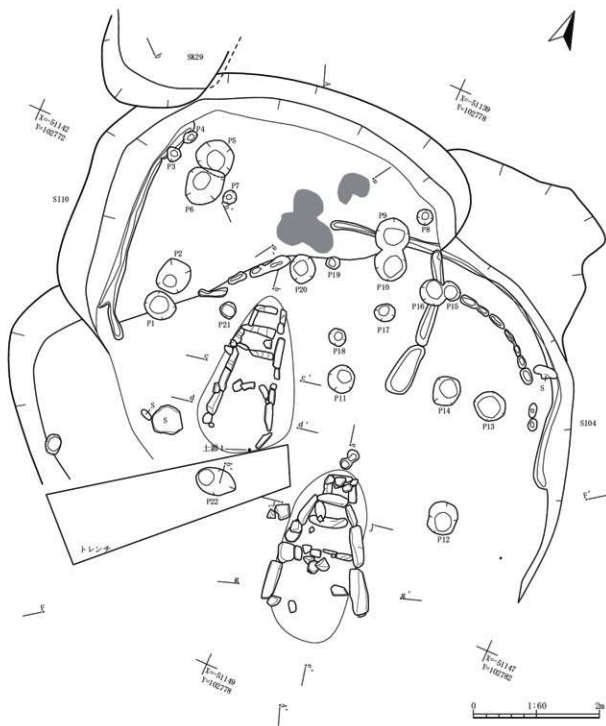
第333図 S103・05・09竪穴住居跡1



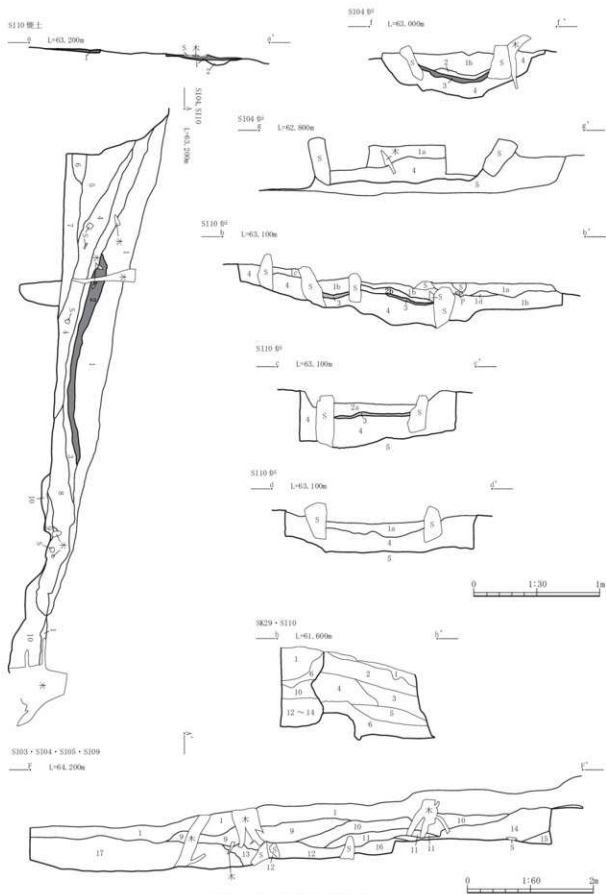
第34圖 S103·05·09豎穴住居跡2



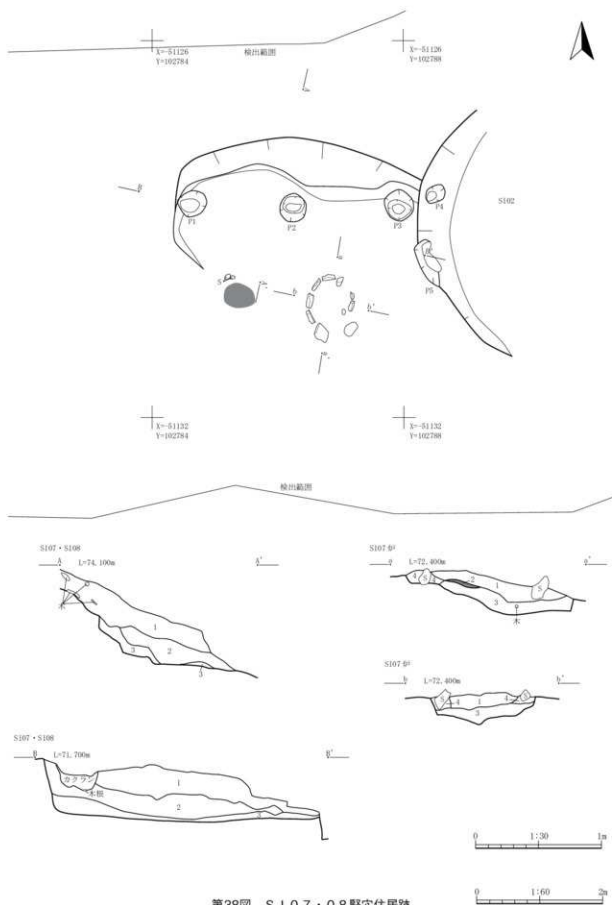
第35図 S103・06・09 竪穴住居跡



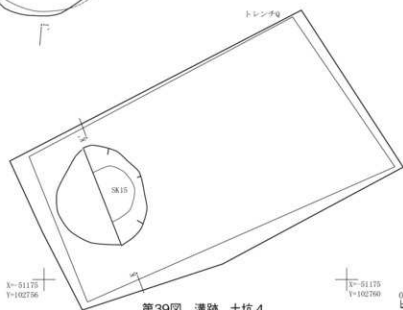
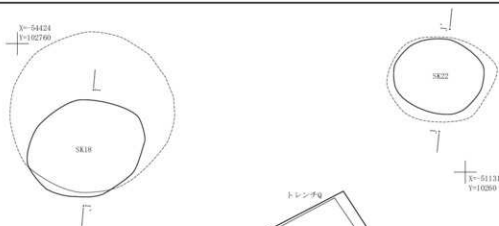
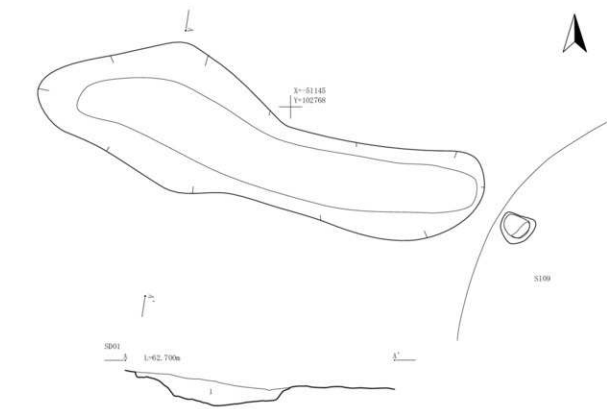
第36図 S104・10 竪穴住居跡1



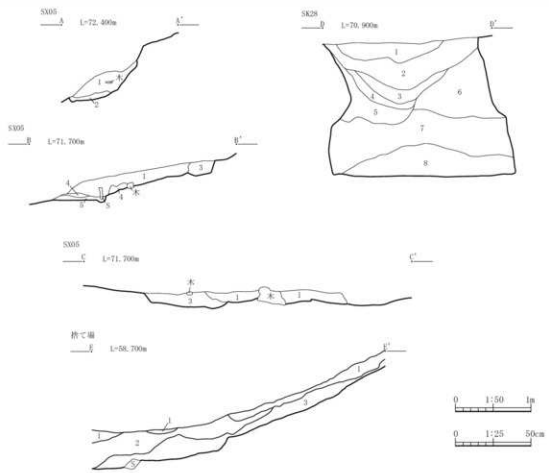
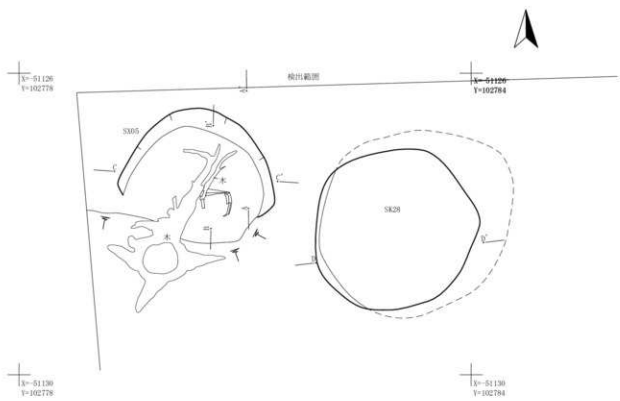
第37図 S104・10 竪穴住居跡2



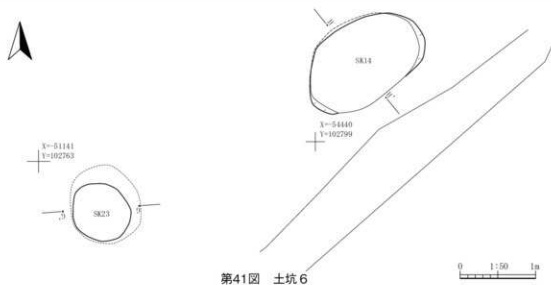
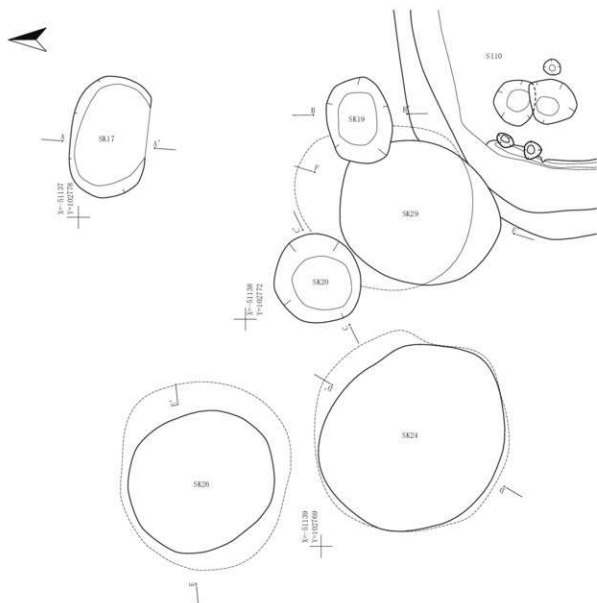
第38図 S107・08 竪穴住居跡



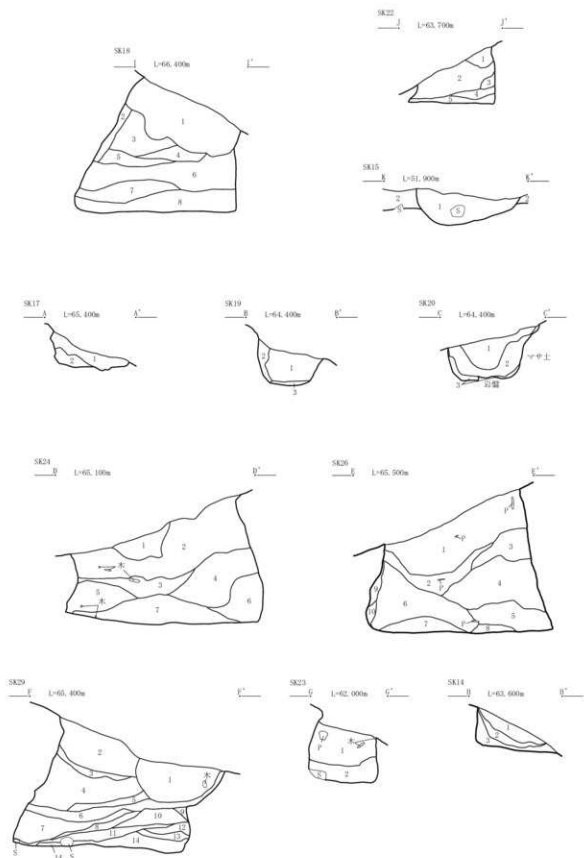
第39図 溝跡、土坑 4



第40図 土坑5、屋外炉跡、捨て場1



第41図 土坑6



0 1:50 1m

第42圖 土坑 7

遺構名	層位	注記
S202 A-A' B-B'	1	10YR3/3暗褐色土 草木根多 表土 粘性なし・細り弱
	2	10YR3/3暗褐色土 粘性弱・細りやや有
	3	10YR2/2黒褐色土 炭粒を微量含む 粘性弱・細りやや有
	4	10YR4/6褐色土 炭粒を微量含む 土器片出土 粘性弱・細りやや有
	5	10YR5/4に5.0黄褐色土 風化花園岩多量を含む 粘性弱・細りやや有
S202 中 a-a' b-b'	1	10YR4/4褐色土 黒褐色土ブロック少量含む 粘性弱・細りやや有
	2	10YR2/1黒色土 下部に少量ずつ広がる 粘性弱・細りやや有
	3	10YR5/4に5.0黄褐色土 粘性・細りやや有
S202 焼 上-e'e'	1	注記なし
	2	注記なし
S303, S304, S305, S309 A-A' B-B' C-C' D-D' E-E'	1	10YR3/3暗褐色土 表土 草木根多 粘性弱 細り弱
	2	10YR2/2黒褐色土 炭粒を微量含む 粘性弱りやや有(S305埋土)
	3	10YR4/4褐色土 暗褐色土ブロック少量含む 粘性弱 細りやや有(S305埋土)
	4	10YR4/6褐色土 炭粒微量含む 粘性弱 細りやや有(S304埋土)
	5	10YR4/4褐色土 炭粒微量含む 粘性弱 細りやや有(S304埋土)
	6	7.5YR5/8明褐色風化花園岩 粘性無し 細りやや有
	7	10YR2/3黒褐色土 地山ブロック少量含む 粘性・細りやや有
	8	10YR4/4褐色土 炭粒微量含む 粘性・細りやや有
S303, S304, S305, S309 F-F'	1	10YR3/3暗褐色土 表土 草木根多 粘性弱 細り弱
	9	10YR4/4褐色土 粘性・細りやや有
	10	10YR4/6褐色土 風化花園岩ブロックを多量を含む 粘性弱 細りやや有
	11	10YR3/4暗褐色土 黒褐色土ブロック少量含む 粘性弱 細りやや有
	12	10YR3/4暗褐色土 風化花園岩ブロック少量含む 粘性弱 細りやや有
	13	10YR4/4褐色土 炭粒微量含む 粘性弱 細りやや有
	14	10YR4/3に5.0黄褐色土 炭粒微量含む 粘性弱 細りやや有
	15	10YR5/8黄褐色土 風化花園岩少量含む 粘性弱 細りやや有
	16	10YR3/4暗褐色土 粘性弱 細りやや有
	17	10YR3/4暗褐色土 粘性弱 細りやや有 炭化物微量含む
	S303 中 b-b' c-c' d-d'	1
2		10YR5/6黄褐色土 炭粒微量含む 粘性やや弱・細りやや有
3		10YR4/6褐色土 粘性やや弱・細りやや有
4		2.5YR5/8明赤褐色焼土 粘性なし・細っている
5		10YR2/1黒色土 炭粒少量含む 粘性・細りやや有
6		2.5YR5/8明赤褐色焼土 粘性なし・細っている
7		10YR5/6黄褐色土 粘性・細りやや有
S304-10 A-A'	1	10YR3/2黒褐色土 に5.0黄褐色土を2層3層に交互に少量含む 粘性・細りやや有
	2	10YR2/1黒色土 粘性・細りやや有
	3	10YR6/8明黄褐色土 粘性弱・細っている
	4	10YR5/3に5.0黄褐色土 炭粒微量含む 明黄褐色土少量含む 粘性弱・細りやや有
	5	2.5YR4に5.0黄色土 粘性弱・細りやや有
	6	2.5YR3淡黄色風化花園岩 粘性弱・細っている
	7	10YR6/6明黄褐色土 粘性弱・細っている
	8	10YR6/6明黄褐色土 風化花園岩ブロック少量含む 粘性弱・細っている
	9	5YR4淡黄色土 粘性弱・細っている
	10	10YR4/6褐色土 粘性やや有・細っている

遺構名	層位	注記
S304 中 e-e' f-f' g-g'	1c	2.5Y7/6明黄褐色土 風化花園岩少量含む 粘性弱・細っている
	2	10YR2/1黒色土 炭粒を多量を含む 粘性弱・細りやや有
	3	2.5YR4/8赤褐色焼土 粘性なし・細りやや有
	4	10YR6/6明黄褐色土 粘性弱・細りやや有
	5	10YR4/6褐色土 粘性やや有・細っている
S303 S305 A-A'	1a	10YR6/6明黄褐色土 風化花園岩少量含む 粘性弱・細っている
	1b	10YR2/1黒色土 炭粒を微量含む 粘性弱・細りやや有
S303 S305 B-B' C-C'	1	10YR3/3暗褐色土 表土 草木根多 粘性弱・細り弱
	2	10YR2/2黒褐色土 炭粒を微量含む 粘性弱・細りやや有 遺構埋土(S305)
	3	10YR4/4褐色土 暗褐色土ブロック少量含む 粘性弱・細りやや有(S305)
	4	10YR4/6褐色土 炭粒を微量含む 粘性弱・細りやや有(S304)
	5	10YR4/4褐色土 炭粒を微量含む 粘性弱・細りやや有(S303 地山混層の土が主だが自然堆積している)
S303 S305 B-B' C-C'	1	10YR3/3暗褐色土 表土 草木根多 粘性弱・細りやや有
	2	10YR2/2黒褐色土 炭粒微量含む 粘性弱・細りやや有(S305)
	3	10YR4/4褐色土 暗褐色土ブロック少量含む 粘性弱・細りやや有(S305)
	6	7.5YR5/8明褐色土 風化花園岩 粘性なし・細りやや有
	7	10YR2/3黒褐色土 地山ブロック少量含む 粘性やや有・細りやや有
	8	10YR4/4褐色土 炭粒微量含む 粘性弱・細りやや有
	10	2.5YR5/8明赤褐色焼土 粘性なし・細っている 遺物なし
S306 A-A'	1	10YR5/6黄褐色土 黄褐色土ブロック少量 炭粒少量含む 粘性やや有・細っている
	2	10YR5/4に5.0黄褐色土 炭粒微量含む 粘性弱・細りやや有
	3	10YR5/8黄褐色土 淡黄褐色土ブロック多量 炭粒微量含む 粘性やや弱・細りやや有
	4	10YR5/6黄褐色土 土山ブロック少量含む 粘性やや弱・細りやや有
	5	10YR5/8黄褐色土 粘性やや弱・細りやや有
S306 中	1	10YR4/4褐色土 炭粒を大量を含む 粘性弱・細っている
	2	2.5YR4/8赤褐色焼土 粘性なし・細っている
	3	7.5YR4/6褐色土 粘性・細りやや有
S307-S308 A-A', B-B'	1	10YR4/4褐色土 粘性・細りやや有
	2	10YR4/1褐色土 炭粒微量含む 粘性弱・細りやや有
	3	10YR5/4に5.0黄褐色土 炭粒微量含む 粘性弱・細りやや有
S307 中 a-a', b-b'	1	10YR3/3暗褐色土 黄褐色土ブロック少量含む 粘性・細りやや有
	2	2.5YR5/6明赤褐色焼土 粘性なし・細っている
	3	10YR5/8黄褐色土 粘性やや有・細っている
	4	10YR5/8黄褐色土 暗褐色土少量含む 粘性・細りやや有
S309 D-D', F-F'	1	10YR3/4暗褐色土 土器片は取本が多い 粘性弱・細りやや有 表土
	2	10YR5/6黄褐色土 部分的に地色に少量含む 粘性弱・細りやや有
S309 中 e-e', f-f', g-g'	1	10YR3/3に5.0黄褐色土 明黄褐色土を多量含む 粘性弱・細っている
	2	10YR6/6明黄褐色土 焼土ブロック少量含む 粘性弱・細っている
	3	2.5YR4に5.0黄色土 褐色土ブロック少量含む 粘性弱・細っている
	4	10YR4/4に5.0黄褐色土 風化花園岩少量含む 粘性弱・細っている
	5	10YR2/2黒褐色土 炭粒少量含む 粘性弱・細り弱
	6	10YR4/4褐色土 粘性弱・細っている
S310 h-h'	1	10YR2/2黒褐色土 東側では明黄褐色土少量含む 粘性弱・細りやや有

4 出土遺物

遺構名	層位	注記
S10 b-b', c-c', d-d'	2	2.5Y6/4に赤・黄褐色土 粘質・細りやや有
	3	10YR2/3黒褐色土 西側へ行くほど赤・黄褐色土が多くなる 粘質やや弱・締っている
	4	2.5Y7/4黄褐色土 粘質・細りやや有
	5	10YR6/4に赤・黄褐色土 粘質やや有・締っている
	6	2.5Y7/4黄褐色土 に赤・黄褐色土を少量含む 粘質・細りやや有
	1a	10YR5/4に赤・黄褐色土 炭粒を微量含む 粘質弱・締っている
	4a	10YR4/6褐色土 粘質やや弱・細りやや有
	2a	10YR4/2灰黄褐色土 粘質弱・細りやや有
	5	10YR4/6褐色土 粘質やや有
	3	2.5YR5/8明赤褐色土 粘質なし・締っている
	1b	10YR4/6褐色土 真砂土ブロック少量含む 粘質弱・締っている
	1c	10YR3/3暗褐色土 粘質やや有・弱り弱
	1d	10YR2/4黒色土 炭粒大顆粒を含む 粘質なし・細りやや有
	2b	10YR2/1黒色土 炭多量を含む 粘質なし・細りやや有
S10 焼土 a-a'	1	10Y5/8赤褐色土 粘質なし・締っている
SK15 k-k'	1	10YR2/2黒褐色土 地山ブロックを不規則に少量含む 粘質・細りやや(人為)
	2	10YR2/3黒褐色土 粘質やや弱・締っている 時期:近世
SK16 b-b'	1	7.5YR4/3褐色土 炭粒少量含む 粘質・細りやや有
SK17 A-A'	1	10YR2/3黒褐色土 褐色土を斜面上方を含む 粘質・細り弱
	2	10YR4/4褐色土 粘質弱・細りやや有
SK18 f-f'	1	10YR4/6褐色土 粘質・細りやや有
	2	10YR5/4に赤・黄褐色土 粘質・細りやや有
	3	10YR8/3浅黄褐色黒化花崗岩 粘質なし・締っている
	4	10YR4/4褐色土 粘質・細りやや有
	5	10YR8/2灰白色黒化花崗岩 粘質なし・締っている
	6	10YR4/6褐色土 粘質・細りやや有
	7	10YR5/3に赤・黄褐色土 ツナ土少量含む 粘質弱・細りやや有
8	10YR4/4褐色土 炭粒微量含む 粘質やや弱・細りやや有	
SK19 B-B'	1	10YR2/3黒褐色土 粘質やや弱・細りやや有
	2	10YR4/1褐色土 粘質やや弱・細りやや有
	3	10YR5/6黄褐色土 粘質弱・締っている
SK20 C-C'	1	10YR2/2黒褐色土 粘質なし・締っている
	2	10YR4/1褐色土 粘質なし・締っている
3	10YR7/8黄褐色土 粘質なし・締っている	
SK22 上J'	1	10YR4/6褐色土 粘質やや弱・細りやや有
	2	10YR4/4褐色土 黒褐色土少量含む 粘質やや弱・細りやや有
	3	10YR5/8黄褐色土 粘質・細りやや有
	4	10YR3/3に赤・黄褐色土 真砂土少量含む 粘質やや弱・細りやや有
	5	10YR5/6黄褐色土 粘質・細りやや有
SK23 C-C'	1	10YR3/3暗褐色土 粘質・細りやや弱
	2	10YR5/8黄褐色土 暗褐色土少量含む 粘質・細りやや弱
SK24 D-D'	1	10YR4/2灰黄褐色土 粘質・細りやや有
	2	2.5Y7/3黄褐色土 真砂土少量含む 粘質・細りやや有
	3	10YR5/4に赤・黄褐色土 粘質弱・細りやや有
	4	10YR5/4に赤・黄褐色土 真砂土多量を含む 粘質弱・細りやや有
	5	10YR8/3浅黄褐色真砂土 粘質なし・締っている
	6	10YR5/3に赤・黄褐色土 真砂土大顆粒を含む 粘質なし・締っている
	7	10YR4/6褐色土 粘質やや弱・細りやや有
	8	7.5YR6/8褐色土 真砂土多量を含む 粘質弱・締っている 地山山か
SK26 E-E'	1	10YR8/4浅黄褐色真砂土 に赤・黄褐色土多量を含む 粘質なし・細りやや有

遺構名	層位	注記
SK28 D-D'	2	10YR5/4に赤・黄褐色土 炭粒微量含む 粘質弱・細りやや有
	3	10YR6/3に赤・黄褐色土上真砂土の互層 粘質弱・細りやや有
	4	10YR6/3に赤・黄褐色土 真砂土が埋石のように多く散らる 粘質弱・細り弱
	5	10YR8/2灰白色真砂土 スキ間に赤・黄褐色土少量含む 粘質弱・締っている
	6	10YR5/6黄褐色土 炭粒微量含む 粘質・細りやや有
	7	10YR5/4に赤・黄褐色土 粘質・細りやや有
	8	10YR5/4に赤・黄褐色土 粘質・細りやや有
	9	10YR5/6黄褐色土 真砂土多量を含む 粘質弱・締っている
	10	10YR5/6黄褐色土 粘質・細りやや有
	1	10YR4/2灰黄褐色土 炭粒ごく微量含む 粘質・細りやや弱
2	10YR5/4に赤・黄褐色土 粘質やや弱・細りやや有	
3	10YR2/2黒褐色土 炭粒微量含む 粘質・細りやや有	
4	10YR4/4褐色土 粘質やや有・細りやや弱	
5	10YR5/8黄褐色土 炭粒微量含む 粘質やや弱・細りやや有	
6	10YR5/6黄褐色土 真砂土少量含む 粘質やや弱・細りやや有	
7	10YR5/4に赤・黄褐色土 粘質やや弱・細りやや有	
8	10YR4/6褐色土 黄褐色土を少量含む 粘質やや弱・細りやや有	
SK29 F-F'	1	10YR2/2黒褐色土 褐色土ブロック微量含む 粘質・細りやや有
	2	10YR3/3暗褐色土 粘質弱・細りやや有
	3	10YR2/2黒褐色土 粘質弱・細りやや有
	4	10YR4/4暗褐色土 粘質弱・細りやや有
	5	10YR2/2黒褐色土 粘質・細りやや有
	6	10YR4/6褐色土 粘質・細りやや有
	7	10YR5/4に赤・黄褐色土 真砂土ブロック微量含む 粘質弱・細りやや有
	8	10YR4/3に赤・黄褐色土 粘質・細りやや有
	9	10YR5/4に赤・黄褐色土 真砂土ブロック多量を含む 粘質弱・細りやや有
	10	10YR4/6褐色土 に赤・黄褐色土を多く含む 粘質・細りやや有
	11	10YR2/2黒褐色土 黄褐色土ブロック少量含む 粘質・細りやや有
	12	10YR5/8黄褐色土 粘質・細りやや有
	13	10YR2/2黒褐色土 黄褐色土ブロックを微量含む 粘質・細りやや有
	14	10YR4/6褐色土 炭粒微量含む 粘質・細りやや有
SK31 A-A'	1	10YR4/4褐色土 地山ブロック微量含む 粘質・細りやや有
SX05 B-B' C-C'	1	10YR5/4に赤・黄褐色土 粘質弱・細りやや有
	2	10YR4/4褐色土 炭粒を多量を含む 粘質・細り弱
	4	10YR4/4暗褐色土 炭粒を多量を含む 粘質・細りやや弱
	5	2.5YR4/8赤褐色土 粘質弱・締っている
T-W A-A'	1	10YR2/2黒褐色土 粘質・細りやや有
	2	10YR6/6明黄褐色砂礫 大きな礫も含む 粘質なし・締っている
	3	10YR3/3暗褐色土 中細礫を少量含む 粘質・細りやや有
	4	10YR2/2黒褐色砂質土 大へ中礫を不規則に含む 粘質・細りやや有
	5	7.5YR6/6明褐色砂 大へ中礫を不規則に含む 粘質なし・締っている
南側の 溝跡 A-A'	I	10YR4/2灰黄褐色土 表土 粘質・細りやや有
	II	10YR2/1黒色土 礫を部分的に含む 粘質・細りやや有
	III	10YR3/3暗褐色土 土礫量を含む 粘質・細りやや有
	IV	10YR7/8黄褐色土 地山 粘質やや有・締っている
	V	10YR8/4浅黄褐色花崗岩 基岩層 粘質なし・締っている

遺構名	層位	注記
中央の 円形 A-A'	1	10YR6/8 明黄褐色土: 褐色土少量含む 粘性弱・粘りやや有
	2	10YR2/2 黒褐色土: 粘性弱・粘りやや有
	3	10YR3/4 暗褐色土: 黒褐色土・黄褐色土を多量に含む 粘性弱・粘りやや有
	4	10YR4/6 褐色土: 東部には黄褐色土となる 粘性弱・粘りやや有
	5	10YR6/6 明黄褐色土: 西部には黄褐色土に浅黄褐色土を含む
中央の 円形 B-B'	1a	10YR4/2 灰黄褐色土: 粘性弱・粘りやや弱
	1b	10YR4/3 に近い黄褐色土: 粘性弱・粘りやや弱
	1c	10YR5/3 に近い黄褐色土: 粘性弱・粘りやや弱
	2	10YR6/4 に近い黄褐色土: 粘性弱・粘りやや有
	3	10YR5/4 に近い黄褐色土: 粘性弱・粘りやや有
	4	10YR7/4 に近い黄褐色土: 粘性弱・粘りやや有
捨て場 B-B'	1	10YR7/6 明黄褐色土: 若干砂・石灰、粘性弱・粘りやや有
	2	10YR3/2 黒褐色土: 遺物片含む 粘性・粘りやや有
T-L A-A'	1	10YR4/6 褐色土: 粘りやや有
	2	10YR3/2 黒褐色土: 10YR2/2 黒褐色土の混合土: 中小礫多く含む: 粘性弱・締っている(縄文晩期土層上)

遺構名	層位	注記
T-M A-A'	3	10YR3/2 黒褐色土: 10YR2/2 黒褐色土の混合土: 中小礫多く含む: 粘性弱・締っている(縄文晩期土層上)
	4	10YR2/2 黒褐色土: 大小礫を多量に含む: 粘性やや有・締っている(縄文晩期土層上)
	5	10YR3/3 暗褐色砂質土: 粘性弱・締っている 中小礫を多量に含む
	1	10YR2/2 黒褐色土: 木炭多量(表土(傾地) 粘性・粘りやや有
T-N A-A'	2	10YR5/8 黄褐色土: 中小礫多量を含む 粘性弱・締っている
	3	10YR3/2 黒褐色土: 中小礫少量含む: 粘性弱・締っている
	4	10YR5/6 黄褐色砂質土: 中小礫多量を含む 粘性弱・締っている
	1	10YR2/2 黒褐色土: 木炭多量(表土) 粘性・粘りやや有
T-R A-A'	2	10YR3/2 黒褐色土: 礫多量を含む: 粘性・粘りやや有
	3	10YR5/8 黄褐色砂質土: 礫多量を含む: 粘性なし・粘りやや有
	4	10YR4/6 褐色砂質土: 粘性なし・粘りやや有
T-R A-A'	1	10YR4/3 に近い黄褐色土(表土): 草根多量 粘性・粘りやや有
	2	10YR3/2 黒褐色土: 粘性・粘りやや有 遺物少量有
3	10YR4/4 褐色土: 粘性やや有・締っている	

第4表 土坑類観察表 (H27)

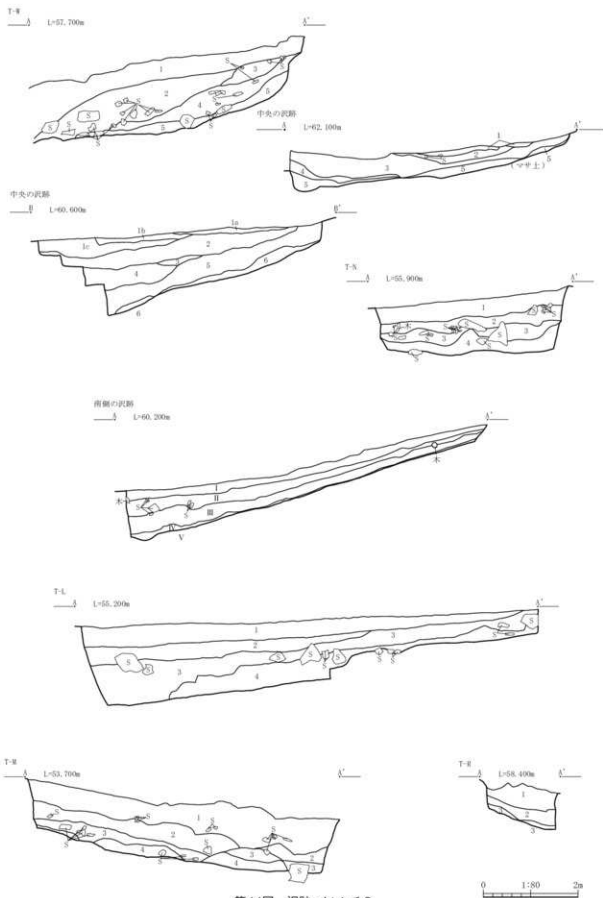
何れも検出面はIV層上面

計測値の単位: cm

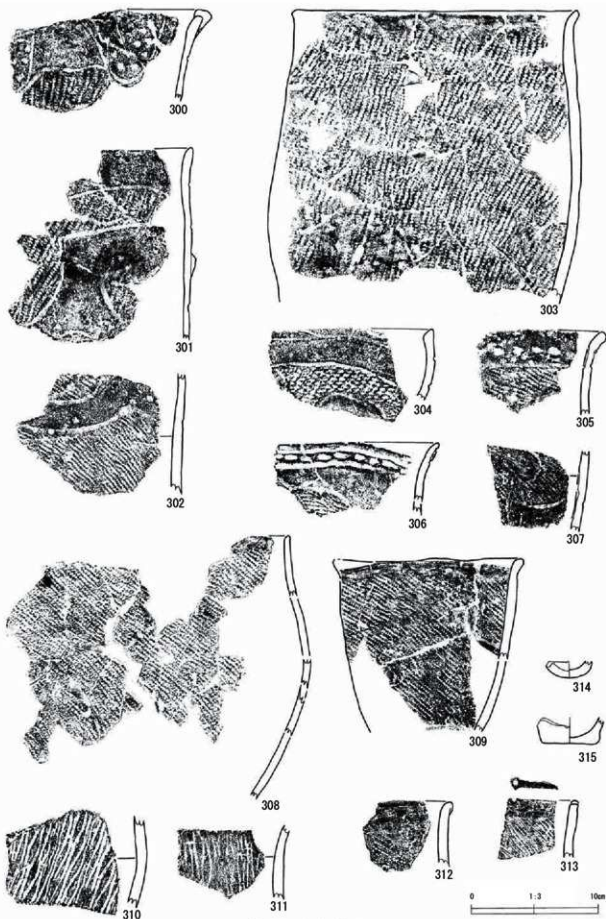
遺構名	位置	規模 長軸 短軸 深さ	形状	埋土	出土遺物	時期	その他
SK14	土坑	山裾	170/105/56	不整円形	自然堆積		縄文時代 貯蔵穴
SK15	土坑	丘陵下	140/120/48	円形	人為堆積	銭貨	近世 墓
SK16	土坑	山裾	140/120/5	円形	自然堆積		縄文時代
SK17	土坑	山裾	164/105/52	長円形	自然堆積		縄文時代
SK18	土坑	山中腹	150/130/182	円形	自然堆積		縄文時代 貯蔵穴
SK19	土坑	山裾	113/87/62	長円形	自然堆積		縄文時代
SK20	土坑	山裾	123/111/80	不整円形	自然堆積		縄文時代
SK22	土坑	山中腹	150/100/73	円形	自然堆積		縄文時代 貯蔵穴
SK23	土坑	山裾	77/76/95	円形	自然堆積		縄文時代 貯蔵穴
SK24	土坑	山裾	262/227/172	円形	自然堆積		縄文時代 貯蔵穴
SK26	土坑	山裾	200/178/190	円形	自然堆積		縄文時代 貯蔵穴
SK28	土坑	山中腹	221/208/180	円形	自然堆積	石芥	縄文時代 貯蔵穴
SK29	土坑	山裾	217/189/173	不整円形	自然堆積	縄文土器	縄文時代 貯蔵穴



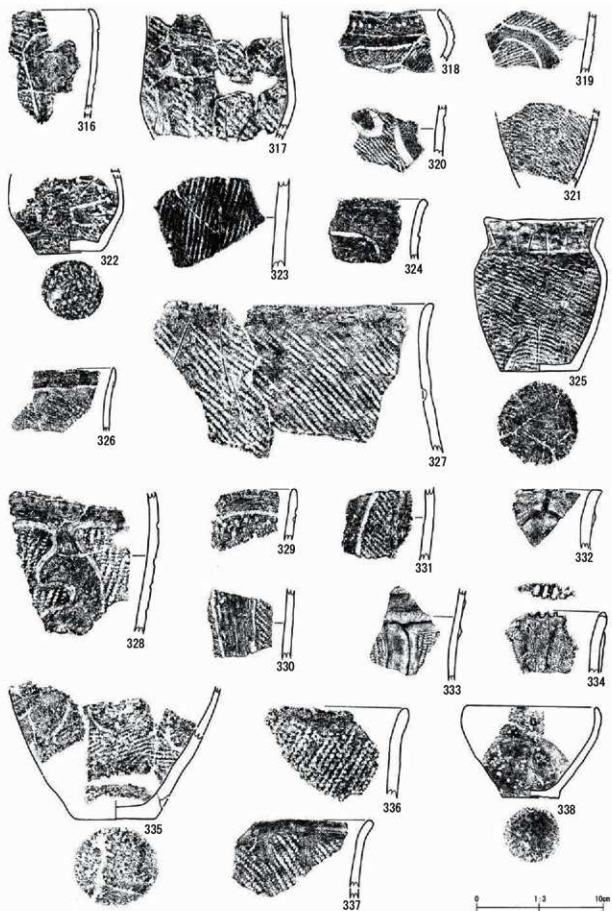
第43図 捨て場2、沢跡・トレンチ1



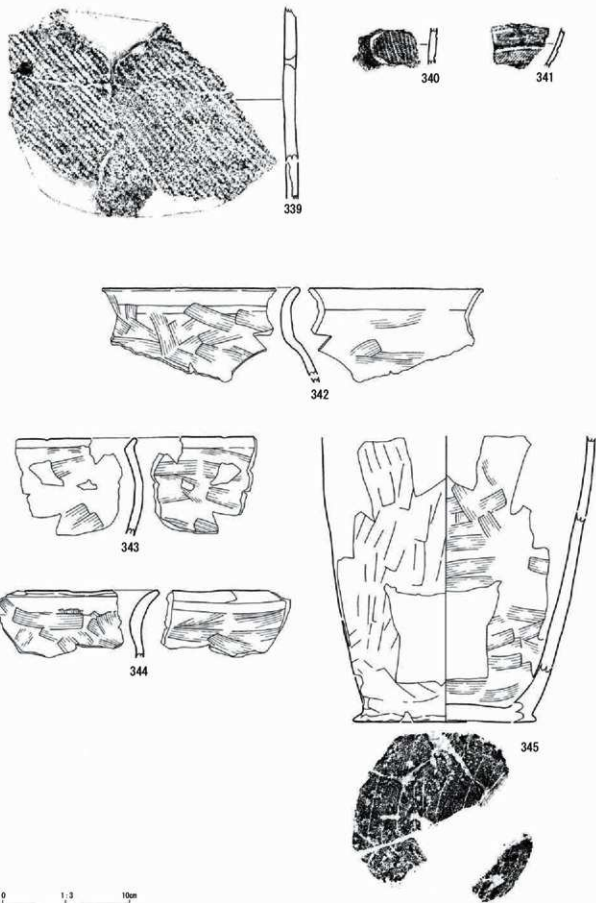
第44図 沢跡・トレンチ2



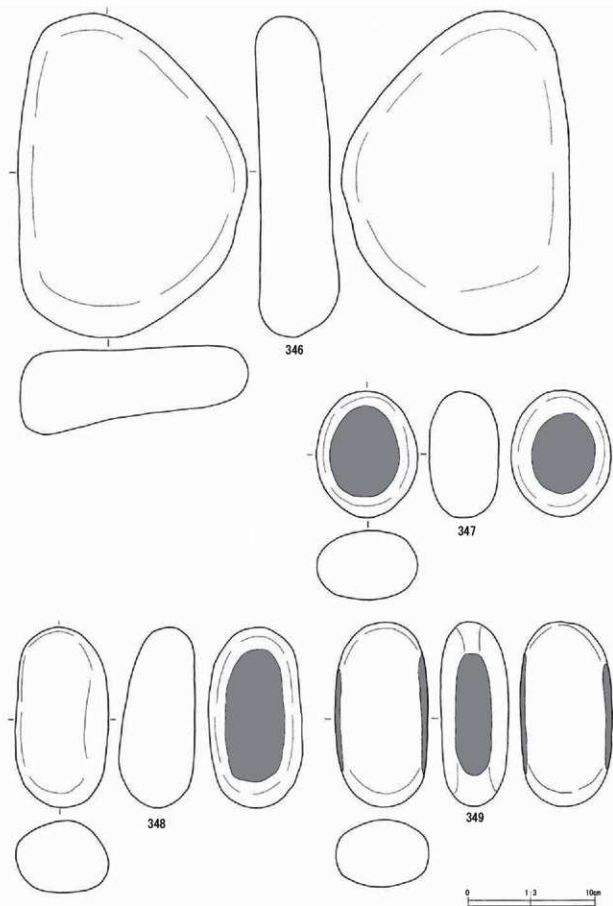
第45図 出土遺物13



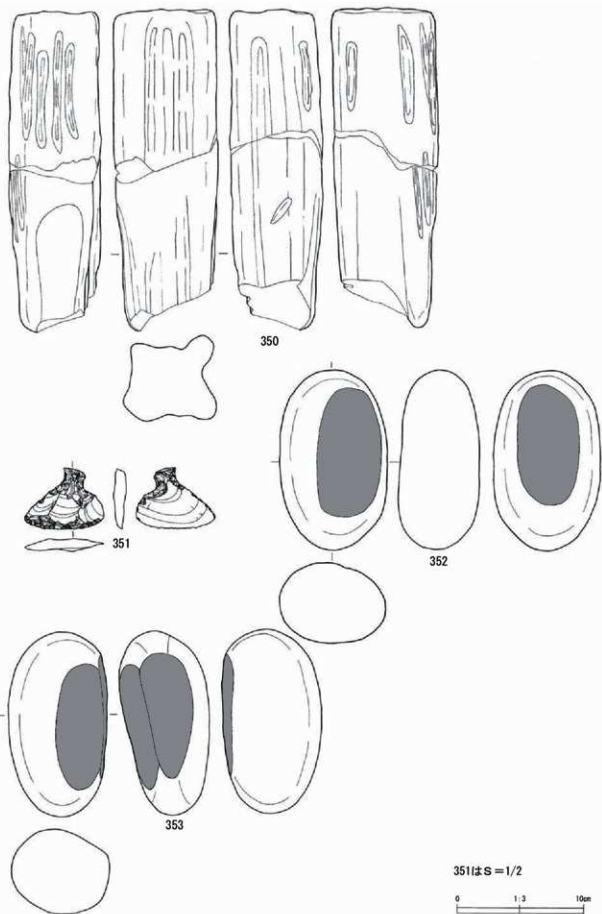
第46図 出土遺物14



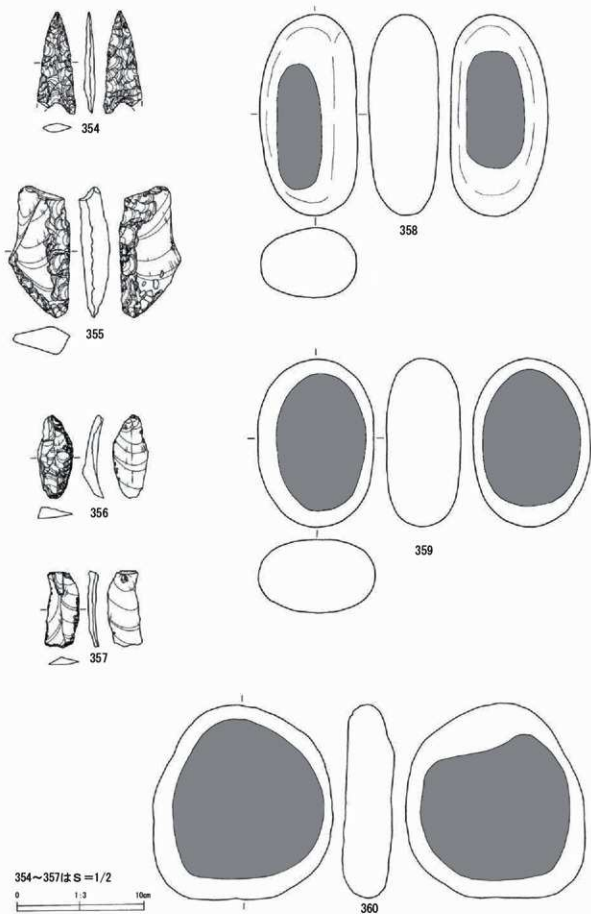
第47図 出土遺物15



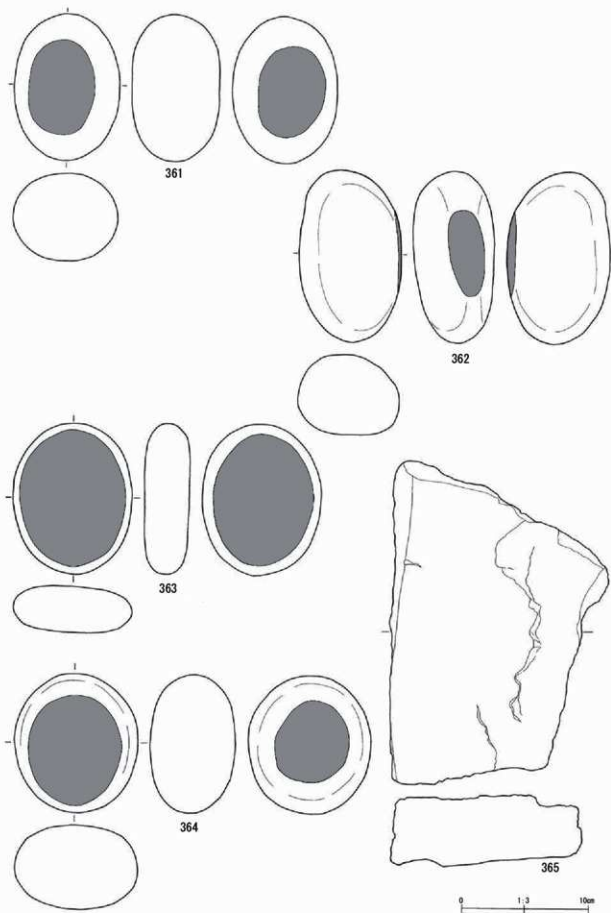
第48図 出土遺物16



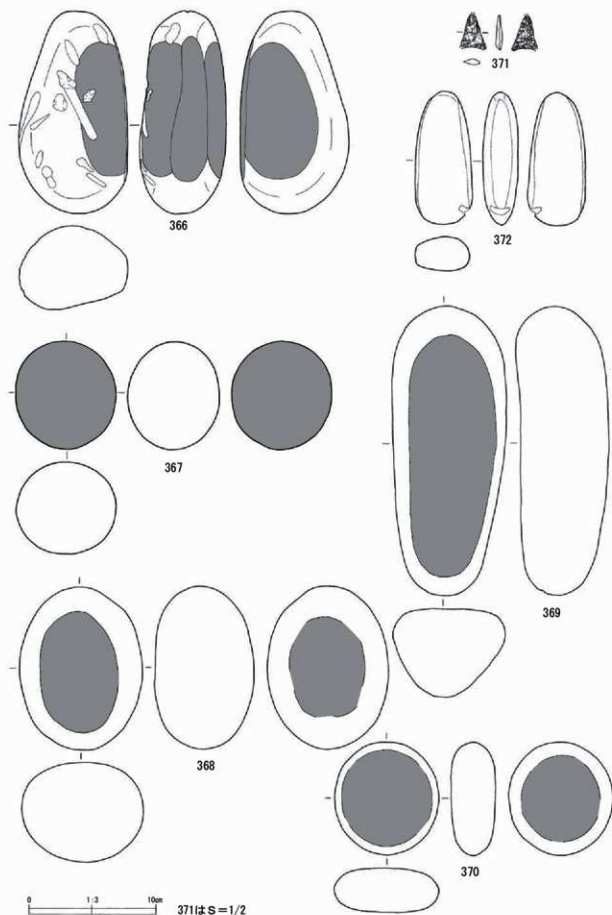
第49図 出土遺物17



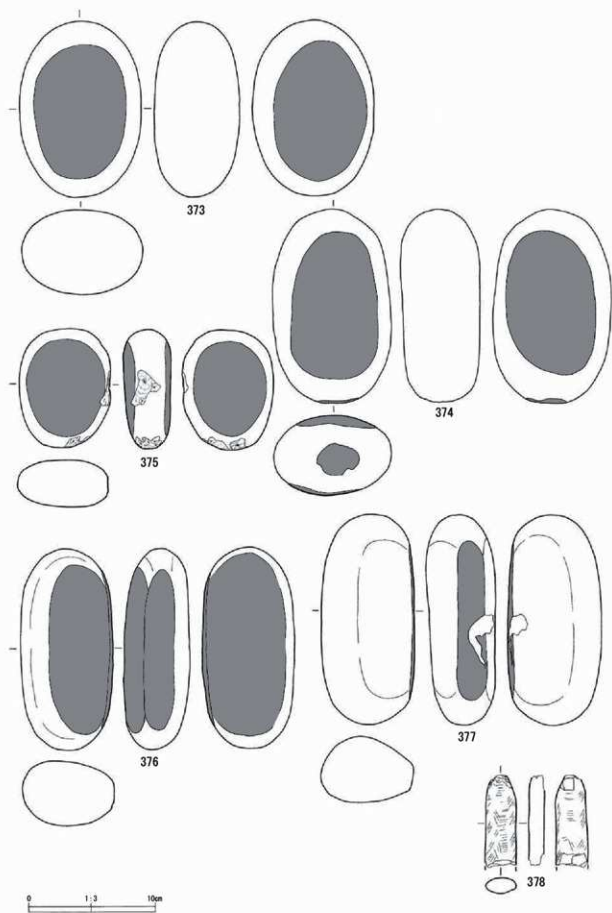
第50図 出土遺物18



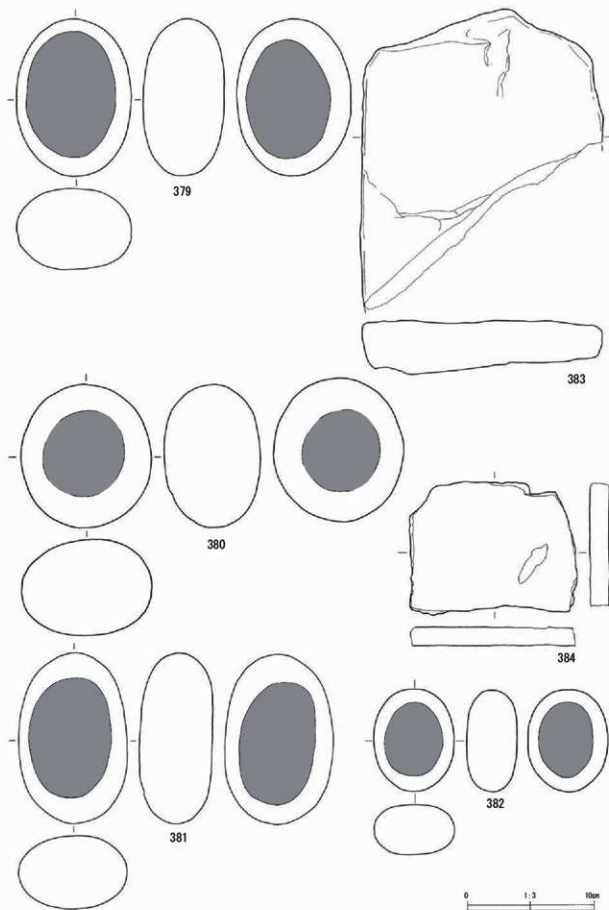
第51図 出土遺物19



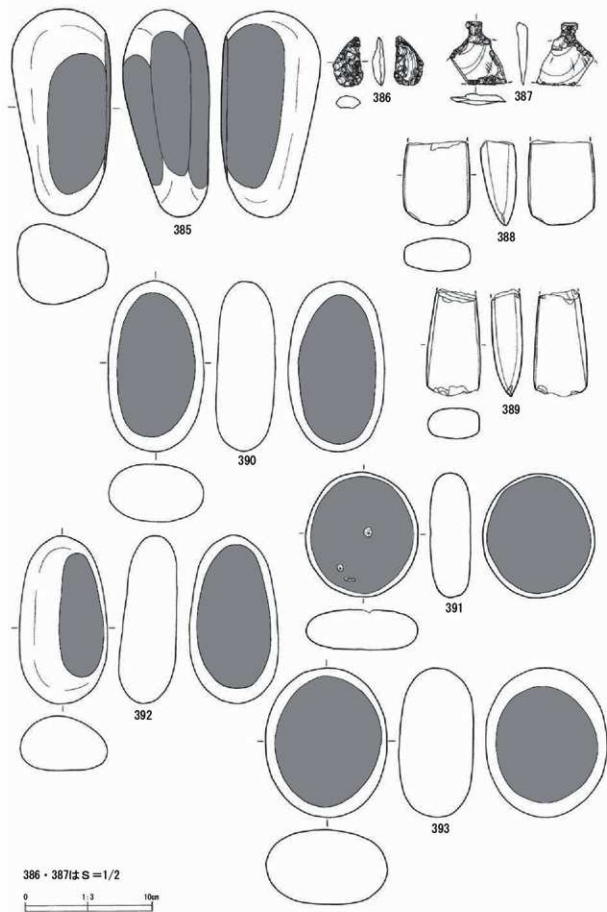
第52図 出土遺物20



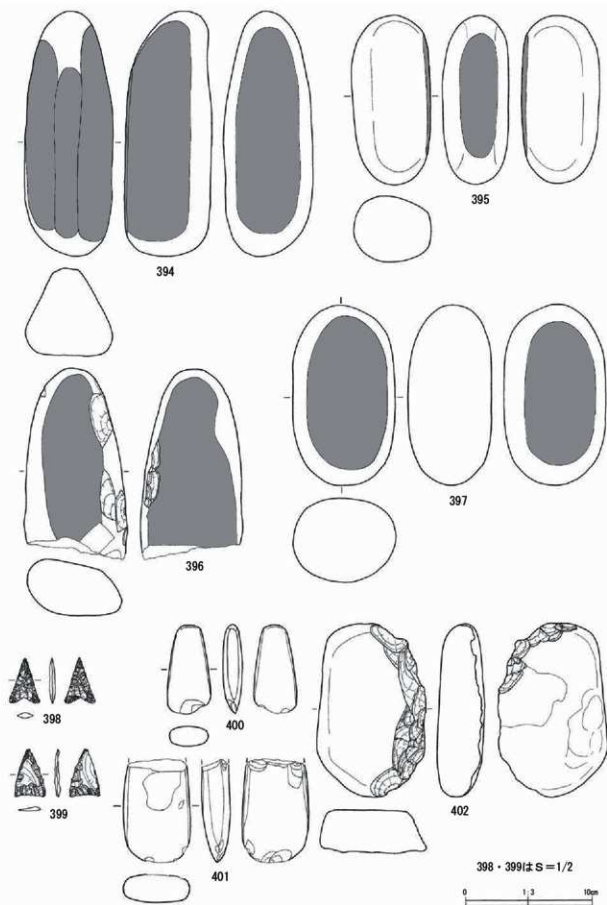
第53図 出土遺物21



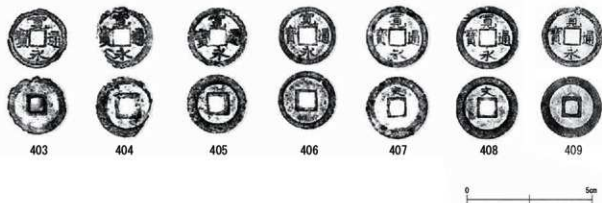
第54図 出土遺物22



第55図 出土遺物23



第56図 出土遺物24



第57図 出土遺物25

第5表 柱穴一覧表(H27)

遺構名	長径	短径	深さ
SI04-SI10 P1	0.503	0.432	0.48
SI04-SI10 P2	0.575	0.484	0.806
SI04-SI10 P3	0.235	0.21	0.182
SI04-SI10 P4	0.251	0.172	0.162
SI04-SI10 P5	0.597	0.525	0.404
SI04-SI10 P6	0.679	0.572	0.478
SI04-SI10 P7	0.2	0.19	0.352
SI04-SI10 P8	0.249	0.245	0.216
SI04-SI10 P9	0.509	0.497	0.62
SI04-SI10 P10	0.55	0.488	0.484
SI04-SI10 P11	0.434	0.379	0.762
SI04-SI10 P12	0.491	0.446	0.928
SI04-SI10 P13	0.494	0.459	0.461

遺構名	長径	短径	深さ
SI04-SI10 P14	0.501	0.427	0.553
SI04-SI10 P15	0.363	0.332	0.757
SI04-SI10 P16	0.313	0.26	0.352
SI04-SI10 P17	0.328	0.294	0.156
SI04-SI10 P18	0.29	0.267	0.496
SI04-SI10 P19	0.218	0.176	0.363
SI04-SI10 P20	0.453	0.378	0.633
SI04-SI10 P21	0.269	0.259	0.366
SI04-SI10 P22	0.664	0.587	0.787
SI07-SI08 P1	0.45	0.424	0.242
SI07-SI08 P2	0.481	0.411	0.361
SI07-SI08 P3	0.495	0.474	0.293
SI07-SI08 P4	0.353	0.284	0.236

遺構名	長径	短径	深さ
SI06 P1	0.257	0.187	0.344
SI06 P2	0.27	0.25	0.239
SI06 P3	0.149	0.139	0.379
SI06 P4	0.203	0.194	0.437
SI02 P1	0.362	0.309	0.573
SI02 P2	0.396	0.367	0.658
SI02 P3	0.199	0.158	0.139
SI02 P4	0.282	0.269	0.414
SI09 P1	0.447	0.381	0.242
SI09 P2	0.451	0.448	0.361
SI09 P3	0.493	0.423	0.429

単位：m

第6表 縄文・弥生土器観察表(H27)

掲載番号	出土地点・層位	器種	残存部位	文様・裝飾・原体・付着物など	胎土	その他
300	SI02 4層	深鉢	口一体	口唇部に小突起、口頸部に沈線を設け口縁部は無文帯の中に刺突文、体部RL	荒砂多	
301	SI02 4層	深鉢	口一体	口縁部は無文、体部は沈線と隆帯による磨消縄文RL	砂	風化
302	SI02埋土	深鉢	体部	磨消縄文、RL	細砂	風化
303	SI02 4層	深鉢	口一体	RL、外面にコゲ付着	細砂	
304	SI04埋土	深鉢	口縁部	体部は磨消縄文LR	細さ	風化
305	SI04埋土	深鉢	口一体	頸部：沈線、口縁部に刺突列、体部4LR	荒砂	
306	SI04埋土	深鉢	口一体	波状口縁に沈線で上下を挟まれた隆帯を設け刺突文を施す		
307	SI04埋土	深鉢	体部	磨消縄文、外面にコゲ	荒砂	風化
308	SI04埋土	深鉢	口一体	LR	小石少	
309	SI04埋土	鉢	口一体	LR、外面口縁付近にコゲ付		
310	SI04埋土	深鉢	体部	無節の熱糸文か	細砂	
311	SI04-10埋土	深鉢	口一体	無節の熱糸文か	細砂	
312	SI04埋土	深鉢	口一体	口縁部短く外反、LR	細砂	
313	SI04埋土	深鉢	口一体	熱糸文R		
314	SI04埋土	ミニチュア	底部	無文		
315	SI04埋土	小形土器	底部	無文		
316	SI06埋土	深鉢	口一体	磨消縄文LR		
317	SI06埋土	深鉢	体部	無節か	細砂	
318	SI06埋土	鉢	体部	刺突文、磨消縄文		
319	SI06埋土	深鉢	体部	磨消縄文	細砂	
320	SI06埋土	鉢	体部	磨消縄文LR	小石微量	風化
321	SI06埋土	鉢	体部	LR		

掲載番号	出土地点・層位	器種	残存部位	文様・装飾・原体・付着物など	胎土	その他
322	SI109の上	壺	体・底	円形基調の沈線、磨消縄文	小石少量	
323	SI10埋土	深鉢	体部	撫糸文	砂	
324	SI10埋土	深鉢	口・体	頸部に沈線、口縁部は無文、内面にコゲ		
325	SK23埋土中位	小甕	口・底	L.R, 内外面にコゲ多量付		
326	SK29埋土	深鉢	口・体	折返したような口縁、体部LRか	風化	
327	SK29埋土	深鉢	口・体	L.R, 外面にコゲ付		内風化
328	捨て場2層	深鉢	体部	磨消縄文RL, 外面にコゲ	細砂	
329	捨て場2層	深鉢	口・体	口縁部無文、頸部に沈線と刺突文		
330	SK29埋土	深鉢	体部	磨消縄文LR	砂少	
331	捨て場2層	深鉢	体部	磨消縄文LR		
332	捨て場2層	深鉢	口唇部	隆線による円形基調の文様		
333	捨て場2層	深鉢	口・体	隆線による磨消縄文RL		
334	捨て場1層	深鉢	口・体	口唇部のみ、縦方向に隆線		
335	捨て場2層	深鉢	体・底	沈線区画の磨消縄文、LR		
336	捨て場1層	深鉢	口・体	R.L 口縁部は無文	細砂	
337	捨て場2層	深鉢	口・体	口縁部無文、体部RL	砂	
338	捨て場2層	小鉢	口・底	無文		
339	捨て場2層	深鉢	口・体	LRか	砂多	風化
340	捨て場2層	鉢	体部	磨消縄文RL		
341	HンチL	鉢	体部	磨消縄文LR		

第7表 土師器観察表 (H27)

掲載番号	種類	器種	出土地点・層位	法量 (cm)			外面調整	内面調整	その他
				口径	底径	器高			
342	土師器	壺	SI05埋土				不明瞭なナデ	横方向ナデ	
343	土師器	壺	SI05埋土				不明瞭なナデ	横方向ナデ	
344	土師器	壺	SI05埋土				不明瞭なナデ	横方向ナデ	
345	土師器	壺	SI05埋土		14.4	22.5	縦方向ナデ	横方向ナデ	

第8表 石器類観察表 (H27)

掲載番号	出土地点・層位	器種	分類	計測値 (cm, g)				石	材	その他	
				長さ	幅	厚さ	重量				
346	SI02埋土壁部	石皿	IIA2	25.5	18.0	6.6	4845.5	閃緑岩	中生代白亜紀	北上山地	
347	SI02埋土	磨石	IIB1	10.0	7.9	5.4	618.8	花崗岩	中生代白亜紀	北上山地	
348	SI02埋土	磨石	IIB1	14.2	7.4	5.9	925.9	花崗岩	中生代白亜紀	北上山地	
349	SI02埋土	磨石	IIB2	14.6	7.3	5.3	973.3	閃緑岩	中生代白亜紀	北上山地	
350	SI03・04埋土	砥石	II E	25.1	8.2	7.3	3239.7	砂岩	中生代	北上山地	ほぼ全面使用
351	SI03埋土	石匙	IB2	3.15	4.15	0.70	6.69	頁岩	中生代	北上山地	
352	SI03埋土	磨石	II B1	14.2	8.5	6.3	1155.2	花崗岩	中生代白亜紀	北上山地	
353	SI03埋土	磨石	II B2	14.5	7.7	6.7	1168.3	閃緑岩	中生代白亜紀	北上山地	
354	SI04埋土	石鏝	IA2	5.35	1.95	0.55	3.90	頁岩	中生代	北上山地	
355	SI04埋土	削器	IC2	6.90	3.20	1.60	30.46	頁岩	中生代	北上山地	
356	SI04・10埋土	削器	IC2	4.30	1.85	1.10	5.16	頁岩	中生代	北上山地	
357	SI04埋土	削器	IC2	4.00	1.80	0.55	2.96	頁岩	中生代	北上山地	
358	SI04埋土	磨石	II B1	14.9	7.8	5.5	1146.7	閃緑岩	中生代白亜紀	北上山地	
359	SI04埋土	磨石	II B1	13.2	9.2	5.8	1084.2	花崗岩	中生代白亜紀	奥羽山脈基盤	
360	SI05埋土	磨石	II A2	15.3	14.2	4.0	1437.2	花崗閃緑岩	中生代白亜紀	北上山地	
361	SI04・10埋土	磨石	II B1	11.6	8.3	6.9	973.5	花崗岩	中生代白亜紀	北上山地	
362	SI04・10埋土	磨石	II B2	13.6	8.1	6.4	1038.1	花崗閃緑岩	中生代白亜紀	北上山地	
363	SI04・10埋土	磨石	II B1	11.9	9.3	3.6	689.1	閃緑岩	中生代白亜紀	北上山地	
364	SI04埋土	磨石	II B1	10.9	9.7	6.6	1009.9	花崗岩	中生代白亜紀	奥羽山脈基盤	
365	SI04埋土	台石	IV C	25.5	17.3	5.6	3633.5	花崗閃緑岩	中生代白亜紀	北上山地	欠損
366	SI04埋土	磨石	II B2	16.0	8.6	6.6	1413.3	閃緑岩	中生代白亜紀	北上山地	
367	SI06埋土	磨石	II B1	8.5	7.9	7.2	679.9	花崗岩	中生代白亜紀	北上山地	
368	SI06埋土	磨石	II B1	12.9	9.6	7.8	136.8	花崗岩	中生代白亜紀	北上山地	

4 出土遺物

掲載番号	出土地点・層位	器種	分類	計測値 (cm, g)				石 材	その他
				長さ	幅	厚さ	重量		
369	SI06埋土	磨石	IB1	22.8	9.0	7.0	2307.1	はんらい岩 中生代白帯紀 北上山地	
370	SI06埋土	磨石	IB1	8.9	8.2	3.5	412.8	細粒花崗閃緑岩 中生代白帯紀 北上山地	
371	SI06埋土	石鏃	IA2	1.85	1.30	0.35	0.64	頁岩 中生代 北上山地	
372	SI06埋土	石斧	IIA	10.5	4.5	2.7	208.5	細粒はんらい岩 中生代白帯紀 北上山地	
373	SI06埋土	磨石	IB1	13.9	9.5	6.7	1294.5	アブラ石 中生代白帯紀 北上山地	
374	SI06埋土	磨石・磨石	IB2	15.3	9.4	6.3	1394.1	花崗岩 中生代白帯紀 北上山地	
375	SI06埋土	磨石・磨石	IB2	9.4	7.2	3.6	422.6	閃緑岩 中生代白帯紀 北上山地	
376	SI06埋土	磨石	IB2	15.9	7.4	5.1	1025.6	はんらい岩 中生代白帯紀 北上山地	
377	SI07層	磨石	IB2	16.7	7.4	5.2	1027.7	花崗岩 中生代白帯紀 北上山地	
378	SI08-09埋土	石剣か	NB	7.3	2.5	1.2	38.2	頁岩 中生代 北上山地	
379	SI09埋土	磨石	IB1	12.4	9.1	6.4	1045.6	花崗岩 中生代白帯紀 北上山地	
380	SI10埋土	磨石	IB1	11.3	10.3	7.5	1236.9	花崗岩 中生代白帯紀 北上山地	
381	SI10埋土	磨石	IB1	13.5	8.6	5.8	1073.5	閃緑岩 中生代白帯紀 北上山地	
382	SI10埋土	磨石	IB1	8.0	5.3	4.0	304.6	花崗岩 中生代白帯紀 北上山地	
383	SI10埋土	台石	IVC	24.5	19.0	4.3	2253.7	凝灰岩 中生代白帯紀 原山地層 北上山地	
384	SI10埋土	磨石	IIA2	10.4	13.2	1.5	357.0	砂岩 中生代 北上山地	
385	SI10埋土	磨石	IB2	16.3	7.7	6.4	917.1	閃緑岩 中生代白帯紀 北上山地	
386	SK15埋土	搔削器	IC2	2.60	1.55	0.65	2.27	頁岩 中生代 北上山地	
387	SK26埋土	石匙	IB2	3.30	2.95	0.60	4.10	頁岩 中生代 北上山地	
388	SK28埋土	石斧	IIA	6.8	5.2	2.6	155.3	ヒン岩 中生代白帯紀 北上山地	
389	SK28埋土	石斧	IIIC	8.4	4.2	2.3	155.0	頁岩 中生代 北上山地	再利用か
390	SK29埋土	磨石	IB1	13.3	7.6	4.7	772.3	はんらい岩 中生代白帯紀 北上山地	
391	SK29(SI10と重)埋土	磨石	IB1	9.8	8.8	3.2	472.6	はんらい岩 中生代白帯紀 北上山地	
392	SK29埋土	磨石	IB1	13.2	6.9	4.3	657.3	はんらい岩 中生代白帯紀 北上山地	
393	SK29埋土	磨石	IB1	11.8	9.5	5.8	992.7	花崗岩 中生代白帯紀 北上山地	
394	SK29(SI10と重)埋土	磨石	IB2	19.3	7.0	6.8	1452.8	閃緑岩 中生代白帯紀 北上山地	
395	捨て場1P層	磨石	IB2	13.3	6.2	5.2	749.5	閃緑岩 中生代白帯紀 北上山地	
396	捨て場2層	磨石	IB2	14.5	8.1	4.0	884.8	細粒はんらい岩 中生代白帯紀 北上山地	
397	捨て場2層	磨石	IB1	14.3	8.1	6.5	1189.0	花崗岩 中生代白帯紀 北上山地	
398	SI03とSI04の間整地層	石鏃	IA2	2.4	1.6	0.3	0.71	頁岩 中生代 北上山地	付着物あり
399	SI03とSI04の間整地層	石鏃	IA2	2.5	1.6	0.3	1.01	頁岩 中生代 北上山地	
400	SI03東側 遺構外2層	石斧	IIA	7.0	3.3	1.5	52.3	砂岩 中生代 北上山地	ノミか
401	SI03東側 遺構外2層	石斧	IIIC	8.2	5.2	2.1	167.0	砂岩 中生代 北上山地	鏃か
402	SI06とSI04の間	打撃石器	IE2	13.7	8.6	3.7	645.5	細粒花崗閃緑岩 中生代白帯紀 北上山地	

第9表 銭貨観察表 (H27)

掲載番号	出土地点	層位	銭貨名	銭貨名2	初鋳年(鋳造年)	材質	厚さ(mm)	重量(g)	その他
403	SK16	埋土	寛永通宝	古寛永	1636	銅	1	2.66	
404	SK16	埋土	寛永通宝	古寛永	1636	銅	1	2.05	
405	SK16	埋土	寛永通宝	古寛永	1636	銅	1	2.46	
406	SK16	埋土	寛永通宝	新寛永	1668	銅	1	1.96	背無
407	SK16	埋土	寛永通宝	新寛永	1668	銅	1	3.07	背文
408	SK16	埋土	寛永通宝	新寛永	1668	銅	1	3.12	背文
409	SK16	埋土	寛永通宝	新寛永	1668	銅	2	3.94	背文

VI 自然科学分析

千鷲IV遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

千鷲IV遺跡は、岩手県宮古市重茂第12地割ほか（北緯39° 31' 59"、東経142° 1' 44"）に所在する。測定対象試料は、堅穴住居跡、焼成遺構から出土した炭化物5点である（表1）。

2 測定の意義

出土遺物が少ないため、遺構の年代を決定する根拠の一つとする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置 (NEC社製) を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい(^{14}C が少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2 較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

6 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料5点のうち、3を除く4点の ^{14}C 年代は、4130 \pm 30yrBP(試料4)から3990 \pm 30yrBP(試料1)の間にある。暦年較正年代(1σ)は、4点全体で縄文時代中期後葉から末葉頃に相当する(小林編2008)。

試料3の ^{14}C 年代は150 \pm 20yrBP、暦年較正年代(1σ)は1675~1942cal ADの間に4つの範囲で示される。なお、この試料の較正年代については、記載された値よりも新しい可能性がある点に注意を要する(表2下の警告参照)。

試料の炭素含有率は60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-152644	1	2号住居跡柱穴埋土 下層	炭化物	AAA	-26.90 \pm 0.27	3,990 \pm 30	60.82 \pm 0.22
IAAA-152645	2	3号住居跡燻跡 5層	炭化物	AAA	-24.72 \pm 0.40	4,060 \pm 30	60.31 \pm 0.21
IAAA-152646	3	5号住居跡 埋土	炭化物	AAA	-28.18 \pm 0.30	150 \pm 20	98.15 \pm 0.29
IAAA-152647	4	6号住居跡燻跡 埋土	炭化物	AAA	-27.13 \pm 0.28	4,130 \pm 30	59.81 \pm 0.21
IAAA-152648	5	1号焼成遺構 埋土	炭化物	AAA	-27.40 \pm 0.27	4,120 \pm 30	59.90 \pm 0.23

[#7771]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-152644	4,030 \pm 30	60.58 \pm 0.21	3,994 \pm 28	2565calBC - 2525calBC (44.3%) 2496calBC - 2475calBC (23.9%)	2573calBC - 2469calBC (95.4%)
IAAA-152645	4,060 \pm 30	60.34 \pm 0.21	4,062 \pm 28	2831calBC - 2821calBC (4.5%) 2631calBC - 2567calBC (48.4%) 2522calBC - 2497calBC (15.3%)	2839calBC - 2814calBC (7.9%) 2676calBC - 2488calBC (87.5%)
IAAA-152646	200 \pm 20	97.51 \pm 0.28	150 \pm 23	1675calAD - 1693calAD (11.4%)* 1728calAD - 1778calAD (33.1%)* 1799calAD - 1812calAD (8.6%)* 1919calAD - 1942calAD (15.2%)*	1667calAD - 1707calAD (16.2%)* 1719calAD - 1783calAD (35.2%)* 1796calAD - 1820calAD (10.9%)* 1832calAD - 1883calAD (15.3%)* 1914calAD - 1950calAD (17.8%)*
IAAA-152647	4,160 \pm 30	59.55 \pm 0.21	4,129 \pm 28	2858calBC - 2831calBC (13.7%) 2821calBC - 2810calBC (5.5%) 2752calBC - 2722calBC (14.5%) 2701calBC - 2631calBC (34.5%)	2871calBC - 2801calBC (27.0%) 2780calBC - 2617calBC (63.9%) 2610calBC - 2582calBC (4.6%)
IAAA-152648	4,160 \pm 30	59.60 \pm 0.22	4,117 \pm 30	2856calBC - 2812calBC (20.9%) 2747calBC - 2725calBC (9.3%) 2698calBC - 2621calBC (37.9%)	2866calBC - 2804calBC (24.9%) 2776calBC - 2578calBC (70.5%)

[参考値]

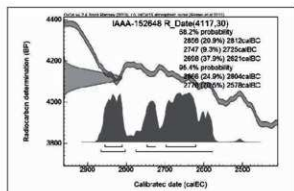
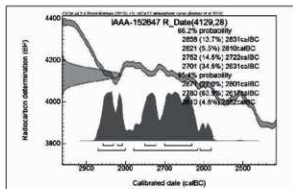
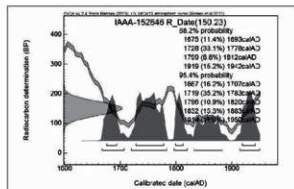
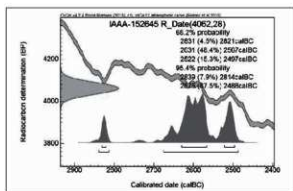
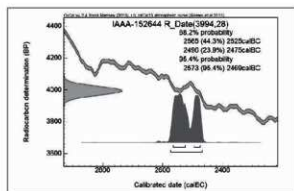
* Warning! Date may extend out of range

Warning! Date probably out of range

(この警告は較正プログラムOxCalが発するもので、試料の ^{14}C 年代に対応する較正年代が、当該暦年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。)

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
 Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363



[図版] 暦年較正年代グラフ (参考)

Ⅶ 総 括

野外調査及び室内整理作業で得られた成果と分析鑑定によって明らかになったこと、周辺遺跡の調査事例などを合わせて現段階で推察される遺跡の内容について以下に列記して調査のまとめにしたい。

遺跡範囲は縄文時代から水源として利用されていたと考えられる黒石沢及び殿畑林道から北側の東西約400m、南北約150mとなる。遺跡の西半部は黒石沢沿いの南側に面した山裾に広がる緩斜面地形、東半部は山の斜面部分とそこから南側へと舌状に張り出す小規模な丘陵になっている。平成26年度には西半部を、平成27年度には東半部を調査している（第5図）

<平成26年度調査>

・検出された遺構には縄文時代の竪穴住居跡1棟（中期）、焼土1基、土坑8基、遺物集中区3地点等がある。あまり遺構は多くなかったが、土器5箱、石器類は約10箱が出土している。

・出土した土器をみると縄文土器・弥生土器があり、古代の土師器・須恵器や中世陶磁器は出土していない。縄文土器は前期と中期が多く後期はごく微量、晩期も少量である。前期の土器は大木1式及びその前後の段階、それから大木6式段階のものが中心であった。

中期は大木7a・7b式段階のものは少なく大木10式の段階になって出土量も多くなっている。大木8a・8b式の土器は見られない。後期は粗製土器が数点出土していた。

弥生時代初頭（縄文時代晩期を含む）から弥生時代前期末頃までの土器が比較的多量出土しているが、この時期より新しい遺物は見られなくなる。

・出土遺物を見ると縄文時代前期から弥生時代の前期までは、断続的に利用されていた地であることが分かる。竪穴住居跡は1棟（中期）しか検出されていないが、多くの竪穴住居跡が分布するであろう居住域は調査区よりも北側の山裾に近い場所の可能性が高い。

<平成27年度調査区>

・検出された遺構には縄文時代の竪穴住居跡7棟（中期後葉）、土坑12基、溝跡1条、屋外炉1基、捨て場1箇所がある。縄文土器5箱、石器類は12箱出土した。他に、平安時代の竪穴住居跡が1棟、中世の可能性が高い竪穴建物跡1棟、近世墓1基があり、土師器が数点と銭貨が7枚出土している。

・出土した土器を見ると、縄文時代中期後葉の土器が殆どのものである。あまり特徴的な部位の残る資料は少ないが、大木9式を中心とした時期にほぼ限定されると思われる。これ以外の時期になると縄文時代晩期末～弥生時代初頭頃の土器が1点出土していること、破片により判然としないが、胎土に繊維を含む縄文時代前期の土器片が微量ある。多くの土器は竪穴住居跡の埋土から出土したものであるが、床面に置かれたままの状態出土するといったものは殆ど無く、竪穴住居跡の重複によりどちらに伴うものか厳密に分けられない資料もあった。

・石器を見ると礫石器、とくにも磨石が圧倒的に多かった。剥片石器は数が少ないだけでなく、石器製作の際に出る剥片も殆ど出土しなかった。他に礫石器の中で所謂凹石・敲石とされる石器も殆ど出土しなかった。こうした石器組成の偏った内容は、生業の在り方を反映している可能性があるのだが、剥片石器（特に石鏃）が少ないのは狩猟が活発ではなかったことが想定される。貯蔵穴が複数確認されているので堅果類の採集活動については他と変わりなく行われていたといえるだろうが、凹石

や、敲石が少ないことはどういった意味を持つのであろうか、魚貝類は出土していないが、遺跡の立地から漁撈を行っていたことは想像に難くないので、本遺跡の礫石器は海産物加工に使用されていた可能性も無いとはいえない。

・堅穴住居跡には「複式炉」が設けられていた。残存状態の良いものが多かったが、長軸方向で最大2.3mと大形のものが多かった、貯蔵穴も大形で深いものが見られ、これらは本県沿岸部の特徴が良く表れていたといえるだろう。

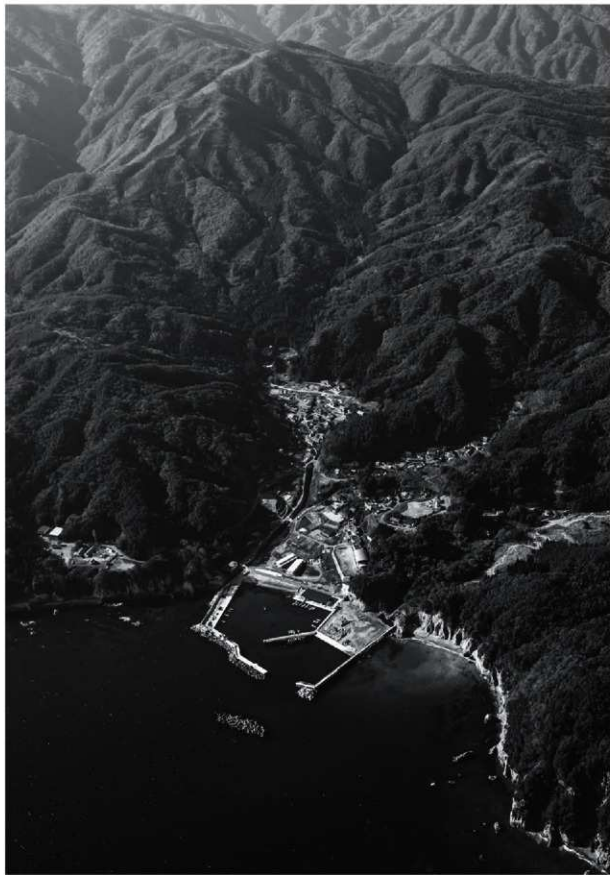
・今回の調査区は縄文時代中期後葉の集落の様相がとても解りやすい状態で見つっている。先ず堅穴住居跡が造られる「居住域」は、山裾から舌状に南側（海側）へと張出す小丘陵の平坦面に占地している。次に食糧を蓄えておく貯蔵穴は「居住域」のすぐ北側にある山の中腹から山裾にかけて複数確認され「貯蔵穴群」を成している。山の中腹にも堅穴住居跡が2棟見つってはいるが貯蔵穴とは殆ど重複していない。居住域のある小丘陵の下には小規模な沢地形が発達しており、その中で南側の沢としたものには土器や石器類を捨てたものが溜まり、小規模ながら「捨て場」が形成されていた。周囲をかなり広く調査しているが「墓域」「狩猟の場」となるようなものは見つっていないので、これらは集落からは少し離れたところに造られていたと考えられる。

・平安時代の遺構は堅穴住居跡が1棟のみの検出であった。この時期の住居の分布は調査区外の南側、現在の千鶴集落と重複している可能性がある。周囲に鉄生産関連の施設や遺物は見つからなかった。

・中世の堅穴建物跡は山の中腹に1棟確認されている。斜面に設けられていたため残りが悪かった。他にも流失してしまったものがあつたのかもしれない。また調査区外の北西側のほうには山の斜面が緩やかなところがあり、何らかの遺構が残っている可能性がある。

・旧千鶴小学校にあたる千鶴遺跡は縄文時代前期初頭を主体とする遺跡であり、本遺跡とは时期的に重複が少ない。縄文時代の中でも時期により千鶴地区内で集落の場所が変わっていたことが窺える。

写真図版



遺跡のある宮古市重茂の千鷲地区

写真図版1 千鷲Ⅳ遺跡遠景（東から）



上が東 千鶏漁港から南西にある集落の最奥の本遺跡



上が東 調査区を直上から



中央区トレンチ①(南から)



中央区トレンチ②(南から)



中央区トレンチ③(南から)



中央区東トレンチ(西から)



東区の西半部検出状況(東から)



東区の東端から中央付近検出状況(東から)



東区試掘トレンチ(西から)



東区西端トレンチ平面(北から)

写真図版3 調査区近景ほか



南区 (全景) トレンチ1~4 (北東から)



南区トレンチ2 (西から)



基本土層 西区 (西から)



S101断面 (西から)



S101平断面 (南から)



S101 炉平面 (南東から)



S101 炉断面 (南西から)



SK01 平面 (北から)



SK01 断面 (北から)



SK02 平面 (南から)



SK02 断面 (南から)



SK03 平面 (北東から)



SK03 断面 (南西から)

写真図版5 S101 炉跡、土坑1



SK04平面 (西から)



SK04断面 (南西から)



SK05平面 (西から)



SK05断面 (東から)



SK06平面 (東から)



SK06断面 (南東から)



SK07平面 (北東から)



SK07断面 (南東から)



SK08 平面 (東から)



SK08 断面 (南東から)



SK09 平面 (東から)



SK09 断面 (南東から)



SK10 平面 (南から)



SK10 断面 (南から)



SK11 断面 (南東から)



SK12 平面 (東から)



SK12断面 (東から)



SK13平面 (南から)



SK13断面 (南から)



SN01平面 (南から)



SN01断面 (南から)



SX01平面 (北東から)



SX01断面 (東から)



SX02平面 (北西から)



SX02断面 (東から)



SX02断面 (北東から)



SX03断面 (北東から)



SX03断面 (北東から)



SX03遺物出土状況2



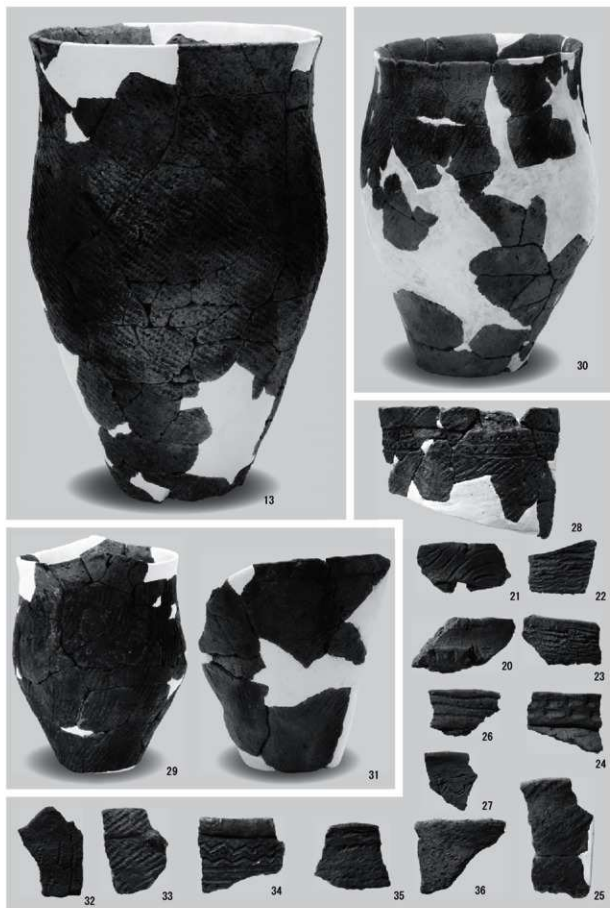
SX03遺物出土状況1



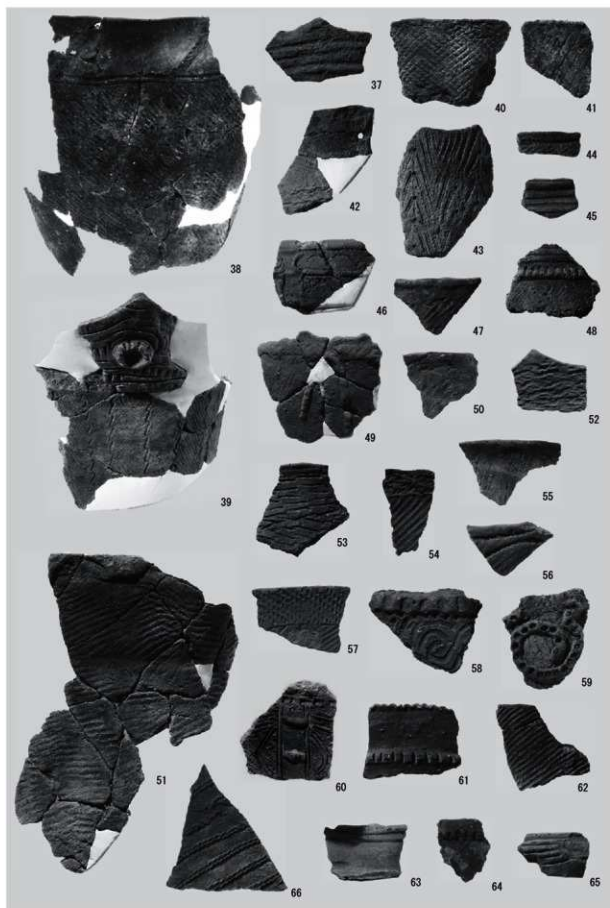
SX03遺物出土状況3



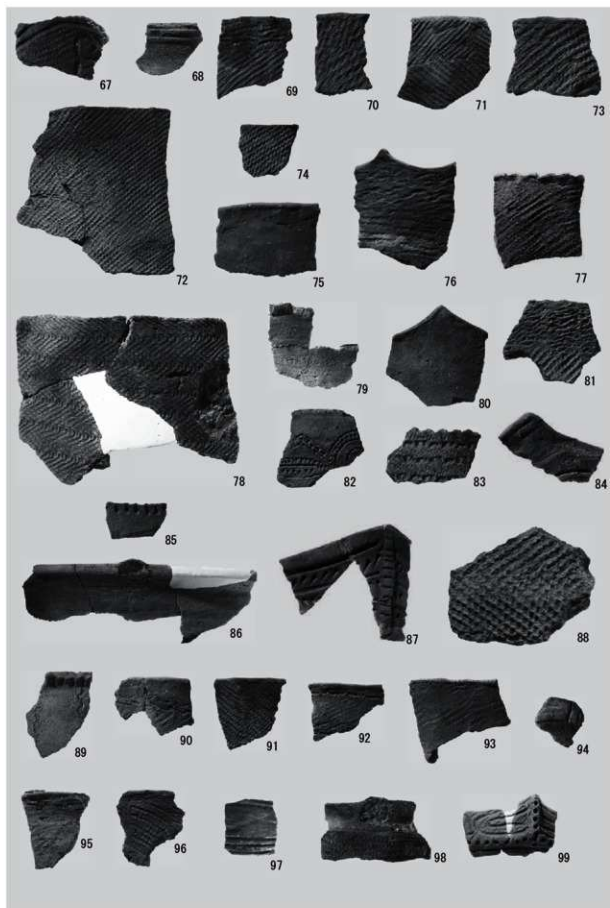
写真図版 10 出土遺物 1



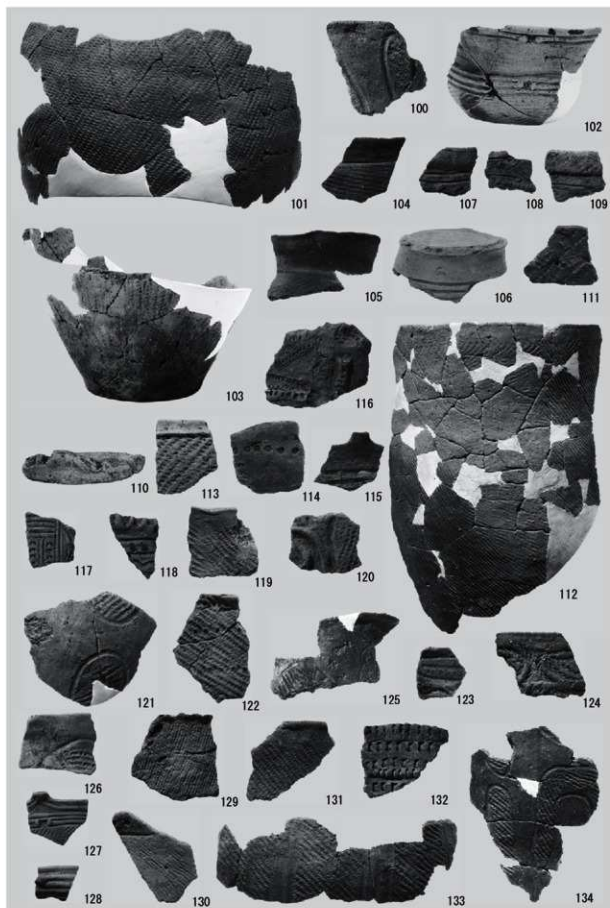
写真図版 11 出土遺物 2



写真図版 12 出土遺物 3



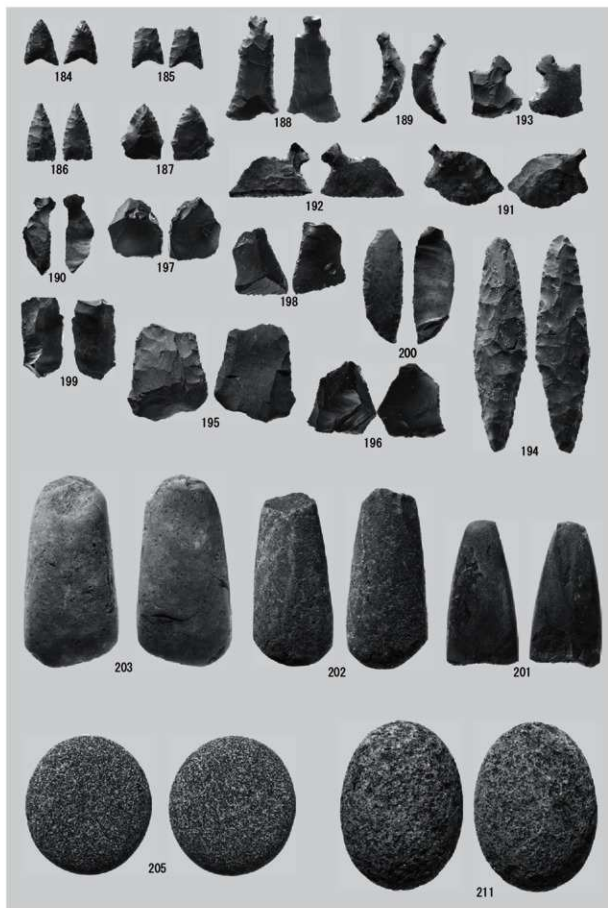
写真図版 13 出土遺物 4



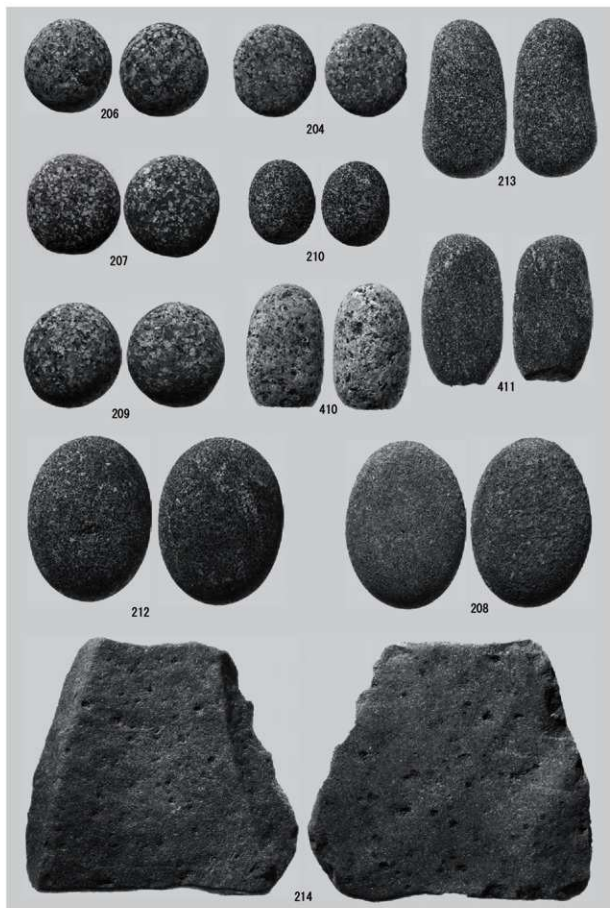
写真図版 14 出土遺物 5



写真図版 15 出土遺物 6



写真図版 16 出土遺物 7



写真図版 17 出土遺物 8



遺跡遠景（南東から）



集落奥の伐採された斜面部が平成27年度調査区（南東から）



直上写真（上が西、下が東で海を臨む）



調査区近景



調査区近景 (南東から)



トレンチL基本土層 (南から)



S102断面 (西から)



S102断面 (南から)



S102平面 (西から)

左下：S102炉跡平面
(南西から)

右下：S102炉跡断面
(南から)





S102平面 (西から)



S103断面 (南東から)



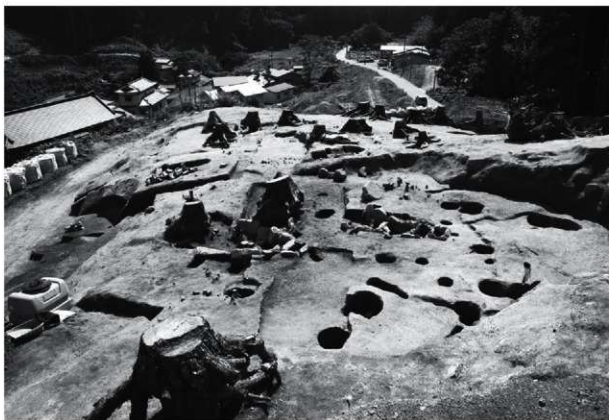
S103炉跡断面 (西から)



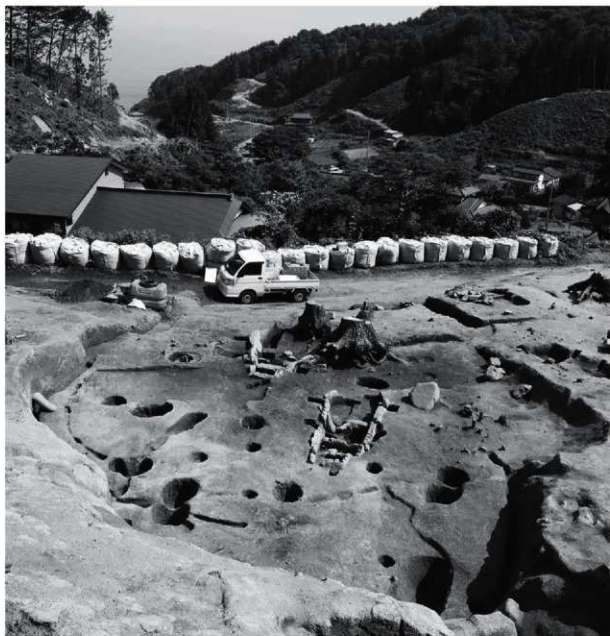
S103炉跡断面 (南から)



S103平面 (東から)



S104・10平面 (東から)



S104・10平面 (北から)



S104・10断面 (西から)



S104 炉跡平面 (南から)



S104 炉跡断面 (西から)



S104 炉跡断面 (南西から)



S104・10は表土直下で検出された



S104・10周溝



S105平面 (南西から)



S105内焼土平面 (南から)



S105断面 (南から)



S106平面 (南から)



S106断面 (南から)



S106 炉跡平面 (西から)



S106 炉跡断面 (南から)



S107・08 平面 (南から)



S107 炉跡平面 (西から)



S107 炉跡断面 (南から)



S108平面 (南から)



S107・08断面 (南から)



S107・08断面 (西から)



S109平面 (南から)



S109断面 (南から)



S109炉跡断面 (北から)



S109炉跡断面 (南から)



S I 09 炉跡断面 (西から)



S I 09 炉跡断面 (南から)



S I 04・10 平面 (南から)



S I 10 炉跡平面 (南から)



S I 10 炉跡断面 (南から)



S110 炉跡断面 (西から)



S104・10 断面 (南から)



SK14 平面 (南から)



SK14 断面 (南西から)



SK15 平面 (北から)



SK15 断面 (北東から)



SK 16 平面 (南から)



粘土採掘跡断面北端部 (南から)



SK 17 平面 (南から)



SK 17 断面 (西から)



SK 18 平面 (西から)



SK 18 断面 (西から)



SK 19 平面 (北から)



SK 19 断面 (南から)



SK 20 平面 (北から)



SK 20 断面 (東から)



SK 22 平面 (北から)



SK 22 断面 (北東から)



SK 23 平面 (東から)



SK 23 断面 (西から)



SK 24 平面 (南から)



SK 24 断面 (東から)



SK 26 平面 (西から)



SK 26 断面 (南から)



SK 28 平面 (東から)



SK 28 断面 (東から)



SK 29 平面 (北から)



SK 29 断面 (南から)



SK 23 出土遺物 (南から)



SK 26 断面 (東から)



屋外炉跡平面 (南から)



屋外炉跡断面 (南から)



屋外炉跡断面 (西から)



SD01平面 (西から)



SD01断面 (南から)



捨て場断面 (南から)



捨て場平面 (南東から)



北側の沢跡 (南から)

写真図版 35 屋外炉跡、溝跡、捨て場、沢跡



中央部の沢跡 (西から)



南側の沢跡 (南から)



山頂部 (北から)



山の中腹部 (南西から)



トレンチM (西から)



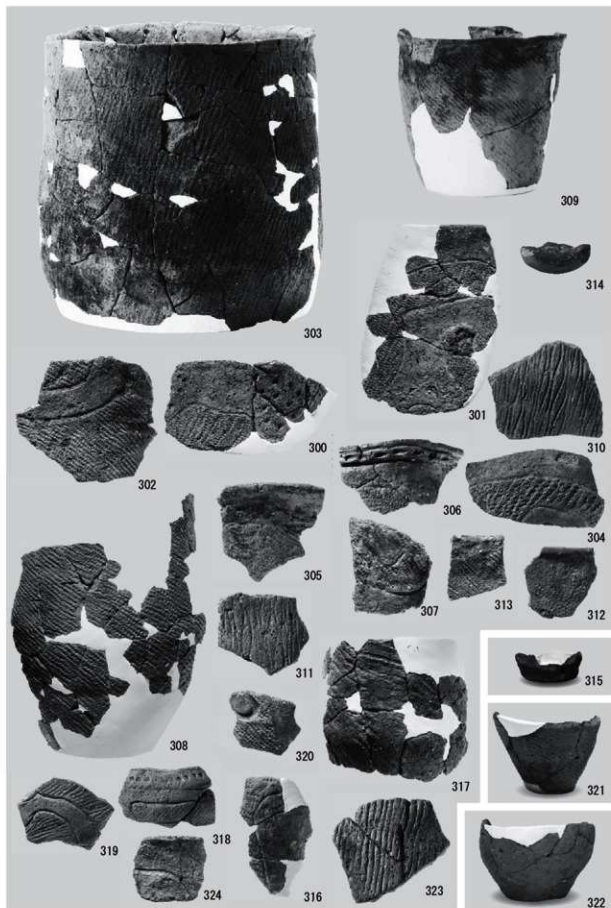
トレンチR (南から)



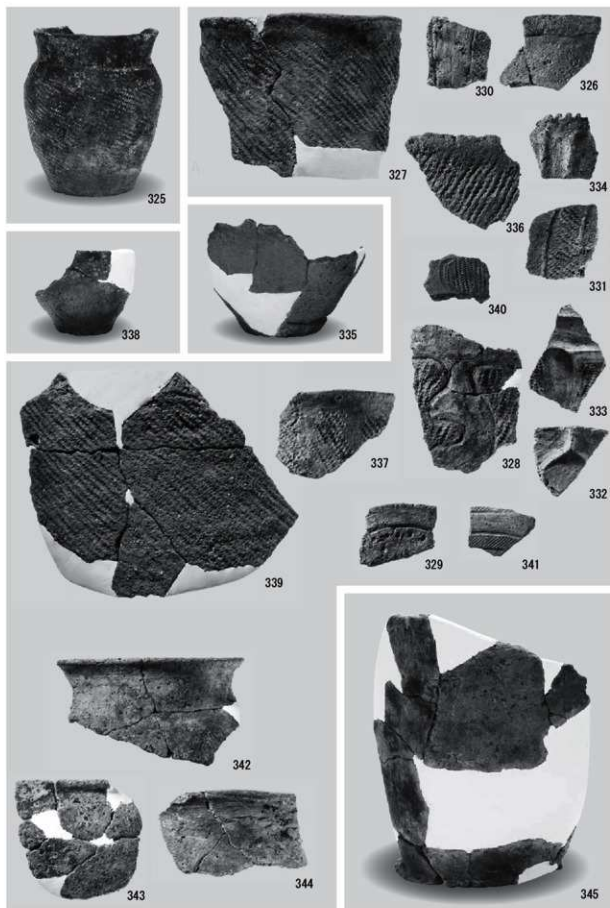
トレンチB (南東から)



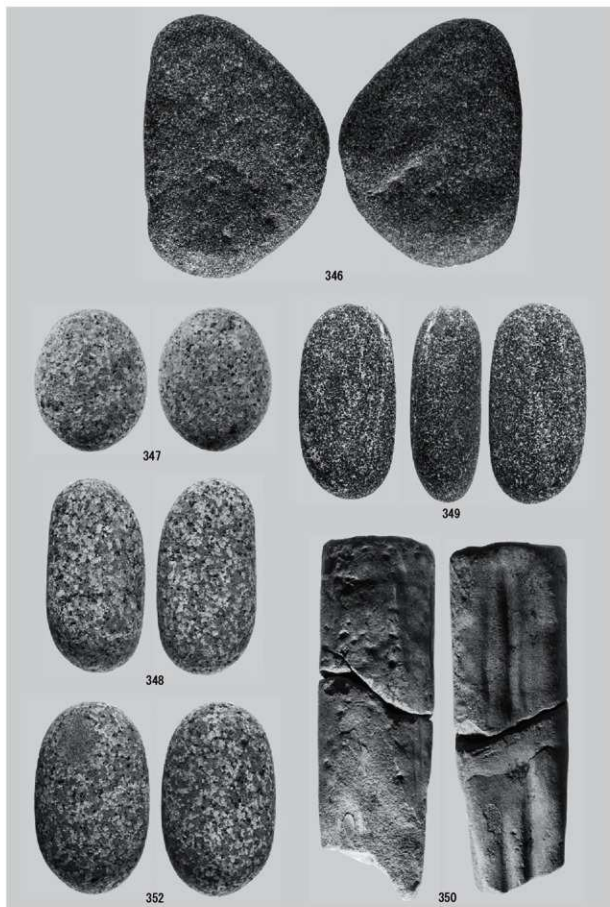
トレンチP (南から)



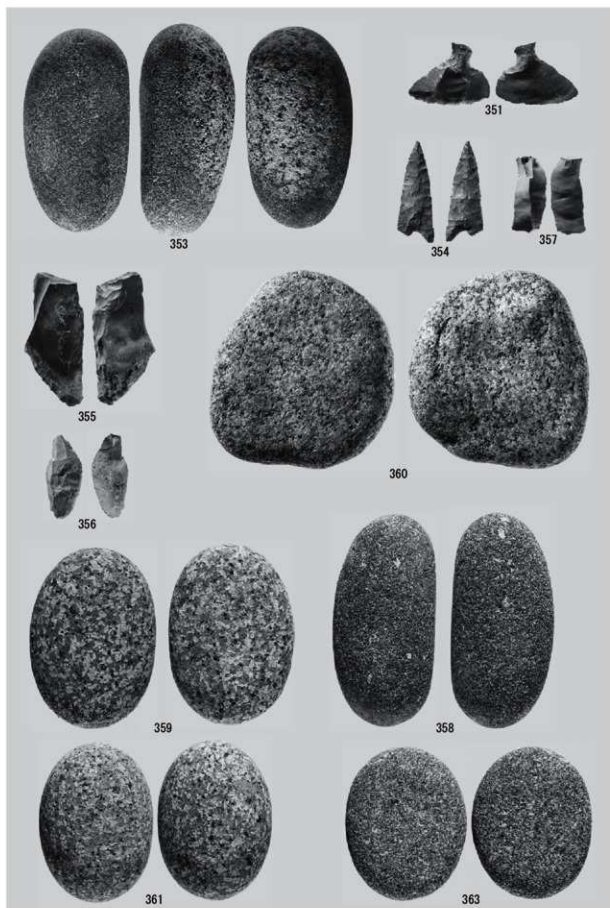
写真図版 37 出土遺物 9



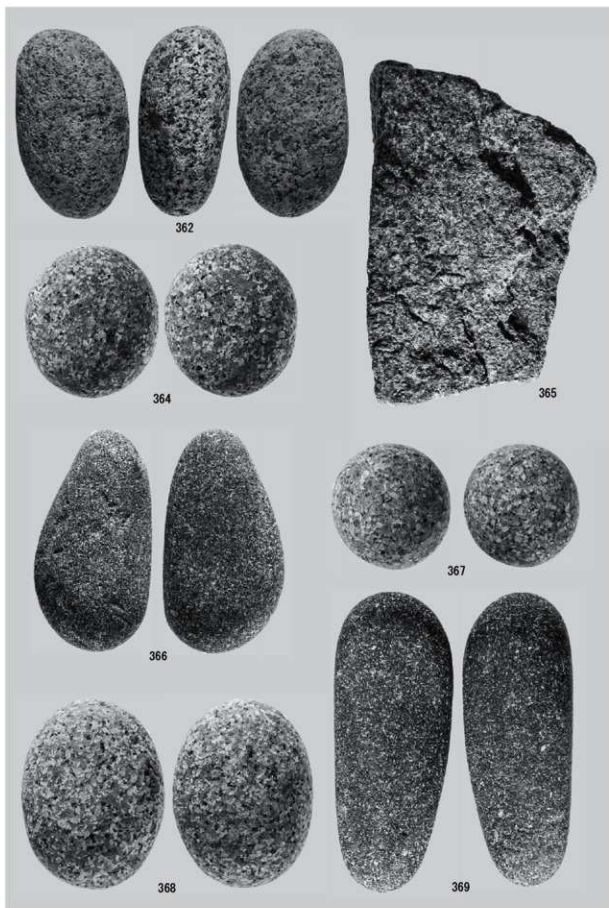
写真図版 38 出土遺物 10



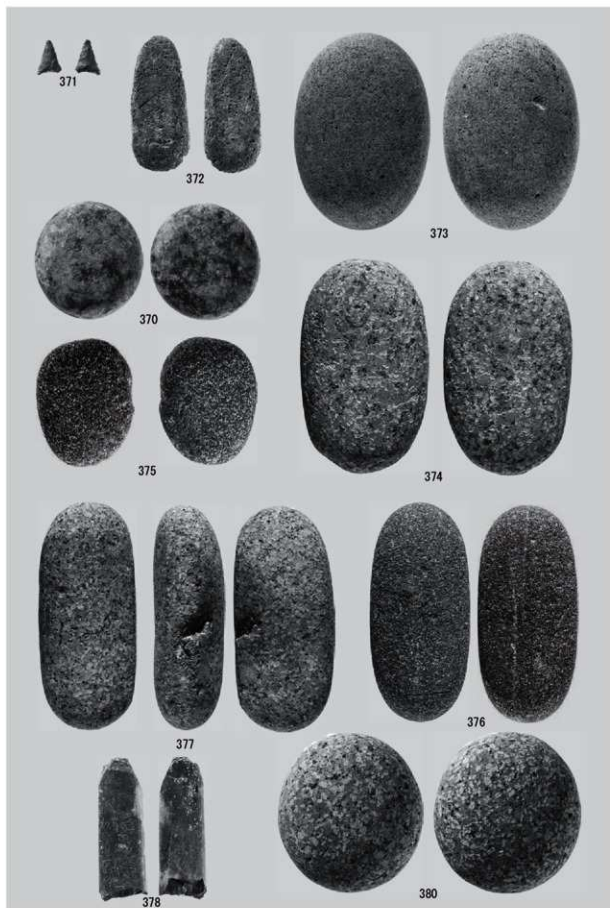
写真図版 39 出土遺物 11



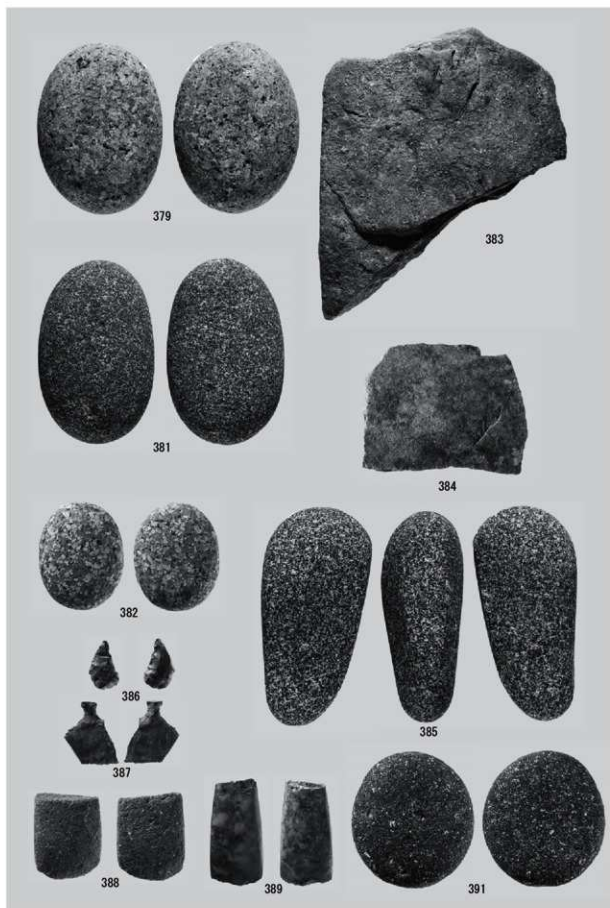
写真図版 40 出土遺物 12



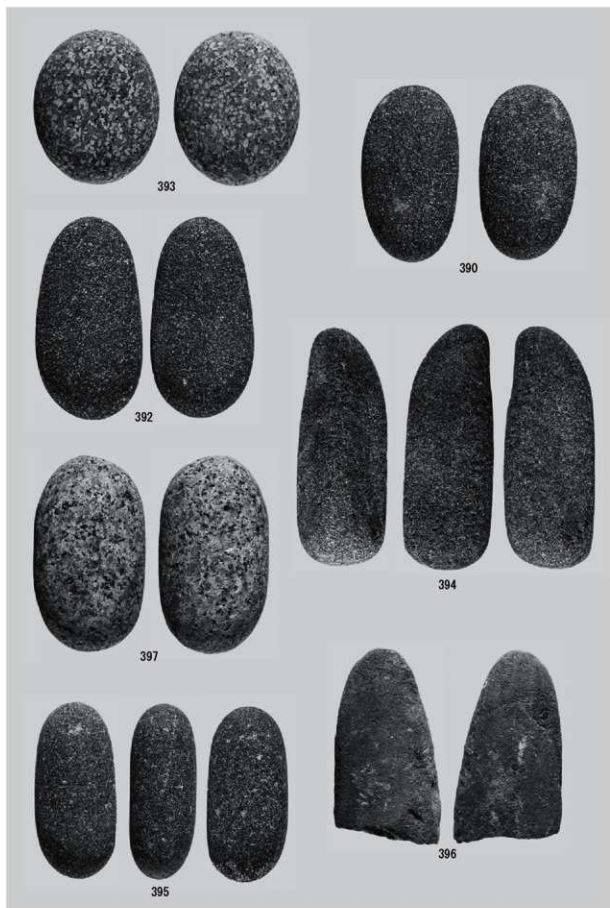
写真図版 41 出土遺物 13



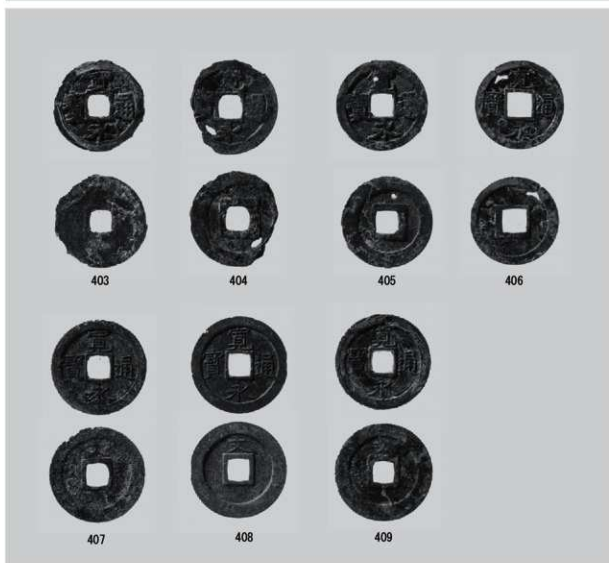
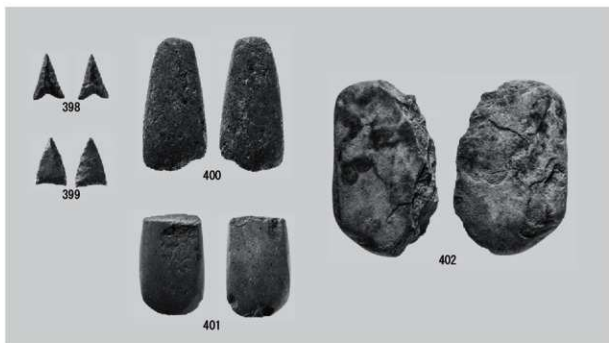
写真図版 42 出土遺物 14



写真図版 43 出土遺物 15



写真図版 44 出土遺物 16



写真図版 45 出土遺物 17

報告書抄録

ふりがな	ちけい4いせきはつつちょうさほうこくしょ							
書名	千歳IV遺跡発掘調査報告書							
副書名	地域連携道路整備事業主要地方道重茂半島線関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第663集							
編著者名	杉沢 昭太郎							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL.(019)638-9001							
発行年月日	西暦2017年3月10日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
千歳IV遺跡	宮古市重茂13地割55-1ほか	03202	L675-0248	39度 31分 59秒	142度 1分 44秒	2014.09.16 ～11.07 2015.04.09 ～07.30	2,000㎡ 8,400㎡	主要地方道重茂半島線地域連携道路整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
千歳IV遺跡 平成26年度	集落	縄文時代 弥生時代	竪穴住居跡 1棟 主な遺構なし	縄文土器 石器 弥生土器		縄文時代前期、中期、晩期の遺物が散布 弥生時代初頭から前期の遺物が散布		
千歳IV遺跡 平成27年度	集落	縄文時代 平安時代 古代末～中世 近世	竪穴住居跡 7棟 土坑 11基 捨て場 1箇所 竪穴住居跡 1棟 竪穴建物跡 1棟 墓 1基	縄文土器 石器 土師器 銭貨		縄文時代の遺構・遺物は中期後半に限定される		
要約	<p>平成26年度の調査区は山裾の緩斜面部にあり、竪穴住居跡は1棟のみの検出であったが、縄文時代から弥生時代にかけて時期幅の広い遺物が出土している。居住域は調査区よりも少し標高の高い西側に想定される。</p> <p>平成27年度の調査区は山の斜面部とそこから舌状に張り出す小さな丘陵部にあたる。縄文時代中期後半の小規模な集落が広がっていた。丘陵部には竪穴住居跡が複数棟あり、貯蔵穴は山裾から山の中腹にかけての斜面部に分布する。丘陵部の下には小規模な沢地形を成すところがあり、そこに土器や石器が廃棄されている。このように縄文時代中期後半という限定された時期の集落が良好な状態で残っており、集落内での「場」の利用状況や、時期による盛衰を知ろうと良い成果が得られた。</p>							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 663 集

千鷲IV遺跡発掘調査報告書

地域連携道路整備事業主要地方道重茂半島線関連遺跡発掘調査

印刷 平成 29 年 3 月 1 日

発行 平成 29 年 3 月 10 日

編集 (公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 盛岡市下飯岡11地割185番地
電 話 (019) 638-9001

発行 岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター
〒027-0072 宮古市五月町1-20
電 話 (0193) 64-2221
(公財) 岩手県文化振興事業団
〒020-0023 盛岡市内丸13番1号
電 話 (019) 654-2235

印刷 鈴木印刷株式会社
〒023-1101 奥州市江刺区岩谷堂字松長根15-5
電 話 (0197) 35-4515